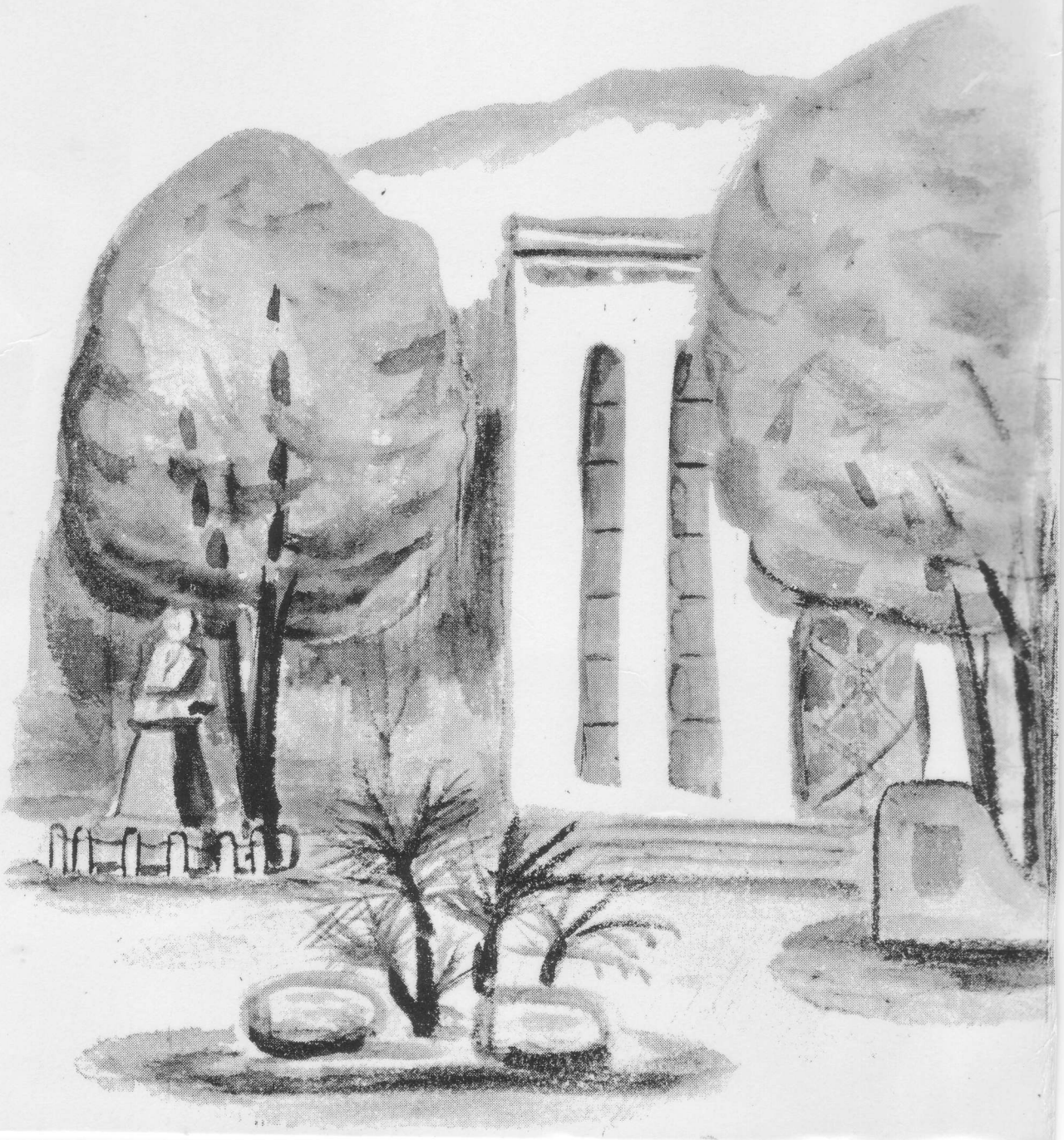
神戸大学交響楽団十周年記念誌

目　次

1. 挨　　拶
2. 戦前通史
3. 寄　　稿
　—戦前の先輩による—
4. 演　奏　会
5. 会　　計
6. 楽器、楽譜
7. 合　　宿
8. オケの思い出
　—戦後の先輩による—
9. 神大オケの諸問題
10. 名　　簿



昭和33年　第8回定期演奏会・国際会館初ステージ

曲目　ベートーヴェン作曲　交響曲第三番「英雄」

昭和34年　　第9回定期演奏会

曲目　グリーク作曲「ペールギュント第1組曲」

昭和34年　第9回定期演奏会　於 国際会館

曲目　ベートーベン作曲交響曲第五番「運命」

神戸大学交響楽団十周年記念誌の発行に際して

神戸大学々長　福　田　敬　太　郎

神戸大学交響楽団十周年記念誌発行されるに際し心から御慶び申し上げます。想えば十年前この景勝の地六甲にうぶ声を上げたサークルがいかに成長するであろうかは、われわれの興味と期待の的でありました。しかも数年前小さな音楽サークルから脱皮して初めて神戸市中で演奏会を開き始めたころ、その動きに驚きの目を見はったのであります。さらに最近では安保改定で世の中が騒然たる裡に人々の荒れた心に美しい響きをもって穏やかな情緒を与えたあの楽しい催し、さらに文化サークルの筆頭になってこのフエスティバルにおける演奏など、このサークルの活動はいよいよ発展していったのであります。

人生において二つのことを両立させることは非常に難しい。学内において真剣に学問と取り組み一方厳しいサークル活動にわれを忘れている若者たちにわれわれは敬意と羨望をすら覚えます。そしてまた学問に芸術に真剣な情熱を続けることは若者の特権でありましょうが、勿論それにもまた種々の困難を含んでいることと思います。それに屈せず力強く活動を続けて来たことに対して、再びここに敬意を表するものであります。さらにいよいよ若き諸君の情熱を知性とによって種々の困難を排して、はなばなしい活動を続けることを期するものであります。（昭和35年12月７日）

お祝いのことば

神戸大学名誉教授　田　中　金　司

この間、部員数名が訪ねてこられ、神戸高商時代初めて演奏会を備してから45周年、戦後神戸大学交響楽団として復活してから10周年になるので記念誌を出すからわたくしにも何か書くようにとのことであった。その時部の記録などを見せてもらいながら、思出話に花を咲かせたが往時を回顧して懐しさに堪えないものがあった。わたくしがこの交響楽団に関係したのは大正14年同交響楽団がグリークラブおよびマンドリングラブと一緒に音楽部として発足したときにはじまる。ちょうどそのころわたくしは３カ年半に亘る欧米留学の旅を終え帰ってきて間もないときであり、あちらで親しんだ音楽が吹き込まれてあるレコードを集めて持り帰り、それを家に遊びにくる学生諸君と一緒に聴いてたのしんだりしていたので、部員はわたくしをひとかどの音楽の愛好家と見誤り、わたしに初代顧問になれというのである。なにしろドイツ生活をはじめたころ、「オペラを見に行く」といって下宿の小母さんから」オペラを見に行く」などというものではない。「オペラを聴きに行く」といわなくてはいけないと注意されたほどの人間である。柄にもないので辞退したが部員はどうしてもなれというので引き受け新庄博教授が顧問になるまで、可成り長い間、部に関係していた。部員諸君の熱意、関西在住の音楽家諸氏の指導、先輩の後援とが相俟って目覚しい発展を遂げ多くの人々に親しまれその存在の意義を発揮してきた。この交響楽団をここまで育ててきた人々に対して心から感謝の意を表するとともに今後一層の発展を祈ってやまない。（昭和35年11月21日）

記念誌発行に際して

部長　経営学部四年　藤　原　　興

十年前といえば、敗戦の荒廃より、ようやく復興のきざしが現われ始めたとはいえ、音楽、とくにクラシック音楽などが、人々の心を把えるには、ほど遠い時代であったろう。そのすさんだ時代に、六甲台の倉庫の中から、半分使いものにならぬ楽器を引っぱり出し、神戸大学交響楽団の再建を計られた先輩諸氏の努力には、今さらながら敬意の念を禁じ得ないものがある。オーケストラなるものをやろうとすれば、まず人間と楽器がなければならない。おそらく当時の人々は、その最小限必須なものの調達に、頭をなやまされたことだろう。50人、60人の大オーケストラを夢見つつ。それが丁度10年後の現在、二管編成50数名という有数のクラブの一つに数え上げられるに至った。この記念すべき年に、神戸大学において も最高学年として、この記念誌発行にも、微力を尽せたことを、この上ない喜びと感じる。

歴史を知ることは、単に過去を知るに止まるべきものではない。過去を知った上で、現在を分析し、さらに未来への方向付けが行なわれなければならない。従ってこの記念誌は、単なる歴史の記述に終るものではないのであって、ここには、現在の神大オケの姿が浮き彫りされており、将来の進むべき道が示されている筈である。その意味において、この記念誌の背負う使命は、誠に重大なるものであると考える。さらに、この記念誌のもつ意味に、戦前の先輩諸氏とのつながり、ということを見落すわけにゆかぬ。大正初期といえば、洋楽などやり出したといえば、ハイカラ野郎として衆人の注目を浴びたことだろう状況の中で、他校に先がけてワグネルソサエティとして発足したことは、45年を経た現在、われわれも大いに誇り得るものであろう。

しかも昭和の初期に、すでにメンデルスゾーンのバイオリン・コンチェルトをやり、ラロのチェロ・コンチェルトをやり、南満州演奏旅行をやったなどというのは、まさにわれわれには驚異であった。さらに当時の先輩諸氏が、現在なお、多数われわれの身近に御活躍中で、種々な面で御援助いただけることは、この上ない勇気づけとなるものである。これを契機として、戦前、戦後を含む先輩による、オケ後援会の結成気運もある。そうなれば、この記念誌の功績は誠に大きいといい得るだろう。

最後に編集委員長四本君を始め10数名の編集委員諸君のこの記念誌に対する努力に敬服する。この種の仕事の困難なことは、実際仕事にたずさわった者にしか分らない。資料集めから編集に至るまで、連日の難仕事に耐え、神大オケ部員にふさわしいファイトでもって、やり遂げてくれたことは、誠に感謝にたえない。

記念誌発行によせて

神戸大学交響楽団十周年記念誌
編集委員長　四本喬介

戦争で忘れられていた神商オーケストラが、昭和26年、神戸大学交響楽団として復活し、ここめでたく十周年を迎え、さらに今後増々発展すべくその体制を整えつつあることは、真に快事といわねばならぬと思います。

と同時に、われわれは、神大響の基盤はすでに出来上り、斯のごとく質量共に成長し、今後も大きく発展していく〝可能性のある部〟になったいう感を深めるのです。そしてこの十周年を単に十周年として終らしてしまうことなくこの機会を利用して、神大響の歩みを記述しておく必要性を痛感し、記念誌発行の企画がなされたことは真に意義深いものがあると考えます。

本誌はこの企画に基き、単に十年間の回顧録で終ることなく、戦前戦後を通じて確固たる歴史と伝統を誇るわが神大響の実体を再認識し、今後の発展の原動力の一つとならんことを意図したものであります。

顧るに、神商オーケストラを母体として極めて難産の挙句生まれた神大響が数名の若者の情熱の結晶により育てられ、家族的成長過程を通り、いよいよ、社会的、組織的成長の必要を迫られるに至った現在、もう一度、その間に貴重な青春を賭けてオーケストラと取組んだ方々の地味な努力に目を向けることが必要ではないでしょうか。そして部が量的に大規模になったため、質の面でも今迄とは違った見地から眺めねば、神大響に対する正しい評価は得られないということを知る必要があるのではないでしょうか。

従って、そのために過去の事情を客観的に理解しておくことが要求されるのは当然で、その参考資料の一つとなることも本誌の重要な使命と考えます。

また、本誌に忘れてはならないことは、戦前の神商オーケストラの歴史を調べていくと、実に膨大なものであり、その実体を把もうということに大いに興味をそそわれ、それが、どのような点で今のオーケスラに影響しているかということを探らんとしたことであります。

この仕事は、当初は資金面の都合から始められたのですが、わが国、経済界の第一線で意欲的な活動をしておられる戦前の先輩各位からこの企画に非常な御共鳴を頂き、その活動状態について意外な程詳細な資料や興味ある御話をして頂き、さらにこの企画を拡大せよとまで激励して下さいました。このことは少からずわれわれ記念誌作成委員の活動をエネルギッシュなものにすることになったのです。

しかし、われわれも、戦前の歴史について日夜懸命の努力を惜しまなかったのですが、なにしろ30年にものぼる歴史を皆無の状態から調べ上げることは、決して容易なものではなく、今回は残念ながら戦前の神商オーケストラの歴史を作るに止まりました。しかし、決して、これだけで充分ではないことを編集委員一同はっきりと感じておりますので、この方面の記事を今後もなお調査整理し、追って御送りしたいと考えます。と共に、この記念誌が戦前と戦後の部員のかけ橋となり、ＯＢ会なり、後援会なり、なんらかの型をとって、新しいものが生れればという、大きな夢をかけて、編集した次第です。われわれは、この夢を早く実現される日が来ることを期待して、今後も努力して参りたいと思います。

また、この記念誌の大きな特徴は、形式が所謂〝袋形式〟であるということです。これに決定するまでには、色々と問題がありましたが、結局、われわれの意図する歴史的事項を全部載せるとすれば、極めて尨大なものとなり、到底発刊不可能な物となってしまうので、その主要な部分だけを記載することで今回は我慢して頂き、皆様の御手元にある懐しい貴重なオーケストラの思い出の収集を各種の袋に入れて充実して頂ければ、という趣向であります。そうして、人によって、いろいろの違った素晴しい記念誌がいくつかできあがれは、この企画をしたわれわれの喜びは一層深いものとなりましょう。

私はこの数年の歴史的事実が取材され編集されていくのをこうしてみると名画を見ている思いがします。画面の一コマ一コマは、ある部分は拡大され、ある部分は縮少された写真にすぎませんが、全体としては、いくつかの問題が提示され、見終えた観客は感激が与えられ、さらに、以前にはなかった新しい思考をすることが可能になるのです。

この意味から本誌は各種の客観的事項を表形式で記載し、オーケストラの本当の姿を正確に想い起すことができるように編集したつもりであります。表の長所、短所を見越した上で、敢てこれをとり入れたということを理解して頂き、同時にこれらの表の中に流れる歴史的意義を見出されんことを深くお願い致します。

最後に本誌作成に対し、いろいろな面で労を惜しまず御協力下さった戦前戦後の先輩ならびに現役員部員各位に心から感謝の意を表す次第であります。

本誌記載のカットについて

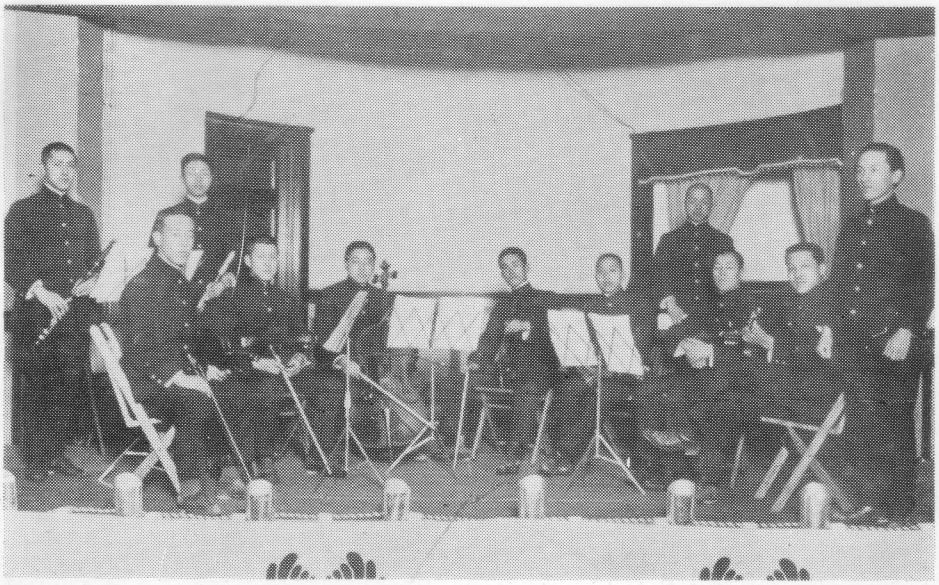
本誌で御覧になる素晴しいカットの数々は、神オケ屈指の画家と申すべき Cello の鈴木君によるものです。彼の筆からは、見ている間に我々の思いも付かぬような世界で見た印象というものが生き生きと描き出されるのです。独創的であり、親しみのあるくつろいだ感じであり、また、なにか神聖な感じさえします彼のカットは本誌にいくつかの楽しさを与えてくれました。

なお表紙の題字は藤原興君によるものです。

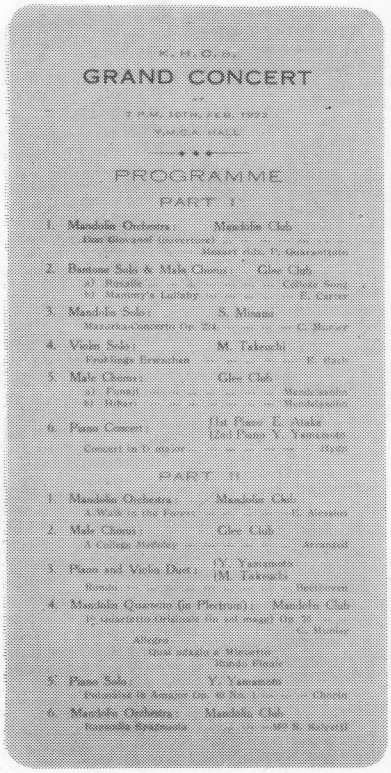
戦前オーケストラ通史

（大正4年～昭和17年）

神戸大学交響楽団記念誌作製委員会編



大正６年12月　語学大会での演奏　（ＹＭＣＡホール）



GRAND CONCERT

PROGRAMME

PART I

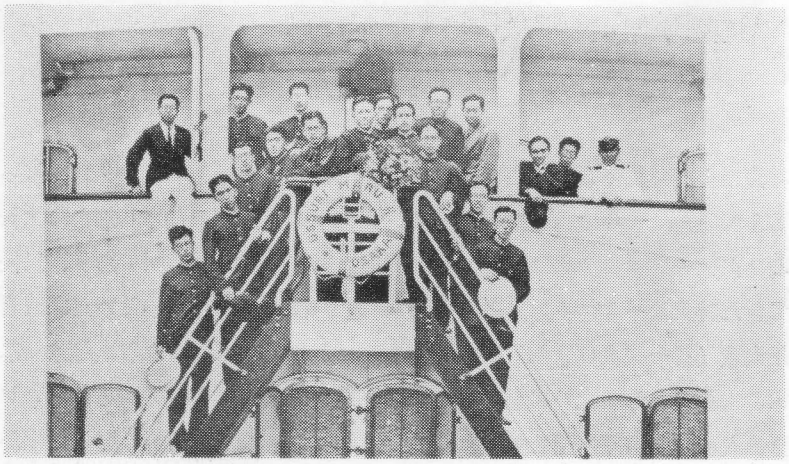
1. Mandolin Orchestra : Mandolin Club
2. Baritone Solo & Male Chorus : Glee Club
3. Mandolin Solo : S. Minami
4. Violin Solo : M. Takeuchi
5. Male Chorus : Glee Club
6. Piano Concert : 1st Piano T. Violin 2nd Piano Y. Yamamoto

PART II

1. Mandolin Orchestra : Mandolin Orc.
2. Male Chorus : Glee Club
3. Piano and Violin Duet : Y. Yamamoto M. Takeuchi
4. Mandolin Quartette (in Pictures) : Mandolin Club
5. Piano Solo : Y. Yamamoto
6. Mandolin Orchestra : Mandolin Club

大正11年２月　グランド
コンサートのプログラム

「The Orchestra」



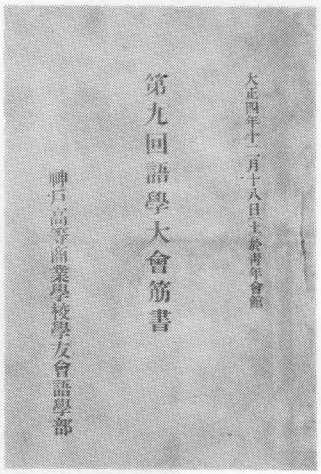
昭和８年７月　満州演奏旅行にウスリイ丸で神戸出帆

昭和11年12月　第14回定期演奏会　指揮奏会　指揮　浦野忠一氏

昭和15年（紀元2600年）第19回　定期演奏会　指揮　安達保夫氏

大正時代（創設期）

今から45年前の**大正４年**神戸市上筒井にある神戸高商の学生会館で、ピアノやヴァイオリンを持った数人の学生が、合奏を楽しんでいた。彼らは自らを名付けてワグナーソサエティと称し熱心に練習をしていたのであるが、このワグナーソサエティこそ神大（神高商）最初の器楽合奏団であり、以後45年間今日に至るまで流れてきた神大オーケストラの歴史の源なのである。大正４年といえば西暦1915年に当り、いわゆる欧州大戦（第一次世界大戦）の最中であったため、日本中は専ら戦争景気に湧き、なかんずく神戸は日本の玄関口として大いに繁栄を誇っていた。文化的にも中史に劣らないレベルを持ち、いわゆるハイカラ人種が数多く生活していた町であった。当時の文化事情は明治文化からそろそろ脚脱し、文学の方でも新文芸が現れて来るころであり、このように日本中が特に神戸の町が、外来文化に接して活気に満ちていたのであるが、音楽事情となるとまだ明るいものではなかった。当時東京には音楽学校が設けられ、関西にも一部の女学校が音楽部をおいていたが、一般にはまだ西洋音楽なるものが、ほとんど理解されず、音楽といえば尺八などによる日本風のものが楽しまれていたにすぎなかった。何しろレコードがやっと出始めたころであり、音楽を聴くということがすでに困難なことであったから、楽器を持って演奏するということは、少々勇気が要るほどであったらしい。当時のプログラムをみるとピアノ独弾シオペン氏作曲悲哀進行曲などとあるが、これを今の人間がショパンの葬送行進曲なることを理解するには少々時間がかかるであろう。このように音楽用語の訳語さえも不確定な時代であったから、神大オーケストラの黎明期はとりもなおさず、日本における西洋音楽の黎明期でもあった。



写　真　1

さてこのような時期にあって我がワグナーソサエティは着々と練習を重ねて、ついに発表の機会を得た。その時のメンバーは６人のヴァイオリンにピアノを加えたもので曲目は、プログラムによれば Corn Flower Waltz とある。この発表の機会というのは、**第９回語学大会**のアトラクションとしてであったが、この第９回語学大会の行なわれた日、すなわち大正４年12月18日（土）は神大オーケストラの前身が最初に聴衆の前に姿を現わした記念すべき日なのである。この語学大会なるものは今でいう英語（外国語）弁論大会のようなもので英・仏・独・中などの国語による弁論や演劇・対話などで成りたち、創設期の合奏団が唯一つの発表の機会としたものであった。この会の性格については伊藤則忠氏によれば「毎年秋に下山手通りにあったＹＭＣＡホール（青年会館）で催され神戸におけり恒例の大きな催で、神戸の貴顕紳士、特に神戸女学院の令嬢が大挙して集り、神戸のインテリ層で満員の盛況を呈していた」ということである。記録によれば語学大会の他に語学小会というものもある大小合せて１年に４，５回催されていたから、学内においても高い文化性を以って行なわれていたらしく、プログラムには当時高商の生徒であった福田敬太郎現学長などの名前も見え、これを主催した

語学部は高商の文化面を指導した大きなクラブであった。さて当時のワグナーソサエティの実力がどの程度のものであったかは、想像による他はないが、楽器の経験年数は平均1年ぐらいであったらしく、関西でヴァイオリニストとして有名であった遠藤和一氏（磨里女史の尊父）を先生にむかえ、ホーマンの教則本を学んだという。編成は4部に分かれたヴァイオリンとピアノであったが、伝統で有名な京大オーケストラの前身も当時はまだなく、となり合せに建っていた関西学院にも器楽合奏と呼べるものはあったかなかったかという時代であったから、一応格構をなした編成で演奏を行なったことは画期的なことであり、聴衆にも大変喜んでもらえたそうである。神大オーケストラの前身が初めてできた事情は以上のごとくであるが、以後これを母体に新しい合奏団を再編成し、更に充実した演奏活動を続け、**大正6年**（1917）**12月の語学大会**（第11回）には**マンドリンオーケストラ**の名で出演し、Sparish York “Under the Chesnut Tree” という曲を演奏した。編成はマンドリンとヴァイオリンの外に2本のフリュートとチェロを加えたものであるが、これは今のいわゆるマンドリンオーケストラとは区別されるべきである。これはヴァイオリンのみでは技術的にも限界があり、種々の点で手頃なマンドリンを加えて合奏を充実させようという意図からできた編成であり、やがてマンドリンを分離する傾向を示している。指揮者は山中直一氏であった。もちろんこのような編成のパート譜が市販されているわけがなかったので、編曲を要したが、これも山中氏によってなされた。氏は当時稀な楽才の持ち主で、マンドリンやピアノなどの楽器のほか声楽を習い、作曲や編曲もして、合奏団の指導をしたため、以後現在までずっと専門家を指導者に呼ばない習慣ができてしまったわけで、戦後の神大オーケストラが学生指揮の伝統などというのも、源はこの山中氏にあるわけである。大正7年にはこの山中氏によって**神商マーチ**が作曲された。この曲は校歌商神を母体として作られたもので、マーチの形式をとり演奏に約6分を要する。その後改作されたらしいが以後戦前にはこの曲が、オーケストラの演奏会には必らず演奏された。残念ながら譜面は残っていないが三越少年音楽隊というブラスバンドによるレコードは現存する。

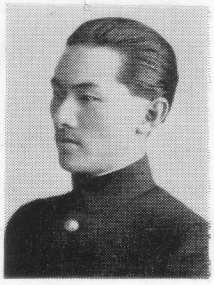


写真 2

さて先述の新しいオーケストラは大正7年には**フィルハーモニックソサエティ**と名乗りヘンデルのラルゴを演奏した記録があるが、8年の**第12回語学大会**には、山中氏の指揮の下に、作曲されたばかりの商神マーチとベートーヴェンの第2シンフォニーのスケルツオを演奏した。その後語学小会にも出演するようになり、発表機会も年に二度か三度とふえて来たのであるが、曲の方も段々面白いものをとり入れるようになって来る。8年の12月には新しくできた講堂での語学大会で、ヴェルディのトラヴィアタよりの抜萃曲を演奏、翌9年の9月には**第5回関西学生英語雄弁大会**に出演し、ファウストよりの抜萃を演奏している。この年の12月の語学大会にはトラヴァトーレからの抜萃を演奏するなど仲々にぎやかになって来たのであるが、学友会報などに時々見受けられる演奏評にも「筆者は音楽に就ては全く素人である。大変良かったという以外に評することを得ない」くらいのことしか書いてなく、語学大会にどの程度の効果を与えたのかは分らないが、器楽合奏ということの稀少価値も加わって、評判は良かったと解釈するのが妥当な所であろう。とにかく当時はまだ職業オーケストラが存在せず、またアマチュアオーケストラにも学生オーケストラ以外では常時活動を続けるようなものはほ

とんどなかったので、演奏を聴くこと自体が珍らしく、これに評価を与えるような段階でなかったことは当然のことである。しかしこのような状態のうちにも段々と西洋音楽への理解と関心が深まって来たらしく、大正10年には世界的ヴァイオリニストのエルマンが来朝した。このことは当時の音楽愛好者に大きな刺戟を与えたのであろう、この大正10年から11年にかけて我がフィルハーモニックソサエティもきわめて活発な動きを示している。大正10年には語学大会出演の他、大津や姫路で演奏会を持っている。学友会報によれば、**姫路演奏会**は彼地で有史以来二度目の音楽会であったそうで、大好評であったらしい。これは慈善音楽会の形式をとったもので、益金は姫路市などに寄附したとある。演奏会はフィルハーモニックソテエティの単独のものではなくコーラスや部員によるピアノやヴァイオリンのソロなども交えた変化に富んだものであった。この年は学内でも春に、A Walk in the Forest を演奏し、充実して来た年であるが、翌11年は高商の音楽部が単独に主催して行なった最初の**グランドコンサート**と銘打った演奏会が行なわれた。2月11日ＹＭＣＡホールで行なわれたこのコンサートには高商の音楽人口がすべて集められ出演したが、その規模の点から見ても、また喫茶店のメニューを思わすような洒落れたプログラムから見ても当時の音楽会としては一流のものであった。フィルハーモニックソサエティはこれに３ステージ出演したが曲目は Don Giovanni overture……Mozart, A Walk in the Forest……E. Allessious, Rapsodia Spagurola……S. Salvetti であり、その他山本潤氏のピアノ、竹内稔氏のヴァイオリンなどのソロやマンドリン四重奏なども行なわれた。以後大正年間を通じて語学大小会や関西学生英語雄弁大会などに常時出演し、活躍したのであるが、創設期のオーケストラの運営面での経過を以下に簡単に辿ってみたい。

大正年間の高商には学友会の下にクラブをおく組織ができあがっていたが、合せて10に達しないほどの少ないもので、そのうち文化部に属するものは講演部と語学部だけであり、当初は同好会の形で細々と活動をしていた。もちろん予算の割当はなく、経費は部員からの拠金によっていたが、楽器は私有物であり、練習も学内の学生会館でやっていたので、経理面ではさほど困らなかったらしい。しかしその後クラブが活発になり、大正10年頃からフィルハーモニックソサエティとマンドリンクラブとグリークラブの三者がはっきりと分離するようになり、規模が大きくなったので、学内での評価も高まり、部に昇格しようとする動きが起ってきた。音楽部という名称は大正10年ごろから学友会報に度々出てくるが、これはあくまで代名詞的なものであり、海外から帰朝した田中金司氏（現経営学部名誉教授）を部長に戴いて正式に音楽部として認められたのは大正14年のことであった。年間15円の予算も得て、以後学内外に大きく発展する基礎を築いた所で、この意気揚々たる創設期を終るのである。

昭和時代（発展期）

第１次世界大戦による表面的な、一時的な好況は戦後においては一転して不況に変じ、しかも独占資本を中心として資本主義のたてなおしをはかることはかえって矛盾を大きくし、まず金融恐慌としてあらわれた。そして高商においても卒業生の就職は困難をきわめた時代であった。

当時、生まれ出ずる悩みをなめて、ようやくにして発展の域に達した音楽部は派手な外観にも似ず財政的にははなはださびしく、学友会内部においても不偶な地位に甘んじていた。

しかし、いやしくも敬虔なる芸術的良心を抱いて古今の楽聖の作品に親しまんとする部の意気は高く向上しつつあった。当時の部員の語る所によれば「我等は音楽に親しむことによって我等自らを楽しましむるに止らず広く一般丘人をして崇高なる第一芸術の殿堂に導き入るることに努めている…」と。

この言に恥じず音楽部は盛んなものであり、すべての楽器は学生の間で揃っており毎日昼の休み時間には講堂に集まって練習していた。当時よく練習したのは、未完成、パデレフスキーのメヌエット、ピックダムなどであった。また部員一同も皆相当の自信を持って、関西に冠たりとの一種のプライドをもって臨んでいた。

昭和2年の暑中休暇には、**山陽地方への演奏旅行**を行なった。7月21日に神戸を発ち、22日尾道久保小学校、23日広島進徳高女、24日福山市公会堂で演奏会を行なった。

その時、尾道では、その夜の演奏会の宣伝をやろうというので自動車2台を借切って、管楽器の者は楽隊に早変わりし、弦楽器の者は広告ビラを車上より撒き散らして、尾道の町を練り歩いた。この宣伝が奏功したのか、当夜の会場は満員の盛況で老若男女が席を敷きつめて座っており、まるで舞台の上では万才か落語をやればふさはしいような状態であった。こんな所であるから当夜のプログラムにおいては洋楽よりも越後獅子の方が人気があり、越後獅子の終曲では満堂の拍手をあびた。この演奏旅行の主なる曲目をあげてみると、商神マーチ、未完成、カルメン幻想曲、ハンガリアダンス5番中央アジアの草原にて、アンダンテカンタービレ、越後獅子などである。その後同年秋には音楽部音楽会を行なうなどオーケストラとしては創立以来13年目に至り初めての充実した年であった。

しかしながら、昭和3年には、有力な部員の大多数が卒業し、オーケストラを組織するに部員の無き貧弱な音楽部とはなったが、岩崎、江藤、大岡、小倉の諸氏が中心となり、5月には記念祭公開音楽会を行ない、12月8日の秋期定期公開音楽会にはピアノトリオでハンガリアダンス第5番（ブラームス）メヌエット（モーツアルト）小交響楽（モーレー）を、ヴァイオリンソロでト短調コンチェルト（ザイツ）を演奏した。

昭和4年1月には、**神戸高等商業学校**は**神戸商業大学**に昇格し、輝かしい第一歩を踏み出した。ここにおいて、音楽部も興勢の意気に燃え、岩崎、上野、直木、城倉、江藤、赤坂の諸氏が着々と内容の充実に努められたのだが、何分多数のメンバー、楽器および費用を要するので、仲々思うようには行かず、公開の席上でオーケストラ演奏が再び行なわれるのは昭和5年12月である。

昭和4年6月22日の音楽会には岩崎、上野、江藤の3氏によるピアノトリオ、岩崎氏のヴァイオリン独奏、江藤氏のセロ独奏が演奏され、同年12月16日には恒例の音楽会が催された。これに関する当時の商大学報を紹介しよう。

「恒例の秋季音楽会は12月16日（日）午後6時より講堂で行なわれた。今年は長年の悪弊であった野次も少なく静粛に行なわれた。盛会裡に終ったのは9時半だった。プログラムは、マンドリン合奏、同クワルテット、グリークラブの合唱、四重唱、ヴァイオリン独奏、二重奏などかなり変化に富んでいたが、遺憾なことはオーケストラの無いことであった。管楽器の人が足りぬとのことであるが、あるいは有志を勧誘し、あるいは楽器を貸与して便宜をはかり、どうにかして丘に一つのオーケストラを

造り上げたい……」

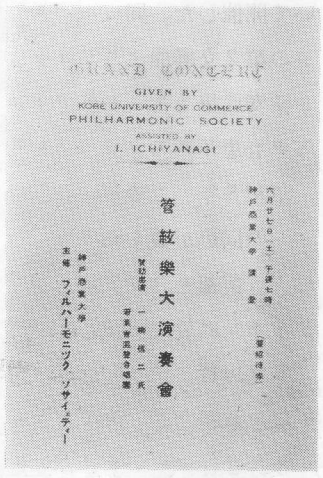
昭和5年7月4日、下山手の基督教青年会館において本学音楽部後援会主催の吉田顕世氏のセロ独奏会が開かれた。そして久しくやや不振の状態にあった音楽部もこれを一転機として華々しい活躍をなすべく、秋のシーズンを目あてに猛練習を始めたのであった。なお参考までにその入場料をあげると、A2円、B1円、学生50銭、当時の外国演奏家（シゲッテイ、ハイフェツ）の入場料は5円、3円、2円、1円であった。

同年12月6日、恒例の音楽大会は商大大講堂において開催され、数年来見られなかった大聴衆を、流れる旋律美に陶酔せしめた。同夜はグリー、マンドリンとともに、岩崎氏のヴァイオリンソロ、上野氏のピアノソロを始めとし、オーケストラ演奏も見事復活し、その演奏した商神マーチは学生らしい真摯さが充分溢れており圧倒的人気を得た。

昭和6年4月3日には明石小学校において洋楽演奏会を行ない、同年5月16日の音楽大会には快い旋律を晩春の丘に流した。

そして、同年には昨秋の音楽会において喝采を博した本学学歌商神マーチがオーケストラ、グリーによってコロンビアレコードに吹込まれた。曲は表面に校歌および大旆の合唱を入れ裏面にはそのヴァリエーションが軽快なバンドによって吹込まれた。

また、同年6月には、フィルハーモニックソサエティ主催による第1回レコード名曲鑑賞会が約300名の聴衆を集めて講堂で行なわれた。曲目はベートーベンの第5交響曲、チャイコフスキーの第4交響曲、その他シュトラウス、サンサーンス、ズッペ、ラベルなどのものであった。ここにおいて初まったこのレコードコンサートは講演会などとともに、一般丘人をして、音楽に親しましめんとする目的を有するものであった。そして、昭和7年の新入生歓迎会で「商神マーチ」をかけ好評を博したりはしたが、経費の都合上レコードの購入ができずせっかくの電気蓄音機も宝の持ち腐れの態であったが、昭和7年5月には、ビクター、コロンビア、ポリドールの3社と交渉の結果、毎月の新譜借用の契約を結び、定期的にレコードコンサートを開くことができるようになった。また同年10月には、前記3社と交渉の結果、毎月新譜の他に古今の名曲も借用できる契約を結び、学生課の援助を得て毎週木曜日玄関前の芝生の上で開かれるようになり、曲も希望を募りその曲の解説も印刷物にして配布するようになった。このレコードコンサートは長つづきはしなかったが、一時は非常に盛んなものであり、特にフォスター曲集とかシュトラウスのワルツに人気があったようだ。


GRAND CONCERT
GIVEN BY
KOBE UNIVERSITY OF COMMERCE
PHILHARMONIC SOCIETY
ASSISTED BY
I. ICHIYANAGI
管絃樂大演奏會
神戸商業大學
主催 フィルハーモニック・ソサイエティー

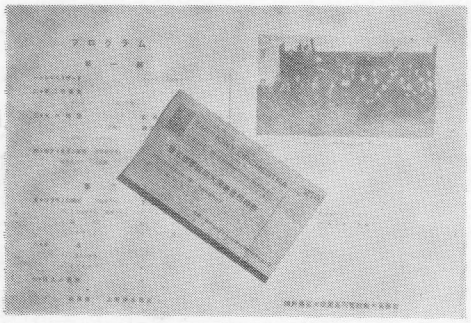
写　真　3

昭和6年6月27日は神戸大学交響楽団にとって、永遠に記念さるべき日であろう。同日は我がオーケストラが神戸商大フィルハーモニックソサエティとして名乗りをあげ、**第1回管弦楽大演奏会**を開くに至ったからである。

同夜は講堂に学の内外六百数十名の聴衆を集め、上野伊太郎氏の指揮により、商神マーチ、雨滴（ショパン）、セレナーデ（シャミナード）、ロマンティク（ベラ）、匈牙利舞曲第5番（ブラームス）、

メヌエット（パデレフスキー）、ピックダム（ズッペ）をオーケストラ演奏し、他に一柳信二氏のセロ独奏、若葉会混声合唱団の合唱など賛助出演があり、大いに称讃を拍した。

爾来、毎年２回の学内音楽会を初め、春秋２回のオーケストラのリサイタルを開き、ますます市民の注目を集めここに確固たる地位を獲得するに至った。



写　真　4

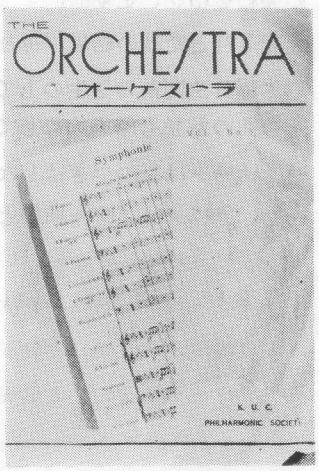
昭和６年11月７日、**専門部記念音楽会**が講堂で行なわれた。同夜は、上野氏の指揮により、商神マーチ、第49交響楽ハ長調（モーツアルト）、ウインの朝昼夜（ズッペ）が演奏された。この音楽会は、専門部学生委員会の主催による旧神戸高商30年の光輝ある歴史の最後を記念すべき催しの一つとして学部を含め、先輩その他関係者を多数招待して行なわれたのであった。そして翌７年４月には神戸商大附属商業専門部は廃止されたのであった。

同年12月５日、**第２回管弦楽演奏会**が開かれ、交響曲１、序曲３、賛助出演として野崎住子さんのソプラノ独唱が演奏された。

昭和７年５月14日、29周年記念祭の音楽会に出場し、上野氏の指揮により、商神マーチ、ソルベーグの歌（グリーク）、スパニッシュダンス（モシュコフスキー）、白衣の婦人（ボワルデュ）、岩崎氏のヴァイオリンソロにより、コンチェルトロマンティック（ゴダール）が演奏された。

同年６月18日、**管弦楽大演奏会**が賛助出演にセロの吉田頴世氏を迎えて講堂で行なわれた。そして同年の夏期休暇中はＹＭＣＡで毎金曜日指揮者の上野氏を先頭に猛練習が続けられており、その進歩ぶりは聴覚の秋を迎えて相当期待されるところであり、10月28日にはＹＭＣＡホールで同主催の音楽会に賛助出演し「詩人と農夫」を演奏し、11月10日には「シエラザード」、ベートーベンの第二交響曲をＢＫより放送した。

同年12月２日には**第５回管弦楽大演奏会**をＹＭＣＡはホールにおいて開催した。同夜上野氏の指揮によりシエラザード、ベートーベンの第２交響曲よりラルゲット、詩人と農夫、岩崎氏のヴァイオリン協奏曲第５番（モーツァルト）、その他に吉田頴世氏のセロ独奏、下里智恵子嬢のソプラノ独唱の演奏が行なわれた。



写　真　5

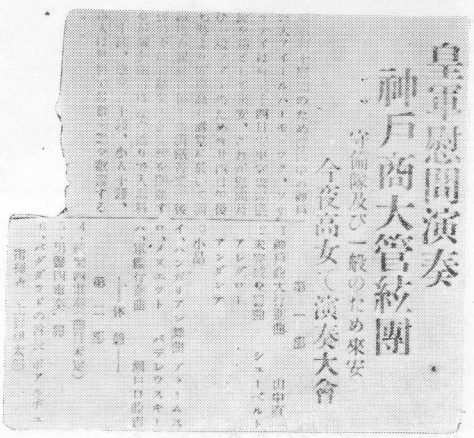
昭和８年、この年は戦前において、フィルハーモニックソサエティーの活動が最も華々しく行なわれた年であろう。３月20日、ＹＭＣＡ音楽部と合同演奏会を開き、３月25日、赤塚悦子嬢のピアノリサイタルに賛助出演した。

５月14日、創立30周年記念演奏会には上野氏の指揮により、30周年記念歌、商神マーチ、序曲エグモントを演奏した。

６月２日、**第７回定期演奏会**を「ベートーベンとビゼーの夕べ」と名付けて、上野氏の指揮で、ベートーベンの葬送行進曲、賛助出演に井上百合子嬢を得てピアノ協奏曲１番、ビゼーのアルルの女を

演奏した。当夜の会場ＹＭＣＡホールは満員の盛況であった。聞くところによると聴衆の約５分の１は若き女性で、誰でも受付になりたがったそうだ。そしてこの演奏会の時に機関雑誌「The Orhkestra」を創刊して楽壇の賞讃をうけた。この「THE ORCHESTRA」は、音楽に関する論文、随筆などの他にプログラムの曲目解説を記載し、演奏会の聴衆に手渡したものであった。

なお当時、演奏会を行なうための費用は40円ぐらいであった。そして、その費用は大学の補助（約20円）とプログラムの広告でまかなったのである。演奏会の聴衆から入場料を取ることはしなかった。また聴衆の動員方法は、演奏会のビラを配り、電柱にポスターを貼り、町の要所に立看板を立て学校新聞に載せるなどして広告し、招待券を楽器屋に置いてもらい欲しい人に自由に持ち帰ってもらい、部員が各自その知り合いに配った。また演奏会場としてＹＭＣＡのホールを借りるコネをつける意味で、ＹＭＣＡの行事に賛助出演した。


皇軍慰問演奏
神戸商大管絃團
守備隊及び一般のため來安
今夜商女へ演奏大會

写　真　6

昭和８年７月７日、ＪＯＢＫ主催の関西六大学管弦楽放送コンテストに参加、ベートーベンのピアノ協奏曲１番、ハイドンの軍隊交響楽よりメヌエットを演奏した。

同年夏、満鉄の招聘により**満州へ演奏旅行**を行なった。当時日本は、満州事変をおこし、関東軍が満鉄沿線の全線で軍事行動をおこし、昭和７年２月にはほとんど満州全体を占領し日本に完全に従属した名ばかりの満州国をつくりあげ、大陸への侵略を盛んに行なっていたのである。

今ここにその日程を簡単に記すと、旅行に先立ち、11日より垂水で合宿練習をなし、14日正午、一行20名はウスリイ丸にて神戸を出帆した。途中船内で早速練習を行なった。17日８時大連着、18日鞍山に向け出発、同夜鞍山にて演奏会を行なう。19日午前中、鞍山製鋼所見学、正午奉天に向け出発、同夜奉天にて演奏会。20日午前北大営見学、夕方撫順に向う。同夜撫順にて演奏会。21日撫順の露天掘見学、夜汽車にて新京へ向う。22日朝新京着。同夜新京にて演奏会、23日市内見学、夜放送局より管弦楽を放送。同夜安東に向け出発、24日安東着、夜演奏会、26日朝大連着、夜演奏会、27日以後部員一同星ケ浦にて休養、その間27日夜大連放送局より放送、28日旅順見学等々31日10時ウスリイ丸にて神戸へ向う。８月３日８時神戸着。上記のごとき非常なる強行軍であったので部員の疲労特に管楽器においてはひどかったらしい。しかしながら面白い話もなかったわけではないらしい。昭和８年９月15日付の商大学報によると、「奉天の小学校で演奏会を催した時、誰も知らんのにダンスホールから祝電を寄せて来た。すんでから部員の精鋭をすぐって大挙そのホールへ乗込んでみるとここにもウエルカム神戸商大という大看板、ビールなんかの御馳走になった。聞いて見ると神戸花隈のホールにいたダンサーがやってくれたのだということが分ったが、あの時は実にうれしかったね……」かくして若人にいろいろの思い出を残し満州旅行は終ったのである。

昭和８年11月11日、文部省の統制により全国的に行なわれる音楽週間の初日に秋期音楽部合同演奏会が開かれた。指揮は村井澄也氏で曲目は商神マーチ、詩人と農夫、ハイドンの第６交響楽よりアン

ダンテ、若者の幻想（デルオロ）、バグダッドの酋長（ボアルデュ）などであった。

同年12月、**第８回定期演奏会**が上野氏最後の指揮で講堂で行なわれた。曲目は弦楽５重奏（モーツァルト）、ベールギュント第１組曲（グリーク）、皇帝に捧ぐる命（グリンカ）、椿姫（抜粋）（ベルディ）であった。

昭和９年３月オーケストラのあらゆる方面に大活躍し、神戸商大オケの黄金時代を築き上げた上野伊太郎氏の卒業は、オーケストラにとって少なからぬ痛手ではあったが、４月、７名の入部をみ、指揮者に村井澄也氏、マネージャーに宇治久雄氏を選んで商大管弦楽団は更に活発な活動を続けた。５月中旬には記念祭に出演し、６月には講堂で**第９回定期演奏会**を開催した。曲目は「商大マーチ」、ハイドン「びっくり交響曲」、メンデルスゾーン「結婚行進曲」とともにソプラノ独唱などであった。

昭和９年はオーケストラにとって重要な年であったといえる。すなわち同年神戸商大は上筒井から六甲台へ移転し、各クラブは大なり小なり影響をうけたのであったが、比較的交通の便利であった上筒井から、不便な六甲台への移転は、練習場の点で、オーケストラにとっては甚だ痛手で、移転当時は学内で練習をしていたが、結局交通の点から再び練習場をＹＭＣＡあるいは愛隣館に求めるに至っている。新学舎移転式は７月８日に行なわれ、その前日催された「丘を偲ぶ追想会」ではオーケストラの奏でる「商神」のメロディーが上筒井の丘に流れていった。この年、村井氏指揮、宇治氏マネージャーのもとに舞鶴、奥丹後演奏旅行が行なわれた。14～15名が参加、約１週間にわたって数回のステージが学校に町の人を集めて行なわれた。シューベルト「未完成交響曲」、ボアルディエ「バクダッドの太守」などが演奏され好評であった。このころの活動を当時の大学新聞は「……六甲移転による練習不便にも屈せず、差当り青年会館において練習中……」と伝えている。それまで定期演奏会は青年会館、講堂で行なわれていたが、昭和９年からは、海員会館ででも行なわれるようになった。昭和10年２月20日の大学新聞は、昭和９年度の最上級生として活躍した人々のオーケストラマンとしての面影の一端を次のように伝えている。「『村井澄也君：管弦楽団の指揮者として提琴の理解者。またその技術者として音楽部第一人者たる貫録を千円の楽器と二百円の弓に現はして……』『片岡正己君：最近スットットン節の音楽的な理解につとめている……』『森川定治君：例の特異な笑い声を立て乍ら後輩にコーヒーをおごったりして、管弦楽団の寂寥味を軟化させるところ、実に快腕の好々爺…』

昭和10年頃は、神戸商大にとって沈滞期間とみる向きが多い。懸賞論文への応募は少く、運動部の成績もふるわず、文化活動も一般に低調とみられ、それらを嘆く気配も強かった。こうした気運の中にあって昭和10年６月19日に**第11回定期演奏会**が宮地厚三氏の指揮により、ピアニスト八木綾子氏の賛助を得て開かれた。この演奏会は、学舎移転によって最大の痛撃をうけながらも、部員結束して練習にあたったその腕だめしとしての要素を多分にもっていたが、ベートーヴェン「交響曲第１番」同「ピアノ協奏曲第１番（第１楽章のみ）」の演奏は大好評をはくし、かくて管弦楽団はその地位を不動のものとするに至ったのである。岩崎潤一氏、上野伊太郎氏を中心とする時代に一応その基礎を固めたものの、一管編成の域を脱し得なかったが、宮地氏の時代になって、一応二管編成が完成し、ティンパニィをＹＭＣＡから借りた以外は、一通りの楽器もそろっていた。同年10月25日から移転記念祭が催され、その一環として10月27日に開かれた洋楽大会にグリークラブ、マンドリンクラブと共に出演、「商大マーチ」、チャイコフスキー「ミニットス」、シュトラウス「碧きドナウ」を演奏、大喝采をう

けるなど、その活動は目ざましいものであった。このころの活躍振りは、昭和10年10月25日付商大新聞の学友会各部ならびに有志団体紹介の欄において次のように紹介されている。すなわち「楽団は多種多様の高価な楽器と多数の人員とを必要とする性質上、いかなる学校においても、また専門的職業的楽団においても、維持と発展との努力は多くの場合極めて僅少にしか酬いられない状態である。しかるにわが管弦楽団は創始以来現在まで、比較的順調な経路を辿って来、今や神戸唯一の、そして関西有数の管弦楽団として50数名の演奏部員を有し、春秋二回の定期演奏会に続々大曲を発表して関西楽団の中枢となりつつある」

50数名の部員とはいってもその全部が神戸商大の学生であったわけではなく、商大生以外の人々もその50数名の中に含まれていた。しかしこれらの人々が、本番だけの、いわゆるエキストラであったのではなく、商大生と何かにつけ苦楽を共にした仲間であって、神戸商大管弦楽団が学内サークルから、神戸のオーケストラとしてその地位を築いた一つの土台となっていたことは認ねばなるまい。かくて同年12月11日**第12回定期演奏会**が海員会館で開かれ、ビゼー「アルルの女」、ベートーヴェン、「ピアノ協奏曲第3番（第1楽章のみ）」、同「交響曲第8番」が演奏された。ソリストは若葉会所属の森鼻氏であった。当時のソリストはほとんど若葉会の人々であり、その返礼の意味もあって、若葉会の定期演奏会にはオーケストラが賛助出演していた。

神戸商大の単なるクラブ以上に神戸のオーケストラとしての地位をも築き上げた商大管弦楽団の姿をよく反映しているのが昭和11年3月28日の**神戸市主催音楽趣味講座演奏会**への出演である。この日は海員会館においてシューベルト「交響曲第8番、未完成」のほか数曲を演奏したが、いづれも市民の絶讃をはくし、天晴れ講師の役目を果したのであった。

なお昭和9年度の学友会から支給された年間予算が131円（学友会総予算5741.80円）昭和10年度は151円（学友会総予算6071円）学友会所属の部としては、雑誌、新聞、語学、講演、音楽、柔道、剣道、野球、ラグビー、籠球、排球、蹴球、射撃、弓道、馬術、端艇、卓球、陸上競技、庭球、山岳、水泳の各部が存在していた。

昭和11年度に入って指揮は浦野忠一氏、マネージャーは副島陸郎氏となった。部員は約30名であった。このころ神戸商大管弦楽団の催す定期演奏会は港都神戸を賑わす一つの行事となりつつあった。昭和11年6月26日に開かれた**第13回定期演奏会**は海員会館で盛況裡に終了した。指揮浦野氏、ソリストに永井静子氏を迎え、モーツアルト「ピアノ協奏曲ニ短調」、ヴェルディ「ラ・トラヴィアタ」、モーツァルト「フィガロの結婚」、シュトラウス「碧きドナウ」、モーツアルト「トルコ行進曲」が演奏された。同年12月の**第14回定期演奏会**にはラローのセロコンチェルトが取上げられた。しかしその結果は、選曲の根本方針を再確認する必要を指揮者、部員に痛感せしめることとなったのである。

昭和12年は指揮村田正敏氏、マネージャー西村俊一氏のもとに活動が続けられた。この年、支那事変の勃発とともに社会情勢険悪化の気配が濃厚になりその少なからぬ波紋がオーケストラにも押寄せた。すなわち部員中にかなりの応召者が出、練習の機会も少なくなり、事変下に演奏会を開くことに対し非難らしきものも現われるに至ったのである。この中にあって、部員は応召者による量的痛手を質でもって補わんと結束を固め、事変という非常時においてこそ、あらゆる方面における積極的活動が望ましく、単なる戯れのために音楽をやっているのではないとの意気をもって練習が続けられた。

この年は定期演奏会は春には開かれず、**第15回定期演奏会**が、12月12日に開かれたのみであった。曲目はシューベルト「軍隊行進曲」、ベートーヴェン「序曲エグモント」と他に小品が数曲であった。

昭和13年には、12月に**第16回定期演奏会**が開かれ、ベートーヴェン「ピアノ協奏曲第3番」、ハイドン「交響曲第4番時計」、ボアルディエ「序曲白衣の婦人」などとともに、特に日独伊防共協定を祝して、山田耕筰「蝶々」、シューベルト「アヴェマリア」、アントニオ・ロッティ「愛らしき唇」が、オーケストラ伴奏、佐藤和愛氏のソプラノ独唱によって演奏された。指揮は現役学生ではなく昭和9年卒の上野伊太郎氏、ピアノ独奏は永井静子氏、プログラムに記載されたメンバーは32人とやや減少している。

昭和14年、「非常時」の進展とともに練習、演奏会などに不自由な面が多くなってきたが、赤松知二、安達保夫両氏を指揮者に、今井基介氏をマネージャーに、創立記念音楽会、この年から始まった商大音楽部合同演奏会に出演、その他各種催物に賛助出演し、オーケストラの活動は依然活発であった。

昭和11年ごろから練習は、通常学外部員にとって交通の便のよい上筒井にあった愛隣館で週2～3回程度行なわれていた。定期演奏会は海員会館で行なわれるのがほとんどであったが、1回開催するのに70～100円が必要であった。しかし入場料はとらず、必要な費用はプログラムの広告代でまかなわれた。毎年学友会から音楽部は150円程度の予算が支給され、音楽部内では管弦楽団がその大半を要し、グリー、マンドリンに対しては必要に応じて、5～10円程度あて支給していた。ところが「非常時」体制に入るや、音楽部の150円維持はきわめて困難となり、結局は減額され、オーケストラは財政難へとおちこみ始めたのである。

昭和14年には**第17回定期演奏会**が開かれ、ベートーヴェン「交響曲第1番」などが演奏された。

この年12月1日、岩崎、上野、浦野、西村、宇治の卒業生諸氏により「楽団の発展を期する座談会」が開かれた。席上、予算、楽器のことが論じられたが、演奏会で入場料をとることはまず無理であり、第一「心臓」が強すぎるとされた。さらに後援会結成のことが議題にのぼり、また学外のメンバーと密接に連絡をとり、学生部員と先輩とが一体となって商大管弦楽団のメンバーであることに対してプライドをもつ必要性が論じられた。

昭和15年は紀元2600年として何かにつけ催物が開かれた年であった。この年は、6月に**第18回**、12月に**第19回**と2つの定期演奏会が開かれた。指揮は共に安達保夫氏、マネージャーは、6月は今井基介、12月は船津忠正の各氏であった。第18回では、モーツアルト「交響曲第41番ジュピター」、弦楽四重奏、独唱、ボアルディエ「バグダッドの太守」、第19回では、ベートーヴェン「交響曲第5番、運命」、同「ピアノ協奏曲第1番（第1楽章のみ）」、ビゼー「アルルの女」、独唱が演奏されたが、このころから演奏会冒頭に「君が代」を、最後に「愛国行進曲」を全員で合唱するようになったのである。この頃の演奏会はいつも満員で阪神間の愛好家、特に女子の聴衆が多かった。演奏の途中で止ったりするようなことはなかったが、聴衆と共にオーケストラを楽しむという程度であり、生の音楽を聞く機会の少ない人々からは概して好評を得ていた。学内においては、依然として活発な部類に属していた。独自の演奏会、記念祭、各種催物への賛助出演の他に、時にはレコードコンサートを開き、またオーケストラから軽音楽グループが派生したりした。練習はやはり愛隣館で行なわれていたが、専門家に

よる全体としての技術的指導はなかった。

商大生以外の人々をもそのメンバーに含み、その点でも商大のワクを越えつつあった神戸商業大学管弦楽団は、神戸における唯一の存在としてのオーケストラの意義をより認識し、その目的をより達成せんとして、昭和16年、その名称を**神戸交響管弦楽団**と改めるに至ったのである。かくて昭和6年以来、神戸商業大学管弦楽団として開かれてきた定期演奏会も第19回をもって一応その幕を下し、昭和10年6月29日、神戸交響管弦楽団として初の演奏会が開かれた。昭和9年卒の上野伊太郎氏を指揮者に迎え、宮城遙拝、全員による「君が代」合唱、黙禱に続いて、ベートーヴェン作品の夕べとして」交響曲第2番」、「ピアノ協奏曲第4番」、「劇附随曲、エグモント」からの数曲、がこの日演奏された。演奏会ごとに刊行された「The Orchestra」は、ベートーヴェンの「運命」のスコアの第1頁を半分のぞかせたその表紙から「The Orchestra」の文字が取り除かれた。

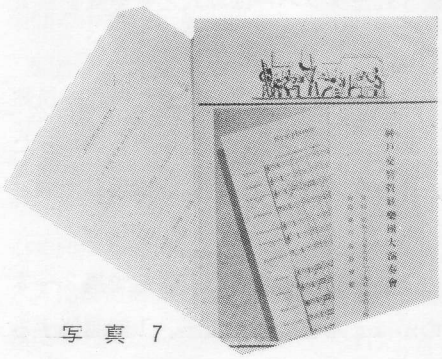


写真 7

その後、商大卒業生をはじめ、オーケストラ活動への意欲はまことに頼もしいものであったが、このオーケストラの中核たるべき商大における学生部員が減少しはじめた。加うるに、学友会の予算は射撃、柔道、剣道、馬術部などにその六半が回され、財政面にも困難な事態が生じるに至ったのである。

泥沼の様相を呈しはじめた世相の中にあって、人手不足、財政難をはじめとする、さまざまな事態がオーケストラを圧迫しはじめた。昭和17年、合同演奏会に出演し、演奏会を一度開いた後は、沈滞状態におち入り、そのまま活動を止めざるを得なくなったのである。かくて大正年間に始り、神戸商大のみならず、神戸のオーケストラとして遠く満州にまでその名を馳せた神戸商大管弦楽団は再び目覚める日を夢みつつ、眠りに入ったのであった。

文中カット写真説明

写真 1	語学大会プログラム（大正4年12月）
写真 2	高商在学当時の山中直一氏
写真 3	第1回管弦楽大演奏会プログラム（昭和6年6月27日）
写真 4	第5回管弦楽大演奏会プログラム及び招待券（昭和7年12月2日）
写真 5	The Orchestra 創刊号（昭和8年6月）
写真 6	満州演奏旅行の新聞切抜（昭和8年7月）
写真 7	神戸交響管弦楽団演奏会プログラム（昭和16年6月）

編　集　後　記

この記事の編集を思いたって3カ月、全くゼロの状態から出発して、なんとか通史をまとめるに至った。とにかく45年の歴史といえば関西では恐らく最古のものであろうし、戦前に立派なオーケストラがあったことを知って、われわれの興味が湧き立ったのも当然のことであった。さて仕事の分担をきめて、とりかかったが、何分1冊のプログラムも1枚の写真もなく、連日先輩を訪ねてまわり、当時の話を伺ったり、資料を拝借する等、取材に努めたが、思うように行かずとうとう2回にわたって東京まで行かねばならなかった。それに加えてわれわれの仕事には戦前卒業者の名簿の作製という大役があり、さらに仕事の進行を遅々たるものにした。しかし社会の第一線にたって御活躍中の諸先輩の種々の面での御援助は、われわれの編集に対する強い支えとなり、ようやくにして一応の完成を見るに至った次第である。もちろんこれで歴史のすべてを調べ尽したわけではなく、諸先輩に御満足いただけるものとは思っていないが、現役が先輩の歩んだ道の大略を知ることは大切なことであり、また戦前の方々にも少しは往時を思いだしていただけるかも知れないと少なからず効果を期待しているのである。5年後にはわがオーケストラも50周年を迎える。その時にはぜひ立派な記念誌ができるよう、望んでいる次第である。

担当　大正年間　中島良能　　昭和2年～8年　鳥山[illegible]喬
　　昭和9年～17年　水垣　健

戦後10年間の主要演奏会記録

年	月日	名称	会場	曲目	指揮者、ソリスト その他	出演者数 部員	準部員	OB	客員
1951	4. 27	開学記念祭	山手女子学園講堂	バッハ ガボット組曲No. 3より シューベルト ロザムンデ舞曲 モーツアルト P.f.協奏曲 No.23	千葉 修二(Con.) 広岡 洋子(P. f.)	16	11	1	5
	11. 25	第1回定期演奏会	親和高女	モーツアルト メヌエット グリーク ペールギュントより「オーゼの死」「ソルヴェーグの歌」 ビゼー アルルの女より「メヌエット」「間奏曲」 ヘンデル 水上の音楽より アレグロ ハイドン P.f.協奏曲 D.dur モーツアルト 交響曲No. 41「ジュピター」	千葉 修二(Con.) 安見 泰子(P. f) (旧姓 弘田)	21	14	2	8
1952	6. 1	開学記念祭	六甲講堂	ハイドン 交響曲No.101時計第2楽章 サンサーンス 動物の謝肉祭 ベートーヴェン トルコ行進曲 シューベルト 軍隊行進曲	千葉 修二(Con.) 松井 克之(P.f.) 坂口 美和(P.f.)	19	10	1	6
	11. 30	第2回定期演奏会	六甲講堂	シューベルト 交響曲No. 8 未完成 ウェーバー 小協奏曲 シュトラウス 南国のバラ、朝刊 ヴェルディ アイーダより「凱戦行進曲」	千葉 修二(Con.) 浅田 浩(Con.) 吉岡 秀子(P. f.)	28	10	3	5
1953	6. 14	開学記念祭(第3回定期演奏会)	六甲講堂	ベートーヴェン 交響曲No. 1 第1楽章 サンサーンス P.f.協奏曲 No. 4 シベリウス フインランディア	浅田 浩(Con.) 西占 操(P.f.)	22	4	3	2
	7. 18	彦根演奏会	滋賀大学講堂	リムスキーコルサコフ インドの唄 チャイコフスキー 白鳥の湖より2曲 ハイドン 交響曲No. 5 シュトラウス 皇帝円舞曲 メンデルスゾーン P.f.協奏曲No. 1 シュトラウス 美しき青きドナウ	浅田 浩(Con.) 菅 護(P.f.)	18	0	1	3
	12. 13	第4回定期演奏会	六甲講堂	ベートーヴェン 「エグモント」序曲 ハイドン 交響曲No.100軍隊 ビゼー カルメン第1組曲 シュトラウス 皇帝円舞曲 メンデルスゾーン P.f.協奏曲No. 1	浅田 浩(Con.) 増川 真澄(Con.) 菅 護(P.f.)	24	4	3	10
1954	3. 20	教育学部卒演(第4回)	児童文化会館	シュトラウス 皇帝円舞曲 ウェーバー 小協奏曲 ヴェルディー 椿姫より4曲	水谷 知久(Con.) 井上 靖(P.f.) 平野 隆子(Sp.)				
	5. 30	開学記念祭	六甲講堂	モーツアルト 「魔笛」序曲 ブラームス ハンガリア舞曲No. 5 ヴェルディ 「椿姫」より シュトラウス ウインの森の物語	水谷 知久(Con.)	18	0	4	1
	7. 8	神戸放送(ラジオ関西)録音	神戸放送局スタジオ	モーツアルト 「魔笛」序曲 シュトラウス ウインの森の物語 ブラームス ハンガリア舞曲No.5	水谷 知久(Con.)	18			
	7. 18	和歌山演奏会(労音)	和歌山大学講堂	モーツアルト 「魔笛」序曲 シューベルト 交響曲No. 8 未完成 モーツアルト P.f.協奏曲No.23 チャイコフスキー 白鳥の湖より2曲 ビゼー 「アルルの女」よりメヌエット シュトラウス 皇帝円舞曲	水谷 知久(Con.) 長井 充(P.f.)	17	0	3	1
	12. 11	慈善音楽会	海員会館	バッハ シンフォニア ラヴェル 逝ける王女のためのパヴァーヌ ハチャトゥリアン 「ガイーヌ」より バラの娘たちの踊	水谷 知久(Con.)	20	1	6	0
1955	3. 21	教育学部卒演(第5回)	六甲講堂	メンデルスゾーン P.f.協奏曲No. 1	田中清三郎(Con.) 滝本 貞子(P.f.)				
	6. 5	開学記念祭	六甲講堂	ロッシーニ 「セヴィラの理髪師」序曲 ウエーバー 小協奏曲 グノー 「ファウスト」の舞踊音楽	田中清三郎(Con.) 西占 操(P.f.)	16	2	10	3
	6. 30	第1回旧三商大合同演奏会	大阪産経会館	シューベルト 交響曲No. 8 未完成 サンサーンス P.f.協奏曲No. 2	加藤 博重(Con.) 田中清三郎(Con.) 内田 博子(P.f.)	19	2	10	1
	7. 23	三次演奏会	広島県三次小学校	モーツアルト Fl.協奏曲No. 2 サンサーンス P.f.協奏曲No. 2 ロッシーニ 「セヴィラの理髪師」序曲 シューベルト 軍隊行進曲	田中清三郎(Con.) 高橋 一三(Fl.) 菅 護(P.f.)	20	3	5	3

年	月日	名称	会場	曲目	指揮者、ソリスト その他	出演者数 部員	準部員	OB	客員
	11. 27	第5回定期演奏会	海員会館	チャイコフスキー「眠れる森の美女」より6曲 ショパン P.f.協奏曲No. 1 ベートーヴエン 交響曲No. 5 運命 (アンコール) ハチャトゥリアン「ガイーヌ」よりバラの乙女の踊り	田中清三郎(Con.) 竹馬 清子(P.f.)	26	6	7	4
	12. 10	全響連合同演奏会	宝塚大劇場	ショパン P.f.協奏曲No. 1第1楽章 ドボルザーク 交響曲No. 5 新世界より	田中清三郎(Con.) 竹馬 清子(P.f.) 朝比奈 隆(Con.)	市大、阪大、関大と合同ピックアップメンバーによる			
1956	3. 25	教育学部卒演(第6回)	六甲講堂	モーツアルト P.f.協奏曲No.23	田中清三郎(Con.) 沢 満里子(P.f.)				
	5. 20	開学記念祭	六甲講堂	ベートーヴェン「エグモント」序曲 モーツアルト Fl.協奏曲No. 2 サンサーンス アルジェリア	田中清三郎(Con.) 高橋 一三(Fl.)	20	3	5	1
	6. 22	第2回旧三商大合同演奏会	東京都日本青年会館	モーツアルト P.f.協奏曲No.26 ベートーヴェン 交響曲No. 5 運命 ワグナー「タンホイザー」第三幕より	石丸 泰郎(Con.) 坏場 淳介(Con.) 河村 彦男(Con.) 鈴木 玲子(P.f.) 三大学合同合唱団(Chor.)	15	2	2	1
	7. 16	明科演奏会	長野県上田市公会堂	ベートーヴェン 交響曲No. 5 運命 シューベルト 交響曲No. 8 未完成 ハイドン 交響曲No.94おもちゃ ロッシーニ「セヴィラの理髪師」序曲 ブラームス ハンガリア舞曲No. 5 シューベルト 軍隊行進曲 レハール 金と銀	田中清三郎(Con.)	24	4	4	7
	11. 12	全響連合同演奏会	大阪産経会館	サンサーンス「アルジェリア」より3曲 ベートーヴェン 交響曲No. 5 運命	田中清三郎(Con.) 宮本 政雄(Con.)	ピックアップメンバーによる			
	12. 2	第6回定期演奏会	海員会館	シュトラウス「蝙蝠」序曲 モーツアルト 交響曲No.38プラーグ グリーク P.f.協奏曲 チャイコフスキー「白鳥の湖」より	田中清三郎(Con.) 塚本 保子(P.f.)	25	10	7	3
1957	5. 16	開学記念祭	六甲講堂	グリンカ「ルスランとリュドミラ」序曲 プッチーニ「ラ・ボエーム」より2曲 グノー「ファウスト」より1曲 チャイコフスキー「白鳥の湖」より8曲	田中清三郎(Con.) 渡辺 省三(Con.) 早川 和子(Sp.)	27	8	8	1
	6. 21	第3回旧三商大合同演奏会	国際会館	チャイコフスキー スラヴ行進曲 ラフマニノフ P.f.協奏曲No. 2	田中清三郎(Con.) 塚本 保子(P.f.) 三大学合同合唱団(Chor.)	32	6	7	2
	7. 19	松山演奏会	愛媛大学講堂	ベートーヴェン「エグモント」序曲 ハイドン 交響曲No. 5 チャイコフスキー「白鳥の湖」より1曲 ブラームス ハンガリア舞曲No. 5 ケテルビー ペルシァの市場にて シューベルト 軍隊行進曲	田中清三郎(Con.) 渡辺 省三(Con.)	29	6	10	2
	12. 2	第7回定期演奏会	新聞会館	ウエーバー「魔弾の射手」序曲 ラフマニノフパガニーニの主題による狂想曲 ドヴォルザーク 交響曲 No. 5 新世界より (アンコール) サンサーンス「アルジェリアのイタリア人」よりフランス軍隊の行進	田中清三郎(Con.) 則武 玲(P.f.)	32	9	9	7
1958	3. 21	教育学部卒演(第8回)	六甲講堂	モーツアルト Hr.協奏曲No.3第一楽章 ベートーヴェン P. f. 協奏曲No. 1 第一楽章 モーツアルト P.f.協奏曲ニ長調 グノー「ファウスト」より4曲 マスカーニ「カバレリアルスチカーナ」より1曲 モーツアルト「フィガロの結婚」より1曲	小泉 良(Con.) 塩谷 雄彦(Hr.) 進藤 悟郎(P.f.) 中塚 晶子(P.f.) 鈴木 堯子(Sp.)				
	5. 18	開学記念祭	六甲講堂	ドリーブ「コッペリア」より メンデルスゾーン V.協奏曲 プッチーニ「蝶々夫人」より1曲 ヴェルディ「椿姫」より1曲	小泉 良(Con.) 伊藤 黎子(V.) 小島 幸(Sp.)	29	6	10	0
	6. 18	第4回旧三商大合同演奏会	大阪毎日ホール	シベリウス フィンランディア 長広 敏雄 ピアノと弦のためのファンタジー ワーグナー「ニュルンベルクの名歌手」序曲 グノー「ファウスト」より兵士の合唱	阪本 良男(Con.) 内田 玲子(P.f.) 三大学合同合唱団(Chor.)	24	3	10	0

年	月日	名称	会場	曲目	指揮者、ソリスト その他	出演者数 部員	準部員	OB	客員
	7. 18	富山演奏会	富山公会堂	チャイコフスキー 「白鳥の湖」より メンデルスゾーン V.協奏曲 ベートーヴェン 交響曲No. 5 運命 (アンコール) チャイコフスキー 「白鳥の湖」より マズルカ	小泉 良(Con.) 伊藤 黎子(V.)	25	5	11	2
	11. 28	第8回定期演奏会	国際会館	グリンカ「ルスランとリュドミラ」序曲 サンサーンス V協奏曲No. 3 ベートーヴェン 交響曲No. 3 英雄 (アンコール) チャイコフスキー 「白鳥の湖」より イントロダクション	小泉 良(Con.) 伊藤 黎子(V.)	31	8	12	5
1959	3. 23	教育学部卒演(第9回)	新聞会館	モーツアルト Fg.協奏曲第1楽章 サンサーンス 「サムソンとデリラ」より1曲 モーツアルト 2台のピアノのための協奏曲第1楽章 ヴェルディ 「椿姫」より2曲 グリーク P.f.協奏曲第1楽章	長谷川昌治(Con.) 児島謙太郎(Fg.) 藤本 玄子(Al.) 池田 明子(P.f) 多田伊津枝(P.f.) 川崎 英子(Sp.) 前芝多賀雄(Bar.) 植田 嘉代(P.f.)				
	5. 18	開学記念祭	六甲講堂	ロッシーニ 「セヴィラの理髪師」序曲 モーツアルト P.f.協奏曲No.20 チャイコフスキー 「眠れる森の美女」よりワルツ	長谷川昌治(Con.) 森 洋子(P.f.) (旧姓 木村)	31	3	9	0
	6. 17	第5回旧三商大合同演奏会	東京共立講堂	ドヴォルザーク 交響曲No. 5 新世界より ワーグナー 「タンホイザー」より巡礼の合唱 ベルリオーズ 「ファウストの劫罰」よりフーガ	尾原 勝吉(Con.) 荒谷 俊治(Con.) 三大学合同合唱団(Chor.)	20	1	3	0
	7. 21	下関音楽会	下関市梅光女学校講堂	ロッシーニ 「セヴィラの理髪師」序曲 チャイコフスキー 「白鳥の湖」より7曲 シューベルト 交響曲No. 8 未完成 (アンコール) チャイコフスキー 「眠れる森の美女」よりワルツ	長谷川昌治(Con.)	34	4	9	0
	12. 4	第9回定期演奏会	国際会館	グリーク 「ペールギュント」より6曲 サンサーンス P.f.協奏曲No. 4 ベートーヴェン 交響曲No. 5 運命 (アンコール) ロッシーニ 「セヴィラの理髪師」序曲	長谷川昌治(Con.) 森 洋子(P.f.) (旧姓 木村)	38	10	12	3
1960	3. 28	教育学部卒演(第10回)	国際会館	ベートーヴェン 「エグモント」序曲 チャイコフスキー P.f.協奏曲No. 1 第1楽章 エルガー 威風堂々 モーツアルト 「ドンジョバンニ」より1曲 ヴェルディー 「椿姫」より1曲	長谷川昌治(Con.) 津田 昌男(P.f.) 白瀬 恭子(Sp.) 小阪 恵一(Tn.)				
	5. 15	開学記念祭	六甲講堂	ビゼー 交響曲No. 1 シュトラウス 皇帝円舞曲	長谷川昌治(Con.) 中島 良能(Con.)	34	4	4	1
	6. 24	第6回旧三商大合同演奏会	国際会館	リスト 前奏曲 チヤイコフスキー P.f.協奏曲No. 1 ベートーヴェン 「フィデリオ」より囚人の合唱 ワーグナー 「タンホイザー」より巡礼の合唱	長谷川昌治(Con.) 安見 泰子(P.f.) 三大学合同合唱団(Chor.)	33	2	8	3
	7. 9	第1回文化フェスティバル	国際会館	シュトラウス 皇帝円舞曲 シューベルト 交響曲No. 8 未完成	長谷川昌治(Con.) 中島 良能(Con.)	39	5	8	1
	7. 23	新潟演奏会	新潟市婦人会館	シューベルト 交響曲No. 8 未完成 ベートーヴェン 「エグモント」序曲 チャイコフスキー 「白鳥の湖」より4曲 シュトラウス 皇帝円舞曲	長谷川昌治(Con.)	42	5	6	2
	12. 7	第10回定期演奏会	国際会館	ニコライ 「ウィンザーの陽気な女房たち」序曲 ベートーヴェン P.f.協奏曲No. 5 チャイコフスキー 交響曲No. 5 ブラームス ハンガリアダンスNo.5 (アンコール)	長谷川昌治(Con.) 中島 良能(Con.) 尾崎 文子(P.f.)	53	5	7	10

備考 (凡例)

Con.	指揮者	P.f.	ピアノ	Tn.	テノール
Fl.	フルート	V.	ヴァイオリン	Bar.	バリトン
Fg.	ファゴット	Sp.	ソプラノ	Chor.	合唱
Hr.	ホルン	Al.	アルト		

定期演奏会うらおもて

「ステージは、練習の上に咲いた一輪の花である」その花を、より美しく、清く咲かせたいと念ずるのが、我々オケ・メンの共通の気持である。一見華やかに見えるステージも、その準備に要するエネルギーたるや、誠に尨大なものである。ここに年々の定期演奏会開催に到る楽屋裏ともいうべきものを、各項目別に分析してみよう。なお、定期演奏会も会場の変遷などに伴い、年々大規模なものとなりつつある。この資料は、一昨年よりの、国際会館進出後のもので、主として、昨年、本年の情況に基づいたものである。

○　演奏会の必要性

アマチュアオーケストラ、とりわけ学生オーケストラが、有料演奏会をやる必要があるか、このことは我々の最大の問題点であり、部員各人においてさえ相当に見解の相違がみられる。が、およそ芸術なるものは、自身が楽しみ自身で満足を感じた後に、一度これを世に問いたい、あるいは、極度の緊張の中でその実力をためしてみたいという欲求が起ることは至極当然のことである。これがさらに大きな団体となればそのことが芸術性追求手段から一つの練磨の目標となってくる。こういうところに演奏会の大きな本質があるのではなかろうか。ところで、神戸は文化不毛の地と言われている。なるほどそういえば、音楽に例をとっても、全国有数の大都市でありながらプロオーケストラの一つも存在しない。それでというといかにもおこがましいが、神戸に存在する綜合オーケストラは我が神大オケ一つというのが現状で、一般市民からも年々の演奏会に大いに期待をかけられている訳である。それに、もう一つ忘れることのできないことは、財政的必要性である。育友会からの年間予算が年４万円弱、部員からの部費徴収が計３万円というのが現状で、定期演奏会収入の６～７万円は、年間を通じての最大収入であり、部活動の重要なる財源となっている。

○　会場・日時の決定

まず会場であるが、表によっても分るとおり、一昨年、現在の神戸において最大にして最上の会場と考えられる国際会館に進出して以来、昨年本年共無言のうちに国際会館に決定されている。最近、音楽会、演劇会など各種催物が頻繁に行なわれるので、半年以上前から予約しておくことが必要となる。本年は12月７日の申込を新入生の入学式当日、すなわち４月11日に行なっている。次に12月という時期であるが、まず芸術の秋が最良と考えられる。ところが９月末～10月中旬にかけて試験が行なわれる。したがって夏休みから練習にかかるのだが、ここで約１か月の中断期間があるわけになり、本格的練習を始めるのはどうしても10月半ばである。ところで、我々学生オケが２千人からの聴衆の前で３曲、４曲を２時間にわたって演奏するには少くとも１か月半の練習期間が必要となり、11月下旬～12月上旬という線がでてくる。ところで、年２回の定期演奏会を行なっている学生オケがあるが我々の場合、４月に新学期が始まり、５月に開学記念祭、６月旧三商大交歓音楽会、７月合宿演奏旅行、９月～10月にかけて試験、12月定期演奏会、２月試験、３月教育学部の卒業演奏会と、固定行事がぎっしりつまり、年２回の定期演奏会は不可能といわざるを得ないのが現状である。

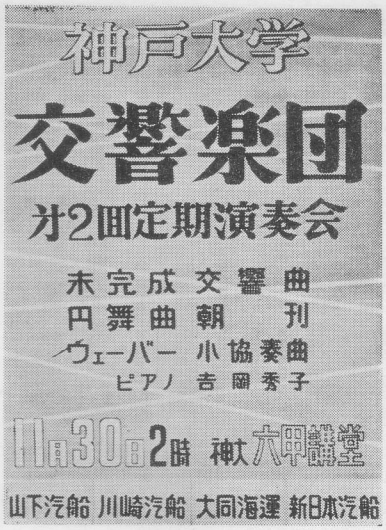
第１回～第９回定期演奏会プログラム

○　選　　曲

いやしくも単独演奏会をやる以上、交響曲、協奏曲、各１曲は欠かすわけにゆかぬ。しかし、これでは１時間半ももたぬ。そこで、序曲ないしは、組曲が必要となり、ここ数年来序曲（または組曲）、協奏曲、交響曲という組合せが、慣習となっている。まあ、これは最もオーソドックスな体裁でありここまでは問題ないのだが、では各々誰の、どの作品を選ぶかとなると、まず第１難関にぶち当る。我々のオケには、プロオケには考えられない、種々な制約があるのである。その第１が技術的制約である。いかに良い作品でも、我々に不可能なテクニックを要する個所があれば、その作品は問題外とされる。次に使用楽器である。神大オケというのは、あくまで一つのクラブであって、クラブ員全員で、音楽を楽しみたいわけで、歯ぬけの曲は、その曲を練習する際、不必要な楽器をやるものは、クラブ活動から除外されることになる。したがって二管編成で、しかも、すべての楽器の使われている曲が理想なのである。第３には、練習していて、楽しい曲でなければならない。ということは、とりもなおさず、練習意欲を湧かせる曲ということである。次に popular 性ということである。あまり聞いたことがないような作品ばかりのプログラムは、聴衆の入りにかかわってくるばかりでなく、第３の理由にも関係してくる。そこで、なるべく、名の通ったいわゆるポピュラーな曲ということになる。

○　組織の決定

学生オケは、演奏だけでなく、他のマネージメントをも、自分の手でやるところに良さがあるのである。ところが、いざ現実の問題となると、実際に動くのは、限られた数人、いや２，３人というのが、これまでの状態であった。そこで、本年は、すでに８月末、マネージャーの下に、プログラム作成、広告取、入場券販売、税務署、Ｐ．Ｒ．、印刷の各委員会を



置き、部員全員がいずれかの委員会に属することとした。そして各委員会の責任において広告取、入場券販売、P.R.に当りこれまでのマネージャー一辺倒から脱却しつつあることは、組織化の一端として、好ましい傾向と考えられている。

○ 予　　算

収入の部は、入場券の売上、広告費、プログラム売上で、支出の方は、会場費、印刷代、楽譜（スコア、五線紙、コピーなどを含む）その他、P.R.費、楽器運搬費、練習場借用費などがある。これで、できるだけ多くの利益を上げたいわけだが、毎年の例から約6～7万円の儲けというところである。すなわち入場券を1枚150円として、実際代金の入る枚数は1,500枚ぐらいで（実質の入場者の数ではない。というのは、例年、部員は10枚売れば1枚のリベートを受け、また招待状による入場者もかなりあるから）約22～23万円、広告費が3万、プロ売上が1万で、26～27万の収入、そこへ支出が、会場費に約10万、印刷代5～6万、楽譜1万、P.R.費1万、楽器運搬費1万、その他2～3万で約20万～22万というのが現状である。

○ 税 務 署

マネジーメント関係の難物に、税務がある。我々は学生オケで、純アマチュア・オケであるため免税となる。しかし免税は、ただ単に、アマチュア・オケであるというだけの理由ではだめで、税務署で、種々な角度から検討を加えられ、いかなる面からも免税に価するものという、免税審査に合格して後に行なわれるものである。したがって、その申請たるや、かなり複雑をきわめるのである。すなわち、予定純益証明書、学校クラブ証明書、代表者在学証明書を学長名で発行してもらい、これを特定用紙に添えて申請し、さらに入場券発行額（発行枚数×単価）の⅓を担保金として（例年約10万円）納めて後、始めて入場券の裏面に免税の印を押してもらえる。そして、もし現実が、申請と異ったところなどがあれば、あるいは赤字興業となった場合などは、この担保金は没収されるのである。以上のようなわけで、これを終えないと入場券の発行ができないことになるので、券発行を10月初旬にやろうと思えば、税務署関係は、どうしても試験前、あるいは試験中にやらなければならないことになる。

○ 入場券配布

次に、演奏会の成功、不成功の一つは、聴衆の数で決められる。我々が、できるだけ入場券を多く売って、満員に近づけたいと願うのは、単に財政的意味だけではない。そこでその販売ルートが問題となるのだが、プレイガイドへでも置いておけば、自然に売れるというのなら問題はない。が我々のは、売るというより、買ってもらうのが現状である。したがって、そのルートも部員の手から聴衆の手へというのが最も多くなるのである。昨年、本年とも部員一人当り40枚、OBへは5～20枚手渡している。そして、各学舎の食堂レジなどへ、また市内プレイガイドへも一応置いてはいるが、これらはほとんど期待できないものである。さらに我々の部では、かなり特殊な販売方法を数年前から行なっている。それは、11月に入れば神戸市内の近辺の会社、工場、学校へ売込みに行くのである。そして、それらの音楽関係の方々に、10枚とか20枚とかを預けておいて、売ってもらい、当日近くに、それを回収して歩くのである。これはもちろん市民へのアッピールを兼ねたもので、例年かなりの成績を上げている。

○ 練　　習

アマチュア・オケの生きる唯一の道は、ただ練習あるのみである。12月の定期演奏会の練習を始めるのは、7月の合宿中、遅くとも8月始めからはかかる。いうなれば4か月掛りである。しかし先に述べたごとく、9月下旬～10月中旬にかけては、試験があるので、本格的練習が始められるのは、10月中旬である。そして、コンダクターを中心に練習予定がたてられる。10月中は週2～3回、11月に入れば週4～5回直前の1週間ぐらいは、ほとんど毎日というのが、例年のことのようである。そしてその中で、管楽器・弦楽器に分れたパート練習の日が幾日かとられる。細かいところは、パート練習でしぼられる。しかしオケの良さは、本番より、むしろ練習にある。難曲を少しでも正確に、作曲者の意図を再現しようとする努力にこそ、大学のクラブ活動としての、オーケストラの真の姿があるように思える。

練　習　風　景

○ メ ム バ ー

国際会館で演奏会をやるとなれば、バイオリン7プルトに対して、ビオラやセロが2プルトやそこらでは、ヴォリュームのバランスがとれないばかりでなく、体裁も悪い。また特殊楽器になると、我々のオケでは、楽器もなく、奏者もいない。（ドボルザークの新世界交響曲の、コールアングレーなどはその好例）そこで、演奏会用の客員が必要となる。これはすべてコンサートマスターの責任の下で行なわれるものであるが、現在は管楽器は全員オケ部員（外部からの人でも、普段の練習はもちろん、合宿などに参加している、いわゆる

準部員は含める)、弦楽器もバイオリンはほとんど部員のみ、低音弦楽器だけが、相当の客員を必要とするのが現状である。

○ 当　　日

当日と書いたが、ヒナ段・反響板・譜面台・控室・録音・リハーサルなどのことは、すでに1週間ぐらい前に、会館の方と打合せておかなければならない。そして当日の仕事としては、受付・プログラム売り・花束整理・録音などがあり、メンバーの都合で、最初の曲に、あるいは最後の曲に、ステージに乗らない部員が、これらに当るが、途中の休憩時間でも、部長やマネージャーは、応待などで、ほとんど休む間がないのが毎年の例である。また終了後、楽器・楽譜・譜面台の整理が一仕事で、終って帰るころは、すでに会場・ロビーの電気は全部消え、正面玄関は閉ざされているのである。部員全員による、よりスムーズな処理が望まれる。

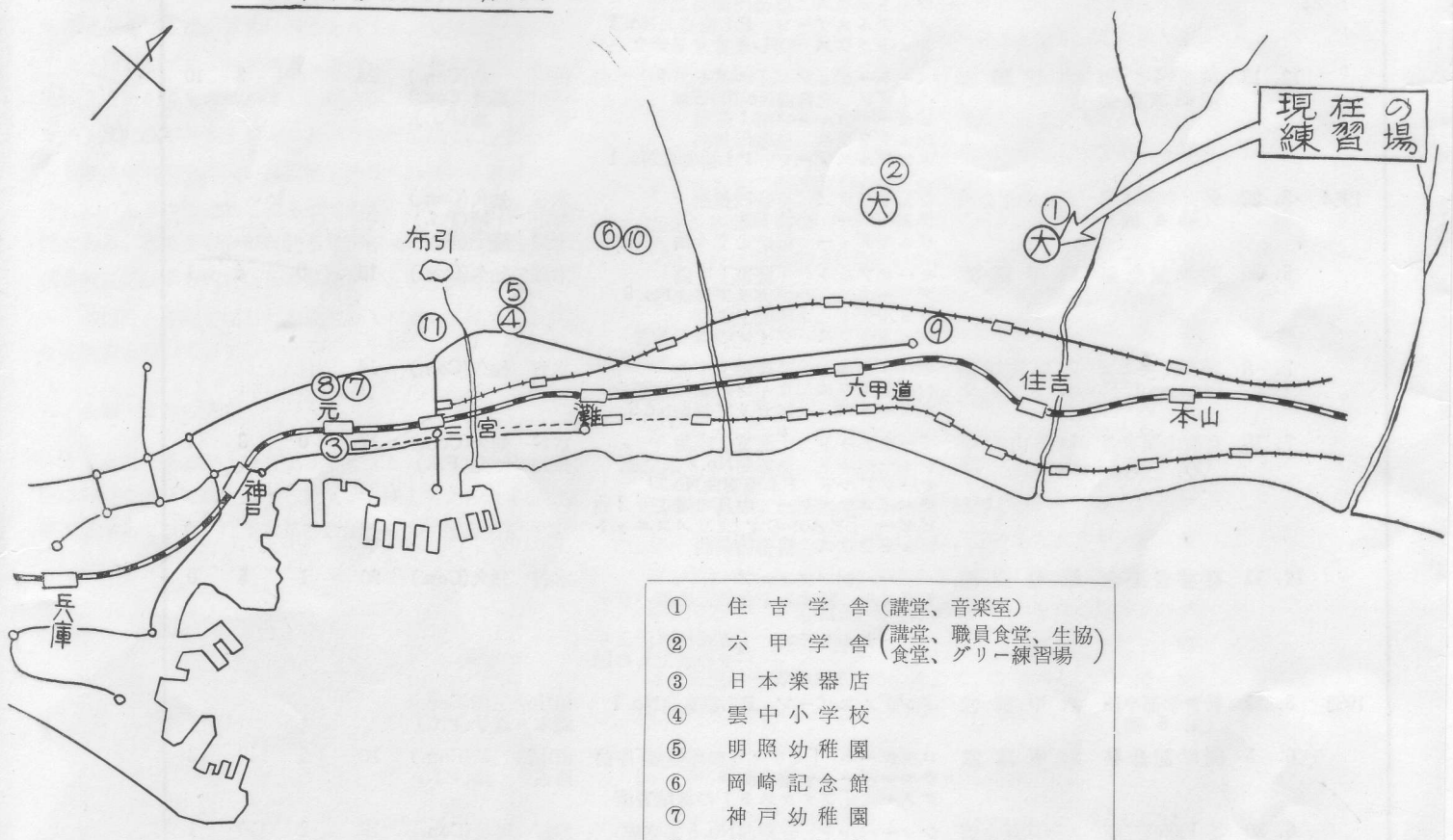
○ 反省会・慰安会

当日の録音を聞きつつ、演奏上の反省・マネージメントの上の反省が行なわれる。そして、この日をもって、部長・マネージャーの任期は終り、来年度の役員が改選され、新しい陣容でもって、発展の道をたどるのである。またこれとは別に、文字通りの慰安会が行なわれる。これまでは慰安会と反省会が兼ねられていたようだが、それでは十分反省点を検討することができず、別々にもたれるようになったのは、至極当然のことといえるだろう。

○ 決　　算

終了後、残余入場券を回収し、代金を集め、会場費・印刷代の支払いを終えて、決算書を作成する。そしてこれを催物終了用紙に記入し、純益証明書・支出証明書をつけて、税務署へ提出し、免税審査を受けて後、担保金を返却してもらう。担保金が返ってくると、まず一切の事務は終了したことになる。例年、演奏会当日より約20日後である。これを、できるだけ速やかにやるため、入場券代金・残余券を一時も早く回収することが部員の義務である。　　(藤原興)

練習使用場所



①	住吉学舎	(講堂、音楽室)
②	六甲学舎	(講堂、職員食堂、生協食堂、グリー練習場)
③	日本楽器店	
④	雲中小学校	
⑤	明照幼稚園	
⑥	岡崎記念館	
⑦	神戸幼稚園	
⑧	商工会館	
⑨	東神戸教会	
⑩	神戸高校同窓会館	
⑪	神戸ドレスメーカー女学院	

会計規模の変遷

項目 ＼ 金額 ＼ 期	Ⅰ 29.10.24 ～30.3.31	Ⅱ 30.4.1 ～31.3.31	Ⅲ 31.4.1 ～32.3.31	Ⅳ 32.4.1 ～33.3.31	Ⅴ 33.4.1 ～34.3.31	Ⅵ 34.4.1 ～35.3.31	Ⅶ 35.4.1 ～35.9.30
前期よりの繰越金	260	8,790	19,990	24,340	16,587	43,796	81,352
収入 1. 部費	4,450	9,800	10,980	13,170	14,900	22,800	10,850
2. 定期演奏会関係	0	60,070	87,820	228,860	49,876	245,675	0
3. 合宿関係	3,540	26,840	18,150	65,000	19,345	209,812	31,330
4. 各種出演料	8,350	22,380	9,000	45,965	35,000	10,500	10,000
5. 活動助成金	7,500	19,200	11,000	17,500	33,980	45,300	49,100
6. 返却金	0	100	1,000	725	5,755	5,805	15,200
7. 過年度分納金	0	0	1,000	100	8,960	7,900	1,000
8. 寄付	0	0	0	0	2,251	300	202
9. その他	4,460	28,860	5,620	2,800	72,274	7,427	1,119
10. 原簿調整	0	5	400	100	0	0	0
合計	28,300	167,255	144,970	374,220	242,641	555,519	118,801
支出 1. 楽器購入費	300	480	0	1,300	80,345	0	20,000
楽器維持費	4,700	1,000	7,770	17,520	30,860	49,570	8,590
2. 楽譜購入費	0	4,700	7,335	3,725	3,290	2,328	2,120
五線紙及謄写費	0	6,975	4,700	7,170	7,640	8,728	7,590
3. 練習関係費	2,000	10,720	18,285	27,035	30,945	43,850	410
4. 定期演奏会関係費	0	30,500	43,620	129,620	0	149,911	0
5. 合宿関係費	0	33,315	2,350	46,610	16,570	137,110	19,400
6. 事務及消耗品費	4,880	25,625	12,360	8,903	9,212	6,589	11,739
7. 備品費	20	3,000	2,540	5,820	7,150	280	9,874
8. 保存記録費	0	0	0	2,620	2,180	1,790	1,150
9. 立替及貸出金	700	6,900	1,400	13,750	3,500	70,357	52,020
10. 諸費	7,170	32,840	40,060	117,700	23,740	47,450	18,890
11. 原簿調整	0	0	200	200	0	0	5
合計	19,770	156,055	140,620	381,973	215,432	517,963	151,788
次期への繰越金	8,790	19,990	24,340	16,587	43,796	81,352	48,365

上掲の表は、歴代の会計係によって会計簿に記入されてきた収支をまとめたものである。現在もそうであるが従来神大オーケストラの会計においては、決算表における収支項目の分類にしろ、あるいは個々の記帳方法にしろ、統一された見解がなく、従って各年度を担当した会計係が、各々自分のよいと思った方法でそれぞれ処理してきた。それ故、個々の記帳方法においても、決算におけるまとめ方においても自ずと異ったものになっていた。本誌編集にあたって会計規模の変遷を概観することが要求されたので、歴代の会計係が会計簿(現金出納帳)に記入してきた収支を、同一方法によって再分類し、それをまとめてみた。しかし歴代の会計係による記帳方法の相違を全面的に補うことは、上掲の表においてはできなかった。その点については後述する。

なお、昭和29年10月23日以前の具体的な記録が全然入手できず、そのため、戦後のオーケストラ発足10年を記念するこの誌上においては、会計規模変遷の概観の意義は半減してしまい甚だ残念である。

× × ×

収入項目は、行事としてもまとまっており、関係する金額も多く、更に各々についての収支が問題となることが多い定期演奏会と合宿について、考察の対象としやすいように独立せしめた。その他のものについては、各々の性質上自ずと上掲の如くせざるを得なかった。

支出項目については、オーケストラに本来不可欠のものとしての、楽器、楽譜、練習に着目し、これらについてまとめそれぞれ1,2,3とした。次に収入項目におけると同じ理由により、定期演奏会関係費を4に、合宿関係費を5にまとめた。更に以上のことなどを実際にすすめていくために必要な主としてマネージメントに関する費用を6にまとめ、将来にもわたって有形的に存在するもので、楽器、楽譜以外のものを備品と考え、それらに関する費用を7にまとめた。オーケストラの活動を記録し、それを保存していくことは、オーケストラの成長に重要な意義をもっと考えられるので、特にその目的のために供された費用を8、保存記録費とした。部員のために一時融通した分とオーケストラの費用で一時立替えた分を9にまとめ、1～9のどれにも属さないものを10諸費とした。

各時期を担当した当時の会計係の計算上の、あるいは記入上の誤りによる食い違いを、今更書き直すこともできないので、計算上やむを得ず収入においては10に、支出においては11に原簿調整という処置をとった。これは例えば支出200円が実質的に100円としかなっていない場合や収入100円が実質的には200円になっている場合（例えば、残高18,500円から200円支出としておきながら、残高18,400円とした場合等）原簿による残高と、項目別分類から計算した残高との100円の食い違いの処理のため、100円を原簿調整による収入とみた。支出100円が実質的には200円という場合や、収入200円が実質的に100円としかなっていない場合は、100円の食い違いを原簿調整による支出として処理した。

収　　入

1．**部　費**　部員の増加と共に部費収入が各期ごとに増加しているのは当然のことである。しかし上掲表には表われていないが、部費納入状況をやゝ詳細に検討してみると、各期内においてみた場合、納入額に月によりかなり差異がある。これは部費の納入が毎月一様には行なわれていないことを示しているものであって、ともすれば部費滞納を生ぜしめやすい状態にあることが推測される。部費の月額50円という線はずっと崩れていないので、この点については特に変遷はみられない。

尚、Ⅲ、Ⅳの各期に80、70という端数が出ているが、これは50円の部費を30円と20円に分けて納めた部員があったためである。

2．**定期演奏会関係費**　この項には、入場券売上げ、プログラム売上げ、広告収入をまとめた。演奏会場が海員会館（Ⅱ、Ⅲ期）、新聞会館（Ⅳ期）、国際会館（Ⅴ、Ⅵ期）と規模が大きくなるにつれて、会計規模も大きくなっている。ただし、第Ⅴ期は定期演奏会を別会計にし、34年3月1日に決算し、その収支差額のみを記しているのであって、実際は241,105円である。第Ⅲ期と第Ⅳ期の差が著しいが、これは入場料値上げもあるが、海員会館から新聞会館へ移った際の当時の部員の切符うりや広告とりに対する張り切り方を示しているといえよう。なお、第Ⅰ期、すなわち昭和29年は定期演奏会を開いていない。

3．**合宿関係費**　この項目は、定期演奏会関係費と同様、三通りの記帳方法によっている。すなわち合宿期間中を別会計にする場合と、そうでない場合およびその折衷方式であるが、Ⅲ、Ⅴ、Ⅶの各期は第一の方法、Ⅰ、Ⅵ期は第二の方法。更にⅡ、Ⅳ期は第三の方法によっている。従って第一の場合においては、この項目には合宿期間中に部員から徴収した合宿費および出演料から食費宿泊費等の経費を差し引いた額と、合宿期間の前後に取扱われた合宿関係の収入が含まれることになり、第二の場合には、この項目には、部員からの徴収分そのもの、出演料等がそのまま含まれていることになる。（合宿については支出のところで更に述べる）

4．**各種出演料**　この項には、定期演奏会、合宿中の演奏会以外のすべての演奏会による収入をまとめた。いわゆる「ドサ」の出演料が主なものである。Ⅳ期が特に多いのは、この年に限り、旧三商大交歓演奏会の収益が約17,000円分配されたからである。その後、三商大演奏会による収益は原則として次年のために積立て、各部には分配しないことになっている。その他に特異な年としては、Ⅰ期に、小野フィルハーモニーと共に小野市で演奏しており、Ⅴ期に、芦屋ライオンズクラブから二度招かれている。開学記念祭、三商大、合宿、定期といった通常の活動以外の活動を示す一つの指標でもある項であるが、出演料の相場？　の変動もあり、必ずしも多額ゆえに、活発なりとすることはできないだろう。

5．**活動助成金**　ここに含まれるのは開学記念祭費として記念祭実行委から支給されるものと、大学文化総部から年間予算として支給されるものが大半である。開学記念祭と文化総部予算の規模の推移に伴い増加している。なお、昭和25年何とかオーケストラとしての形を整えようとしていた時代、約10,000円の予算を支給されていたが、当時10,000円を支給されていたのは、野球部とオーケストラぐらいであった。現在では文化総部内では劇研、童研についでいる。

6．**返却金**　未返済のままであった前年度以前の貸出、立替金が収められた場合がこの項に含まれる。Ⅴ期、Ⅵ期が多額なのは、Ⅳ期、すなわち32年の合宿で貸与されたものが、Ⅳ期中に返済されずⅤ、Ⅵの両期にわたって返済されたためである。なお同期中に返済された場合は、支出の立替、貸出金における対応額と共に決算表から除くことにした。

7．**過年度分納金**　ここに含まれるのは主として、定期演奏会の入場券の売上げの納入が次期にもちこされた場合である。未納のままであった部費が、卒業後に納入された場合もここに含めた。前年度分の部費であっても、学年が変っただけのものは、ここに含めず、1に含めた。ただし卒業生から納入された部費については、歴代の会計係の処理がまちまちでほとんどが1の場合と同様に扱っているため、卒業生の部費を特に7に含めることは全体からみたとき、会計規模変遷の概観という点ではさして意味はなさそうである。

8．**寄付**　他の部は大体、毎年先輩等から寄付をつのっているようであるが、オーケストラ部においては、そのようなことは行なわれてきていない。Ⅴ期が多額なのはコンパの剰余分を寄付金として処理したからである。

9．**その他**　上記1～8に含まれないものをすべて含む。主な内容は、コンパ剰余金、預金利息等である。その他特殊なものとしてはⅠ、Ⅱ期における楽器貸料、Ⅱ期におけるダンスパーティー収益（約14,000円）、Ⅵ期におけるティンパニ引取弁償金（4,800円、後述）がある。またⅤ期は多額にのぼっているが、このうちには預金引出による現金収入が70,000円あるからである。

支　　出

1a．**楽器購入費**　楽器を充実させていくことはオーケストラにおいて、最も重要な問題の一つであるが、楽器の新規購入の費用が、全期間を通じて全支出額の6.39％程度であるのはいささかさびしい。Ⅰ、Ⅱ、Ⅳの各期における購入品はいずれも玩具交響曲のオモチャであり、楽器らしい楽器が購入されたのはようやくⅤ期になってからである。この年にはヴァイオリン3、ベース、オーボー各1を買うことができた。楽器はある程度の耐用年数を有するものであるから、毎年々々買っていく必要はそれ程ないし、高価なものが多いから毎年買おうとしても買えるものでもない。従って楽器購入に要した費用の多寡をもってオーケストラの活動を云々することは適当ではないが、楽器購入費を毎年必ず積立てる等の方法が考えられて然るべきである。Ⅶ期の20,000円はAクラリネット代の一部である。

1b．**楽器維持費**　バスーンおよびオーボエのリード代半額分、弦楽器の弦、弓等の部品購入費と、修理費が含まれる。活動の活発化に伴い、楽器の損傷、消耗が激しくなるのは当然で、神大オーケストラが、定期演奏会の会場の変遷等にもみられる如く一大発展を成し遂げた時期と時を同じくして楽器維持費も飛躍的に増加している。ティンパニー皮が毎年5,000円～10,000円を占め、リード代、弦代もかさむ。更に諸楽器類にガタが来はじめ、大々的な修理を要する必要が生じてきている。Ⅵ期でベースに10,000円、Ⅴ期でバスーンに5,200円を費して修理しているが、ホルンに要した費用もかなり大きい。楽器本体のみならずケースの保全にも、かなりの費用が必要である。楽器維持費の増加は、オーケストラ活動の活発化と、楽器、ケース類の老化を如実に反映しているといえよう。

2a．楽譜購入費　スコア代およびパート譜の費用が含まれる。この費用はⅢ期以後、減少の道を辿っているが、それまでの蓄積もあり、減少故にオーケストラ活動が萎縮したとみることはできない。しかし楽器と同様、音楽活動に不可欠の財産たる楽譜の充実のため、演奏する、しないにかかわらず毎年相当額を楽譜購入にあてる必要があろう。Ⅲ期が特に多額なのは、日本に数冊しかないという。チャイコフスキー「白鳥の湖」の全曲を収録したスコアを購入したためである。

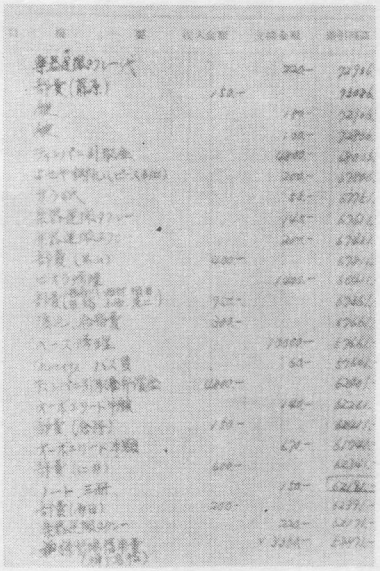
2b．五線紙及謄写代　部員の増加と新曲をどしどし取上げることによって五線紙の消費量は増え、コピーに要する費用も増加していることが伺える。

3．練習関係費この項目には練習場借用費と練習場移転に伴う楽器運搬費が含まれ、ごく大雑把に分けると大体半々である。日曜日は日本楽器、週日の練習は他所という状態のうちにあって、練習回数の増加と共に練習場借用費は増加し、それに伴い主としてタクシーによる楽器運搬費も増加してきた。しかるにⅦ期を迎え、一応住吉学舎を本拠と定めてからは、練習場借用費は不要となり、運搬費は演奏会で出かける時にのみ必要となるに至っている。

4．定期演奏会関係費　この項目にまとめたものは、会場費、入場券、プログラム、ポスター等の印刷費、広告費、著作権使用料、券売手数料であって、当日開催のために必要ないわば事務的、手続的費用のみである。実際上は定期演奏会を目指して楽譜を揃え、練習し、種々のマネージメントが行なわれるのであるから、これらも定期演奏会関係費の範疇に入れてしかるべきものであるが、定期演奏が如何に重要な意義をもっていても、それ自体が目的なのではなく、かりに定期演奏会がなくても、楽譜は揃えられるべきものであり、練習は行なわれなければならないものであるから、敢えて定期演奏会関係費には含めずに、それぞれ楽譜関係費、練習関係費、事務費に含ましめた。なおⅤ期は収入のところでも述べた如く、定期演奏会を別会計にし、収支差額のみが原簿に記されているので、上掲表においては0となっているが、実際は191,229円が別会計にあがっている。ただし客員の交通費は9.諸費に含まれるが、Ⅴ期のみは定期演奏会関係費に含まれている。この点は、先述したように歴代会計係各自の記帳方法の相違による不統一を是正しえなかった個所である。Ⅲ期とⅣ期の間に著しい差異が認められるが、これは会場が海員会館から新聞会館へ移ったため会場費が著しく増加したからである。Ⅴ期が19万円を要したのに比し、Ⅵ期が約15万円にとどまっているのは、前述の如く、Ⅴ期には客員の交通費が含まれているからであり、更にⅥ期当時、印刷屋の選択をやり直し、更にそれとの交渉によって印刷費の削減に成功したからである。従って数字上の規模においては縮少したような感があるが、内容的には極めて健全な発展をとげたものとみてよいであろう。

なお、われわれの定期演奏会は免税の許可を得て行なわれるのであるが、課税額に相当する額を担保金として一定期間納入しておかねばならない。ところが例年それだけの余裕がなく、先輩から5～10万円を借金してそれにあてている。

われわれの定期演奏会は、すべての点で重要な意義を持っているが会計面においても、活動に要する費用の重要な収入源として大きな意義をもっている。すなわち部費、助成金による収入は、楽器等の現状維持をまかなうのに精一杯で、とても成長拡充までに及ぼしうるものではない。助成金には自づと限度がある。また、部員の私有楽器の維持はすべて自費によっており、非私有楽器の維持も、すべてが部の会計によってまかなわれているわけではない。更に学舎分散の現状は練習に参加するごとに少なからぬ出費を他学舎の部員に要求する。かくの如く、オーケストラの会計簿上には現われないが、かなりの負担が、個人々々に課せられている。それ故部費の値上げはできるだけ避けられねばならぬ。こうした故に独立採算的に定期演奏会をみた場合に、単に収支相償うというのみならず、多少なりとも黒字を出すことが現実的要請となってくるのである。このときに、収入を増すことを考えるよりも、まず支出を減少せしめることに考慮が払われるべきであって、支出欄第4項目に載せられた費用のみならず、オーケストラ本来の意義から考えて上掲表中では楽譜練習、事務費に含ましめたが、事実上定期演奏会のために要している費用にも更に十分な考慮が払われねばならない。



5．合宿関係費　収入のところでも述べた通り、Ⅲ.Ⅴ.Ⅶ期は、合宿期間中は別会計の方法によっている。従ってⅠおよびⅥ期については、この項に合宿中の食事、宿泊、事務等の諸費、往復の楽器類の運送費、荷造代等が含まれる。すなわち合宿出発前（例えば調査費）、合宿中、帰着後に支払われたものがすべて含まれるが、Ⅱ.Ⅲ.Ⅴ.Ⅶの各期については出発前と帰着後に支払われたもののみが含まれることになる。更にⅡ.Ⅳ期には出発前と帰着後に支払われたものと期間中に支払われたものの一部が含まれる。この点も歴代会計係の記帳方法の相違による不統一が生じた個所である。従って上掲の表に示された数字を比較するのみでは関係費用の規模の変遷は把握しがたい。合宿においては、往復の交通費と2,000円を限度とする滞在費を各部員が負担し、それを越えた場合は部が面倒をみるというのが一応の原則のようになっている。一人2,000円以内で期間中のすべてを賄いうることはほとんどなく、部の会計から若干の補助がなされるのが通常であり、従って部員の増加と共に自づと会計規模も拡大してきていることがいえる。

第Ⅵ期において全期間を通じて最高の収益があげられているがこの内訳は次の通りである。

収入		支出	
参加者より徴集	75,500	食事、宿泊費	80,550
各種出演料	134,000	楽器類運送関係費	6,420
雑収入	312	調査準備費	8,660
		事務費	13,860
		部員親睦慰労費	21,740
		その他	5,880
合計	209,812	合計	137,110

この年は下関の人々の全面的な御好意によるところ誠に大なるものがあり、会計面でもこのように恵まれた結果に終ることはほとんど例外的なのであるが、期間中のほとんどをステージで過すタイプの合宿の一つの場合を示しているといえよう。次にⅤ期（富山）の場合を分析すると、期間中の別会計についていえば、

収入		支出	
参加者より徴集	64,620	食事宿泊費	118,510
入場券売上	99,180	演奏会開催費	45,100
出演料	32,000	交通・運搬諸費	18,619
寄付	10,000	諸費	4,282
雑収入	148	現金不足	92
合計	205,948	合計	186,603

と差引19,345円の黒字になっているが、その他に調査準備費チッキ代、土産物代等で16,570円かかっているから結局2,775円の黒字をあげ得たにとどまる。富山における合宿は到着後一週間ばかり練習に励み、その間に手分けしてポスターはり、キップ売りに歩いて演奏会を開き、その後ステージを三つ持ったというタイプの合宿である。練習量の問題とそれに伴う技術の向上、演奏に対する部員の心構え、ステージに追われるとかいう精神的、肉体的疲労の問題、マネージの難易等、合宿のあり方に関する問題は甚だ複雑であるが、少なくとも純会計的に、この二つのタイプの合宿と会計簿に現われた数字を考え合わせるとき、下関における合宿が例外的に高収益をあげえたことを割引いても、今後の合宿に対して何らかの指標が提示されるように思える。

6. 事務及消耗品費　ここに含まれるのは交通・通信関係の主としてマネージャーが要する費用と、紙、ノート、ピンノリ、セロテープといった品々に要する費用である。Ⅱ期が多額になっているのは、小野市で開かれた演奏会の交渉費と三商大関係の交渉費がかさんだからである。

7. 備品費　楽器・楽譜ではなく、事務用品であってもかなりの期間の使用に耐えうるものについての費用をここにまとめた。Ⅰ期は譜面台補修、Ⅱ期は譜面台、Ⅲ期は錠と譜面台入れ、Ⅳ期は謄写器および譜面台、Ⅴ期は楽譜等を入れる木製の箱と譜面台、Ⅵ期は錠、Ⅶ期は譜面台と鍵である。

8. 保存・記録費　オーケストラの活動を公式に記録しておくための日誌用ノート、テープ、写真代がこの項の内容をなす。ただし、日誌用のノートについては、その旨の記載のない場合があり、すべてがこの項にまとめられえたかは疑問であるが、大勢には影響ない。Ⅲ期以前はこうした費用の必要性が看過されていたのか、あるいは必要性は感知しても余裕がなかったのか、0が並んでいるが、新聞会館へ進出と共に公式記録のための費用が計上されるに至ったのは、偶然の一致かもしれないが、注目に値しよう。

9. 立替および貸出金　経済的困窮状態にある部員のために、立替えたり、あるいは貸付けることは、オーケストラの会計事情が許す限り認められてしかるべきことがらである。それが同年度内に返済された場合は問題はないが、返済されないまま、次期にくりこした場合は、支出としてここにまとめることにした。貸付が行なわれるのは合宿の際がほとんどであり、毎年何人かの人が合宿時に便宜をうけ、そのうちの何人かが、年度内に返済しなかったため、支出欄にあげられるに至るのである。Ⅵ・Ⅶ期においてかなり多額にのぼっているのは、個人の楽器購入にあたって立替えた例があったからである。

オーケストラ会計から、個人に便宜を与えるということは必ずしも非難されるべきことではないと前にも述べたが、その返済にあたっては、あくまで厳格に、スムーズに行なわれるべきであって、この点従来、貸した側を代表する会計係も借りた方も、多少ルーズに流れた点があったことは認めねばなるまい。特に借りた人は、何をおいてもその返済に努力しなければならないことはいうまでもない。今後にも少なからざる問題を残しそうな項目である。

10. 諸費　支出項目1～9のどれにも含まれないものをまとめたものであって、主要な内容は、花束代など他サークルとの交際費、オーケストラのより円滑な運営のためのコンパ補助、卒業生の記念品代等である。客員の交通費もここに含んでいる。Ⅳ期がひどく高額であるが、銀行預金（70,000円）をこの項に含めたからであって、実質は47,700円である。従ってⅣ期は全体をみた時収入より支出が多くなっているが、実質は収入の方がずっと多いのである。特殊なものとしてはⅥ期において、ティンパニが盗難にあい、古物商からの急報によってブチコワシ寸前に買い戻した費用4,800円がある。Ⅴ期が比較的少ないのは、定期演奏会の客員の交通費が定期演奏会の項に含まれているからである。

× × ×

従来から会計面に関して、部員は概して無関心ともいえる状態にあったといえるであろう。会計係が、部費とか入場券の売上げ金を徴収するときには、会計係がオーケストラ全体を代表しているにも拘らず、会計係個人が集めているかの如き態度で会計係に接する部員さえ、なきにしもあらずであり反面、財政状態に注意せず、会計係の了承を経ずに独自の裁断で出費してしまうことも皆無ではなかった。会計係が帳簿上でどう処理しようと部員全体にさしたる影響はなく、会計係がどういう方法で決算報告をしたところでやはりどうということはないのであるから、会計面と部員との間にある程度の懸隔が生ずることは、やむをえないといえる。

費用の多寡とオーケストラの内部的・外部的発展とが密接な関係をもつ場合もあれば、ほとんど関係のない場合もある。しかし、上掲の表により、不完全ながらもオーケストラの会計規模の変遷を概観するとき、全体としての会計規模とオーケストラの活動との間にはかなり密接な関係を認めることができ、会計規模の如何が部分的にはオーケストラの活動如何を左右する場合のあることすらうかがえるのである。

単に現金保管・現金出納の記録として会計面をとらえるのみならず、楽器、楽譜、備品などに関する費用の如きある程度の計画性をもって処理されるべきものはもちろん、会計制度の全体について、体系的な把握に留意することが、今後の活動に不可欠の要素となるといっても過言ではあるまい。

前頁カット写真は、昭和29年10月24日から現在にまで至っている会計簿の一頁である。

楽　　器

楽　　器	メーカー	使用開始 年 月 日	所　属
ピ ッ コ ロ	Nikkan	昭29. 3	学
フ リ ュ ー ト	Nikkan	25. 8	学
〃		25. 8	部
オ ー ボ エ	(ドイツ)	26.	学→部
〃	Nikkan	34. 1	部
〃	(ドイツ)	29. 2	部
クラリネット A	Orgi	35. 4	部
クラリネット Bb	Nikkan	25. 8	学
フ ァ ゴ ッ ト	(フランス)	6. 12	学
〃	Orgi	33. 2	学
ホ ル ン	Nikkan	28. 3	学
〃	Nikkan	25. 11	部
トランペット	Nikkan	33. 3	部
〃		26又は27頃	部
トロンボーン	(Bohemia)	25又は26頃	部
ティンパニー	Nikkan	28. 3	学
サイド・ドラム	Pearl	32.	部
ヴァイオリン	鈴　木	33. 4	部
〃	鈴　木	33. 5	部
〃	鈴　木	33. 5	部
〃	鈴　木	34. 11	部
ヴ ィ オ ラ	(チェコ)	26. 11	学
	鈴　木	26. 11	学
セ　　ロ	鈴　木	25. 7	学
	鈴　木	25. 7	学
コントラバス	(チェコ)	8. 6	学
	鈴　木	33. 5	部
	鈴　木	35. 3	学

(註) 26年使用開始のオーボエは大学備品であったが廃品扱いにされたので部有となった。

現在、我々のオーケストラには、大学備品たる国有楽器、先輩の寄付による、或は演奏会収益によって購入されたオーケストラ部有楽器、部員の私有楽器、借用楽器が混在し、それらによって一応二管編成に足るだけの数と種類を何とか揃えることが出来る状態にある。

音楽が普及した今日では、楽器もかなり普及し、楽器を持つ人の数も多くなってきてはいる。しかし一応交響楽団らしきものを編成するに必要な楽器は、まだまだ高価であり、更になかには非常な高価であるばかりでなく、オーケストラ以外ではあまり使用されることのないものもある。

こうした楽器類を部員の各々に要求してみたところで、その半ば以上、或は絶対的に実現不可能であり、特にはじめて楽器をやってみようという人にとっては楽器があるかないかはきわめて重要な問題である。それ故オーケストラ自体で必要な楽器類を揃える必要が生じるのである。さらに、オーケストラはある意味では超個人的、超時代的な存在、即ち年々歳々オーケストラを構成する部員は変ってもオーケストラは変らずに存続すべきものであって、オーケストラの編成が楽器を扱えるというだけでなく、その楽器をも持っている人間の入部如何によって左右されるというのであれば人の動きの激しい故に不安定なものになりやすい学生オーケストラの運命はますます不安定なものになってしまう。これを避けるためにも、部員の確保以前に楽器そのものを確保しておく必要がある。

以上のように考えるとき、オーケストラ部個有の財産としての楽器類の充実という問題はきわめて重要なものとなってくるのである。このような見地から現在の神大オーケストラに在る私有及び借用品以外の楽器、即ち先輩の寄付による、或は演奏会等の収益によるオーケストラ部固有の財産たる楽器と、大学備品ではあるが、オーケストラ部専用として購入されるのであるから部有楽器と殆んど同様に考えてよい、いわば準固有財産たる楽器をぬきだしてまとめたものが上掲の表である。

戦後オーケストラ生みの親の当時の部員の楽器を揃えるための努力は大変なものであった。戦前オケの話を頼りに六甲台の倉庫を探り、戦前の先輩をたずね、大学との交渉が続けられた。この熱意に応えてか大学も終始好意的であった。こうして比較的短い間に、現存の非私有楽器の半分以上が揃ったのである。

六甲台の倉庫から見つけ出された古い楽器のうちでも、特に注目されるのが昭和6年12月5日と記録のあるファゴットと昭和8年6月26日購入のコントラバスである。ファゴットはフランスから直輸入されたもので、当時はどこへ出しても恥かしくない最高級品であった。その立派な楽器をシロウトが大きな顔をして吹くのがはずかしいということであったが以来30年、現在では老化甚しく、昭和33年、新品のファゴットが入ってからは、二番奏者の手にあって、細々と鳴り続けている。管楽器と異り、一般に老化現象の少ないのが弦楽器であるが、昭和8年購入のチェッコ製のベースは、今もその黒いガッシリした体から低音を響かせている。神大オーケストラが始めて独自で購入したのは、昭和25年11月、田村宏氏のピアノリサイタルのマネージを担当して得た収益金によるNikkan製ホルンである。オーケストラの購入能力は極めて貧弱なものであったが、演奏会活動の活発化と共に漸く会計面にも余裕ができ、昭和33年には一挙にヴァイオリン3、コントラバス1、オーボエ1を購入するに至った。

今後オーケストラ固有の財産としての楽器を充実させていくにあたって、大学に積極的に働きかけると共に、オーケストラ自体が楽器購入のための資金を生みだすべく努力する必

写真は昭和6年からあるファゴットと廃品扱いになったオーボエ

要がある。現在、数の上ではそろっていても、殆んど使いものにならぬものが少なくなく、それらの殆んどが「安物買い」による結果であるといえることからみても、将来の楽器購入にあたっての計画をたて、毎年一定額以上を積立てる等具体的な方法が考えられて然るべき時期にあるといえよう。

なお、現在、個人の楽器購入にあたって、オーケストラでその代金の一部を立替えるという方法がとられており、それが現在の楽器編成に少なからず貢献していることは、無条件に認めねばなるまい。しかし超時代的、超個人的存在としてのオーケストラを考えるとき、楽器編成をこのような方法に期することは余りにも安易すぎるようであり、楽器はその持主と共に卒業してしまったのに、立替金だけが残っているという事態が生じるようなことは絶対にあってはならないのである。

以上の如く、従来オーケストラ部の運営にあたり、楽器購入の問題が一つの盲点となっていたことは明かであり、今後部有の楽器による編成について考慮されることは重大な意義をもつものであろう。

楽譜在庫表

神戸大学交響楽団　　昭和35年11月現在

作曲者	曲目
ベートーヴェン	交響曲第三番「英雄」 交響曲第五番「運命」 ピアノ協奏曲第五番「皇帝」 「エグモント」序曲
ベルリオーズ	「ファウストの劫罰」より ラコッチ・マーチ
ビゼー	交響曲第一番 カルメン第一組曲
ボロディン	中央アジアの高原にて
ブラームス	ハンガリア舞曲 第五番 ハンガリア舞曲 第六番
ショパン	ピアノ協奏曲 第一番
ドビュッシー	組曲「子供の領分」より ゴリウオグのケーキウォーク
ドリーブ	舞踊組曲「コッペリア」
ドボルジャック	交響曲第五番「新世界より」
エルガー	行進曲「威風堂々」第一番
グリンカ	「ルスランとルュドミラ」 序曲
グノー	歌劇「ファウスト」舞踊音楽
グリーク	「ペールギュント」組曲 (※)ピアノ協奏曲
ハイドン	交響曲第百番「軍隊」 ピアノ協奏曲二長調 (※)玩具の交響曲
ハイケンス	セレナーデ
イエッセル	錫の兵隊の行進
カバレフスキー	「道化師」よりギャロップ

作曲者	曲目
ケテルビー	ペルシャの市場にて
ハチャトウリアン	「ガィーヌ」より ばらの乙女の踊り
リアドフ	八つのロシア民謡
リスト	交響詩「前奏曲」 ハンガリア狂詩曲第二番
マックダウェル	(※)ばらに寄す
メンデルスゾーン	ヴァイオリン協奏曲 ピアノ協奏曲第一番
モーツアルト	交響曲第三十八番「プラーハ」 交響曲第四十番ト短調 交響曲第四十一番 「ジュピター」 ピアノ協奏曲第二十番 ニ短調K.466 ピアノ協奏曲第二十六番 「戴冠式」 ピアノの為のロンド ニ長調K.382 フルート協奏曲第二番 歌劇「魔笛」序曲
ニコライ	歌劇「ウィンザーの陽気な女房達」序曲
ポンキェルリ	歌劇「ジョコンダ」より 時の踊り
ラフマニノフ	パガニーニの主題による 狂詩曲 前奏曲嬰ハ短調 (※)ピアノ協奏曲第二番
ラヴェル	逝ける王女の為の パヴァーヌ
リムスキー・コルサコフ	歌劇「サドコ」より インドの唄
ロッシーニ	歌劇「セビラの理髪師」 序曲

作曲者	曲目
サン・サーンス	ヴァイオリン協奏曲第三番 ピアノ協奏曲　第二番 ピアノ協奏曲　第四番 アルジェリア　組曲 交響詩「死の舞踏」 歌劇「サムソンとデリラ」より バッカナーレ
シューベルト	交響曲第五番 交響曲第八番「未完成」 「ロザムンデ」序曲
シベリウス	交響詩「フィンランディア」
ヨハン・シュトラウス	歌劇「蝙蝠」序曲 円舞曲「美しき碧きドナウ」 皇帝円舞曲 円舞曲「ウイン気質」 円舞曲「南国のばら」 円舞曲「朝刊」 円舞曲「春の声」 アンネン・ポルカ 無窮動 ラデッキー行進曲

作曲者	曲目
リヒアルト・シュトラウス	楽劇「ばらの騎士」より 円舞曲
チャイコフスキー	交響曲第五番 ピアノ協奏曲第一番 舞踊組曲「白鳥の湖」 舞踊組曲「眠りの森の美女」 舞踊組曲「くるみ割り人形」より 花のワルツ （※）スラブ行進曲
ヴェルディ	歌劇「椿姫」 歌劇「アイーダ」より行進曲
ワグナー	楽劇「名歌手」前奏曲
ウエーバー	歌劇「魔弾の射手」序曲 （※）ピアノ小協奏曲
ヴオルフ・フェルラーリ	マドンナの宝石 間奏曲第一番

備考　その他不完全なもの、編曲したもの多数スコア数冊
（※）印は所在不明のもの、又は焼失のもの

楽譜在庫について

現在オーケストラにある楽譜で一応そろっているものは、ここに大体全部展示されているはずではあるが、従来楽譜の整理保管があまりうまく行なわれていなかった関係上確認されずに、ここには記載されていない楽譜もあるかも知れない。これはわがオーケストラには残念なことに部室というものがなく、従来楽譜の保管は個人が持ち帰ってなされていたということで、整理をするにも支障があったことにもよると思う。

戦後わがオーケストラも10年目を迎え、楽譜も年とともにその数を増して、やっと現在では上記の表のごとくなっている。しかしその10年の中にも消失したものもあるであろうしまた六甲台の食堂及びグリークラブ等の部室の火事や教育学部の寮の火事などで、昨年、今年と相次いで楽譜の焼失という難にあっている。このことは数少ない楽譜の中からのことでもあり、非常な痛手となっている。

上記の表では一応現存している楽譜である程度そろっているものを記したものであるが、非常に不足数の多いもの及び不完全なもの、また交響曲や協奏曲で一楽章のみのものなどは記していない。しかし上記の表に記したすべての曲目が今すぐ使用出来るというものではない。その中にはパートの足らないものや、プルト数の不足しているものが数多くある。このことはわがオーケストラの10年間の歩みの一面を示しているものといってもよいであろう。まだ部員の数も数少なかった時のものはプルト数も少なく、管楽器のメンバーも不完全なので、楽譜もととのったものではなく、今の多人数のオーケストラにはまにあわない曲目が数多いわけである。

楽譜のほとんどが写譜したものであり、その点、不完全なものが多い。特に写譜した楽譜から再び写譜したような場合非常に誤りが多く、こういうことからも今後の楽譜使用及び写譜に注意を払われたい。それにしてもこれら楽譜が毎年オーケストラの誰かの手によって写され、積みかさねられて今日に到ったということは意義のあることであり、オーケストラとしては宝として保存すべきものであろう。

現在の曲目の数では表でもわかる通り、オーケストラにとって充分とはいい難い。しかし出来上がったパート譜を購入するには大変費用がかかり、写譜するには多くの日数と人手が必要ということから急には改善することは無理であろう。

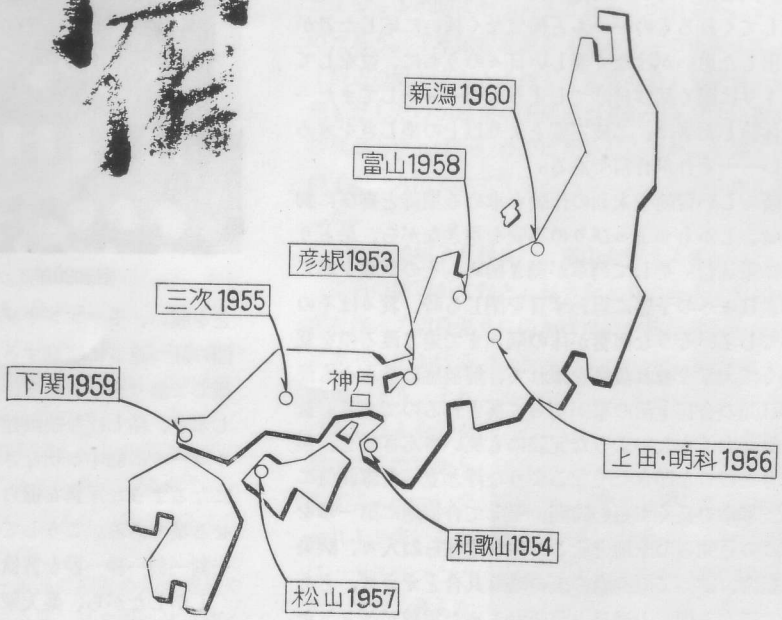
わがオーケストラも音楽活動を今後活発に行なっていくということにあたって楽譜関係の充実ということも重要なことの一つに数えることが出来る。従来、楽譜ということに関してはあまり関心がはらわれていない面もあったが、今後大いにこの方面に力を入れるべきだろう。具体的には、一つはスコアの面を充実させることである。これは従来個人的なものにたよっていたものであり、オーケストラ自体のスコアは非常に少ない（チャイコフスキー「白鳥の湖」他数曲）。選曲に演奏にその他何か調べようとする時にも役立つであろうから多分利用することも多いはずである。従って毎年（毎月でもよいが）何冊ずつかふやしていってはいかがなものであろうか。

次には多少個人的な意見になるかもしれないが、室内楽の楽譜をそなえてはどうかということである。これらのことは将来部室の出来た時にたいへん意義あるものとなると思う。

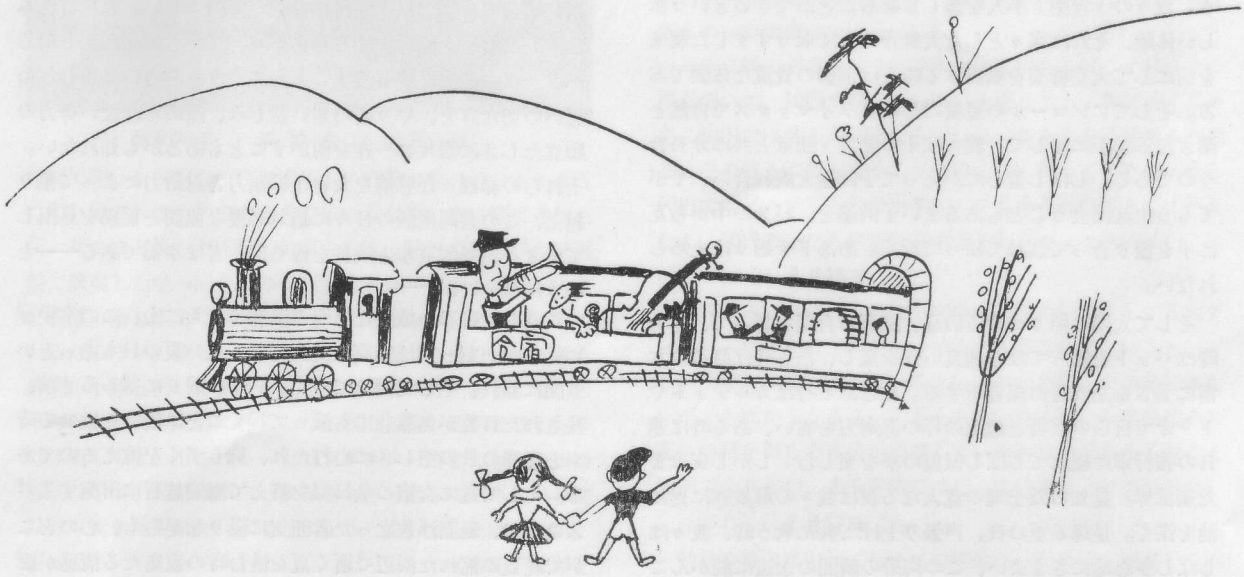
またもう少し進んで音楽関係の図書などもそろえてオーケストラのよりよい今後の発展にそなえるべきだと思う。

兎に角、楽譜は音楽活動の基礎になるものであり、その充実こそ現在最も取り上げらるべき問題である。

合宿



年度	期間	行先	スポンサー	巡回演奏会数	地方演奏会数	参加人員	慰安旅行先
1953	7.12～7.19	彦根		0	2	20	
1954	7.11～7.18	和歌山		3	1	現OB客 17 3 3	和歌浦
1955	7.11～7.18	三次		2	2	31	志学温泉
1956	7.10～7.17	上田 明科		0	2	現OB客 25 5 11	美ヶ原
1957	7.14～7.20	松山		7	0	現OB客 31 7 8	面河渓
1958	7.11～7.22	富山	北陸電力KK（安村善一高商20）	4	1	現OB客 34 12 9	称名峡
1959	7.13～7.22	下関	大洋漁業KK（中部利三郎高商18）	5	1	現OB客 34 10 8	秋吉台
1960	7.16～7.25	新潟	新潟臨港開発KK（大久保賢治郎高商10） 佐渡汽船KK 新潟鉄工KK	4	1	現OB客 44 7 6	佐渡



合　宿　賛　歌

ある春の日に、あまりにも大きな期待に胸はずませてオーケストラの門を潜った者の幻滅に傷ついた心を、その夏暖かく慰め癒してくれるもの——ふと何気なく誘いに応じた者がそこに見出した思いがけなく楽しい日々のうちに、彼をしてオーケストラに固く結び付けてしまうもの——そしてまた一度それを体験した者は、二度三度とより以上の楽しさを求めて止まない——それが合宿である。

何か素晴らしい冒険や未知の体験を求める期待と喜びに胸ふくらませ、しかもちょっぴりの不安を抱きながら、足どり軽く列車に乗込む。そして列車が動き始め、その衝撃を感じて来るべき日々への予感に思わず目を閉じる時、我々はそのまま死んでしまいそうな興奮が体の隅々まで走り渡るのを覚える。かくて大学を離れ故郷を離れて、解放感に身も心も浸りきる10日間の合宿生活の幕が切って落されるのである。普通なら全然面白くもないような冗談にも笑いさんざめき、無口な者でさえ軽口を叩きたくなるような浮き立った雰囲気に満ち溢れた車中の長くて短い時間、そして合宿地に第一歩を印して、この見知らぬ土地とそこに住む見知らぬ人々、馴染みの無い宿舎、初めての夕食の飯の盛り具合とオカズ、とあらゆる物に好奇と期待と満足と失望をこめた視線がキョトキョトと注がれるうちに、夏の日も早々と暮れて行く。

見知らぬ土地の初めての夜は、その柔かきピロードの腕もて旅に疲れた肢体と、ささやかなる興奮に波打つハートをばやさしく抱きて愛撫してくれよう——早速始める誰かの告白的体験談や、時折襲い来る枕の雨さえ気にしなければ——。

ふと醒めて、自分がどこにいるのか戸惑う一瞬、昼間の生意気な面からは想像もできないほど無邪気な寝顔を周囲に見出して、合宿の初めての朝を迎えたことに気付き、思わず大声をあげて暁の眠りを破ってしまう。こうして我々数十人の共同生活が始まる。朝食——練習——昼食——練習——夕食——練習と昼夜を分たず激しい練習が続けられる。そして学校廻り演奏会——狭い舞台で珍奇な目を見張る子供達と膝を突き合せて互にお辞儀を交し合い、自家製の誰もが弾ける曲を大きな顔をして演奏できる楽しさ。楽器紹介でとちって赤面する恥かしさ。我々の拙ない演奏を、あるいは首を振り、あるいは共に唱和して純粋に楽しんでくれる素朴な子供達を前にして、我々は胸がいっぱいになるほどの幸福感を味わう。我々の「音楽」が人を楽しませることができるという新しい体験、それは寒々とした大舞台の上で取りすました聴衆を前にして大交響楽を演奏する時とは別個の貴重な体験である。そしてアンコールの荒城の月のクライマックスで自然と湧き起る拍手に接して、我々はその感激を聴衆と共に分ち合うのである。しばし童心にかえって子供達と戯れ合い、やがてもう生涯出会うこともあるまい子供達と、バスの中から互に手を振り合って別れて帰って行く。ああドサ廻りは止められない。

そして太陽の照りつける白昼、練習の合間を縫って、ある時はバットを振っては心地良い汗を流し、ある時は海辺の水浴に暑さを忘れ目の保養をする。またある時はカルテットやトリオで自らの技術と他人の耳の忍耐力を養い、ある時は連日の強行軍に疲れてしばし仮寝の夢を楽しむ。しかし夜はまた別世界。見知らぬ土地の寛大なる夜は我々の解放感に更に油を注ぐ。星降る夏の夜、声張り上げて共に歌う時、我々はしばし夢心地にさまよい、この陶酔の瞬間の永遠に続かんことを願い、トランプやゲームに我を忘れてさわぎ廻る時、時間の経つ速さに嘆息する。時には図に乗って月を明りに夜を徹して語り合い、あるいは鼻をうごめかしながら繁華街をのし歩き、怪しげな映画館で卒倒しかけたり、思わず過したアルコールに胸中の切なさを暴露したり、孫子の代まで語り草になるような写真を撮られたりするのは、皆この解放感のなせる業である。こうして、過ぎ行く日一日を惜しんで我々、一刻一刻一秒一秒を貪欲にむさぼり楽しむのである。

昭和30年　三　次　合　宿

しかしながら、楽天家もいれば悲観主義者もいる。現実主義者と理想家、感情家と理性派、その他あらゆる性格とエゴイズム、優越感と劣等感を備えた数十人の野郎どもと乙女達が、一つ屋根の下で同じ釜の飯を食う時、表面和気あいあいとした日々のうちにも、激しく絡み合いもつれ合う人間感情の相剋を生み出すことは当然である。戯れに交わす何気ない言葉や仕草の節々に、思いがけずも生れて来る親愛感と愛着、ちょっとした語り合いの間にふと触れ合う心と心は時には尊敬と友情を生み、あるいはもっと甘い、ある種の感情に身を焦すこともあろう。

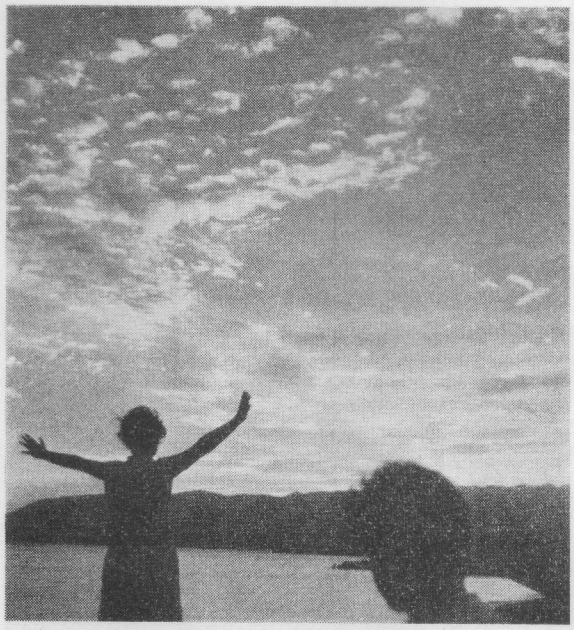
親睦感というものは、「練習が済んだ。さあ親睦に取り掛かろう」と、ことさら改っても生れて来るものではなく、互に汗水流し助け合う荷造り作業や楽器運びのひと時、楽譜写しに追われる夜更け、あるいは部員総会のトンチンカンな問答やドサ廻りのバスの中——と合宿生活の総ての瞬間あらゆる機会を通じて自然と湧き出て来るものである。

けれども、暑い夏の物憂い午さがりや長いけだるい黄昏時に、心の小さな空白からそっと忍び込んで来る倦怠と退屈に身を持て余し、月のない夜、皆の出払った後の人気のない薄暗い宿舎の片隅で、孤独な心を抱いて白々しい寂寥に打沈みあるいは反感と嫌悪、憎しみと怒り、軽蔑と嫉妬が楽しかるべき一夜を無惨に塗り潰すこともあろう。あるいは報われぬ思いの切なさと、やり場の無い悲しみ、認められない努力の腹立たしさに悶々の一夜を明かすこともあるかも知れない。それらの赤裸々な感情を大きな抑制力と忍耐力によって乗り越え、この共同生活の日々に絶対必要な協調と妥協を見出して大きな精神的進歩と成長を獲ち得る者は幸福である——というは易しいが——。

こうした青春の繊細な感情の渦巻くうちにも、この生甲斐に満ちた一刻一刻は音高く流れ行き、長い夏の日もあっという間に暮れ、そして明けてゆく。いつか眠りに落ちる寸前、残された日数が無慈悲にも減って行くことに思いを馳せる時ふと青春の日の空しさに心打たれ、胸うずくを憶えるのである。そして遂に合宿の全日程を終えて慰安旅行に出発するバスの中で、表面浮き立った雰囲気に浸りながらも、心のどこかで晩夏の荒れた浜辺で逝く夏を惜む時の寂寞たる情感が膨

らみ始めているのを感じ取るのである。そして青春の哀歓とともに、夢のごとくに過ぎ去ったこの10日間を精一杯生きて来た町に別れを告げて帰途につく時、それは俄に胸を締め付け、車窓の外をゆったりと流れ去るあの山この街のたたずまいを、万感迫る胸の奥底に刻み込むように、感慨無量の眼差しで見送るのである。10日前、喜びに躍る足どりで旅立ったプラットホームに降り立った我々を迎える白々しい朝や、よそよそしい夜、軽くなった財布と重い足どりで我家に帰り着いた時の安堵とそれにも増して空虚な心——。けれどもその夜懐しい夜具に疲れ切った身を横たえる時、君はふと合宿前には無かった何か新しいものが心の片隅に巣喰っていることに気付いて、疲れた空しい心が暖かく潤おされるのを感ずるだろう。それは新しく芽生え始めた友情かも知れない。それはオーケストラに対する新しい執着かも知れない。また時には、もっと個人的な甘く苦い情感に枕を濡らすこともあるかも知れない。けれども愛情や友情が得られずとも、この10日間の貴重な体験は、決して失われるものではない。それは、愛情や友情がはかなく失われた後にまでも決して消え去ることのない豪華な思い出として、君の人生を豊かに潤おすことだろう。そしてこの合宿で得たものこそあれ、何一つとして失ったもののないことに気付くだろう。

私は今、まざまざと思い出す——新潟の宿舎の部屋部屋や物干台、そしてうらさびれた相川の夕暮、日本海に沈みゆく夕陽と水の冷たさを。雨の下関の朝、宿舎の前の細い海峡を抜けて出て行く漁船の汽笛——そしてあのマイクロバスを忘れはしない。券を売り歩いた炎天下の富山の街々、あの異郷



昭和33年　淡路島江井海岸

の地で開いた演奏会の夜の素晴しい感激は昨日のことのように思い出される。松山の宿舎の広い風呂場、虫に悩まされた夜、死ぬほど笑った「貫一お宮」の夜。明科のひなびた映画館で演奏した唯一回きりの「慕情」。また「オオ・スザンナ」で感激の余り駅まで握手を求めに来たオッサンは今どうしているだろうか。美しい三次の川は今も流れ、あの銭湯へ通う薄暗い小路と低い軒並は今もなおほの暗い灯をともしているだろう。自責と反省に終始した和歌山の長い眠い夜さえも今では楽しく思い出される。そしてポスター画きに過した雨の彦根の午後、琵琶湖の白い夕靄の中へ、真赤に燃えながら沈み行く大きな太陽を、私は忘れない。決して忘れはしない。

（吉田　昭記）

日　誌　抜　粋

昭和32年７月15日　　松山合宿（２巻）

朝の練習後、愛媛県医師会館でステージ。まず楽器紹介、ファゴットの時にちょっとざわめきがおこる。よほど珍しいのだろう。「軍隊行進曲」「ペルシャの市場にて」「旅愁」「浜辺の唄」「赤とんぼ」「荒城の月」を演奏。途中より退屈しだしたのか聴衆の子供達がざわつきだす。数曲つないで接続曲とすればいいのではないだろうか。全部すんだ後、女の子が一人出てきて礼をのべる。いささかてれくさい感じがした。

昭和33年７月14日　　富山合宿（４巻）

午前の練習がすむと、昼食をとり、各人はそれぞれグループを作って切符売りに出かけた。一体なぜこんなに皆は熱心に売りに出かけるのでしょう。それはもちろん会計を黒字にしたいからですよ。——いやそれより良いことは……エヘヘ……それはね、最もたくさん売ったグループにはスイカがあたるからなんです。とにかく皆できるだけ多く売ろうと力一杯張りきった。でも全体的にあまり成績はよくない、最高は１日目で、売れたものではないが、配った枚数で言えば長谷川組が百枚でトップ。実際にこれだけ売れればいいのだが今日は切符の売れ行きを期待しながら寝入ることにしよう。

昭和34年　下関合宿　綾羅木海岸

昭和34年７月14日　　下関合宿（７巻）

真向いの彦島との間の海を通る漁船の音で合宿第２日の朝は明けた。まだ昨日来の雨が残り、あたりはもうろうとしている。８時すぎにバスが来た、吹きぶりの中での運搬作業は本当につらい、しかしその辛さも初日ということでファイトに吹き飛ばされてしまう。バスはやがて長府小学校へ、初めてのステージは不安が大きい、ミスも多かった。何しろ雨天体操場と兼用の舞台のことゆえ、音響効果ははなはだおもわしくない、天井にザアザアまるで万雷の拍手のようだ。ミリタリーマーチに始まり、楽器紹介、浜辺の唄、運命、ほか数曲を演奏して最初のステージは終った。出来栄えはお世辞にもよかったとは……。

その会場であるオケマンの小学生に問うて曰く「君、今の演奏聞いて、10円でやったら安いと思う？」「ウン」「じゃあ、20円では？」「20円でも安いわ、なあ」と朋輩をふり返る。その答えに気を良くした彼氏、更に問うて「そやったら50円では？」するとその小学生、さもあきれたごとく「そんなん、50円やったら絶対に高すぎるわ」ガックリ。

７月15日

今日も雨である。今日は小学生ばかりを対象として３ステージあった、そのどれをとってみても観客の喧しいこと、どだい小学生にじっとしていろというのが無理なのかも知れないが、とにかくうるさい。ある人のいうには、小学生達のお互いの話を僕らの音楽が邪魔しているかの感があるとのこと冗談ではあるが、ある意味では当っているような気がした。

７月17日

初日の舞台は生れて初めての経験だったので、演奏してい

るところを目で追うのが必死だった。ところが2日目、3日目と慣れてくるにつれて、弾けない所も弾いているふりをしようと努めだした。1曲終るごとに〝純心な小学生を騙しているのが気にかかり、罪悪感におそわれて困った。といっても何もしないでいるのは、よけい悪いし、全く厄介な存在だと思う。しかしそういうことがあっても毎日の舞台はスリルに富んでいて楽しくて仕方がない。

7月19日

合宿生活を送っていると「今日は何曜日？」というような観念が全く消失してしまう。よくよく思い出してみると、神戸を出発してからちょうど1週間目の日曜日であった。休養日だというので練習は午前中だけで、午後からは海水浴とシャレコンダ。太陽は雲間に隠れて絶好の海水浴日和ではなかったが、それでも適当に泳いで、後はボートに乗ったり、沈めたり、また砂浜では貝がらを集める者や、砂製造形美を求めようとしてか、砂つみ競争をしたり、創造力豊かなる者どもは、Sleeping Beauty の具現に努力していた。元気旺盛なる年頃、相撲、かけっこ、果は三段飛、巾飛とローマオリンピックを目ざしているのではなかろうけれど、神大オケオリンプックで金メダルを得ようと大はりきり。久方振りに(？)童心にかえった午後のひとときであった。

7月20日　ソフトボール

3時ごろから大洋漁業のノンプロソフトボールチームとソフトボール大会があった。ソフトボール大会は合宿の恒例の行事ですが西日本一のこのようなチームと試合をするのは初めて「負けてもともと、勝った場合はオケ史に残る記録」云々といっている者があったが実際やってみるとなんのその、全然話にならい。仁井さんの名監督、笹井・水垣両氏のランニングホーマー、藤原捕手のダブルプレーなど数々の名演技のもとになごやかな試合になりました。スコアーは「8対4」このあと塵捨てるべからずの立札のある所に座りこんで楽しいパーティーが開かれた。大洋漁業の人達と話し合うぐらいはしてもよかったと思うのだが、ビール、サイダーを飲みつまみをほうばるのに精一杯のようでしたね。ただとなるとこうなるものでしょうか。

昭和35年7月22日　新潟合宿（10巻）

合宿最後の婦人会館での演奏会が終ると、約⅔の人達は夜の暗闇にいずこへとも知れずきえゆかれました。居残り組はがら空きのバスに椅子を積み込んで宿舎にもどりました。ひとしきり、冷えたサイダーとジュースのセミコンパでさわいでから、部屋にひきあげました。夜の静けさに、そぞろ心さそわれて、N子嬢と噴水のそばであれこれと語らいました。ともにオケでは初心者として出発し、毎回の練習ごと、演奏のたびに、自分に幻滅を感じていく間柄、この合宿でもいつも一緒にいたものの、はじめてお互の気持がスカッととおるようでした。門限は10時、その25分前あたかも門番のごとく門の横にひかえた私たちの前に、スーッと自動車がすべりこみ、4～5人一組にしのびやかな御帰館。ここに見物人ありとは、全然気もつかれず。5分前まで同様のことのくりかえし。誰が門限におくれるかなど知ろうとすれば、こちらも締出しをくってしまいそう。それで私たちもおしゃべりと見物にきりをつけました。

7月23日

午前中練習、その後昼過ぎまでに楽譜整理。午後は荷造り。人数が増えたためか、皆が熱心なのか、リーダーが上手いのか、いろいろ理由もあろうが、今年の合宿で特筆すべきことは楽器運び、荷造り、後片付けなどの作業が例年に比べて幾倍かスムースに運ばれたことである。1，2年の諸君どうも御苦労様でした。

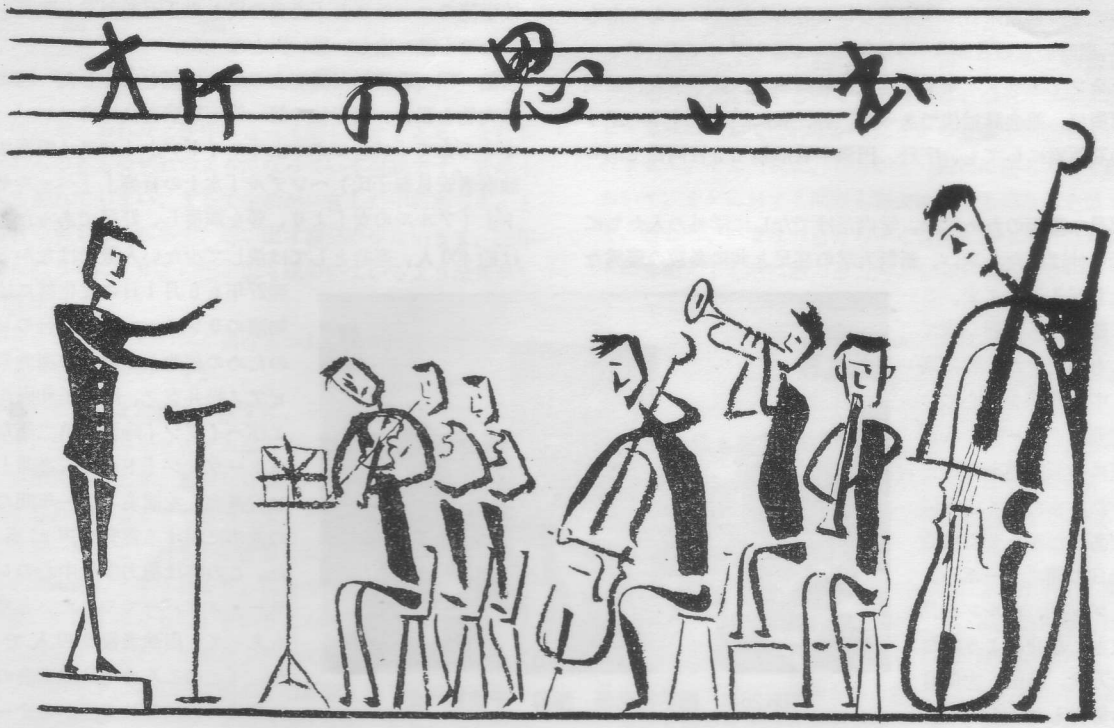
7月24日

7時半起床、簡単に後片付けをして待望の佐渡へは8時半出航の「ゆめじ丸」で快適な幕をあけた。途中視界一杯の海は穏やかで酔うものも無く、飛び魚、海の色に興じ、昼前に両津上陸。午後はすさまじい悪路をオケサの宣伝ばかり聞きながらバスに揺られ、尖閣湾などみて廻る。旅館はこの辺すなわち相川では安くて（悪くて？）有名なつるま屋。夕食後はほとんど全員浜辺に出て、日頃愛用の楽器とともに佐渡の一夜を楽しむ。

昭和34年8月15日　江井キャンプ（7巻）

江井キャンプの第1日目、キャンプ地は郡家の岬と江井の岬との間にできた大きな入江の一番右端の砂浜で、東に郡家江井の港、西は岬で北に向った浜である。波は静かで、海水は美しく、波打際に立つと5，6m先の底が見える。テントに到着して薪を買い夕食のしたくにとりかかる。カマは野村エンジニヤーが設計、製作、建築科だけあって形は美しい、しかしいざ火をつけると火はなかなか燃えない。美しいものが必ずしも立派であるとはかぎらない。夕食後は岬の山へ、あるいは浜辺で、それぞれ思い思いの所で過し、12時ごろテントのムシロの上で眠る。真夜中にカニがテントの上をはう音を雨の音と誤って飛び出すあわて者もいたが、やがて全員無事に静かに寝入った。

昭和33年　淡路島江井海岸キャンプ



ゆりかご時代の神戸大学オーケストラ

千葉修二

「10年一昔」と言うが、ついこの間発足の弱々しい声をあげた神戸大学オーケストラが、もう10年の歴史を作ってしまった。生み出す喜びと共に、苦しみと心労の連続であった発足当時をふりかえって見ると、全く感慨無量である。学生時代とは事志と異り、サラリーマンに変身してからと言うものは、それまであれ程心血を注いだオーケストラとも全く疎遠になってしまい、風の便りに聞くその活躍振りに、後輩諸君の健斗を祈ると共に、色あせた情熱に再び火のともるのを感じるのであった。

思えば、戦後の混乱期に学生時代の大半を過ごしたわれわれに、まともな音楽のテクニックも理論もあろう筈がなかった。ただ、音楽に魅せられたわれわれ四人の友情と熱意と夢が、オーケストラの結成へと、次第に形を整えて行ったのである。

当時、砂糖ばかりの配給に、六甲台への坂道を上り切れない寮生もあったと言う暗黒時代も、漸く過ぎ去ろうという予科2年（神戸経済大学予科、昭和23年）の春、アルバイトのかせぎ5,000円也を投じて、ヴァイオリンを習い出した私に少し遅れて、予科有数のバンカラで鳴らしていた石原、宇野（現在、岡島姓）の両君が、何を感違いしたのか（これは当時の同級生の評価であった）ヴァイオリンを習い出し、3年生の夏ごろには、われわれ三人、恥し気もなく六甲台の教室で、二重奏、三重奏をやり出したのである。

このころ、やはりこれまた、音楽など柄にもないと衆目一致していた円満字君が、突如として「俺はセロをやる。」と宣言して、われわれの仲間にとび込んできたのである。今でこそ、音感教育も大分徹底し、楽器の形なり、役割なり知らぬ人は少いほどであるが、当時のわれわれは全くの無知蒙昧、とにかく仲間が増えることなら何でもよい、やれ、ということになって、ここに輝やかしい神戸大学オーケストラの第一歩が踏み出されたわけである。

かくして、3年生の終りごろから、当時グリークラブの名指揮者であった柚花さんや米田、浅野さん等の学部上級生を統合して、次第にクヮルテットないしは小合奏団が形成されて行った。そして、いよいよ昭和25年、われわれが学部1年生となると共に、本格的なオーケストラ（神戸商大オーケストラ）の先輩を探しまわって、経験を聞き、知識を広め、復活への協力を依頼した。また、先輩の記憶をたどって六甲台の倉庫を探しまわり、セロ、バス、ファゴット、コルネット、アルト、トロンボーン各一つずつの楽器類を見つけ出した。これだけでは、到底オーケストラの格好すらつかないが、ヴァイオリン以外の楽器がそろったということが、われわれには飛び上るほどうれしかった。また、同時に上野（学部3回）山中（高商13回）西村（学部8回）岩崎（学部2回）安田（学部11回）等の諸氏に泣きついて、フルート1本を、またその後、オーボエを寄付してもらった。

これで一応形だけは曲りなりにもでき上ったが、今度は部員の獲得という大問題が残されていた。そこで各部員は手分けして、およそ音楽に関心を持っていそうな人間には1人残らず、参加を勧誘して歩いた。こうした苦心の末集ったのがヴァイオリン7、セロ2、クラリネット1、アルト1のメンバー。六甲台32号教室のボロピアノの前、または教官食堂で柚花コンダクターの下に妙なる（珍妙なる？）音が鳴り出したのはすでに夏休み前であった。ここで困ったのが楽譜である。スコアなど、当時は殆んど市販されておらず、僅かに古本屋で買いあさって来たスコアも難かしすぎて、その1ページすらも満足に弾けないという実力であったから、仕方なく蛮勇を振るって私が編曲を始めた。なにしろ部員の能力に応じての編曲であるから苦労のほどは限りない。しかも、たよりになるのはピアノ・スコアとレコードだけの今から考えると全くよくできたものと、空恐ろしくさえなる。しかし全く夢中であった。一体何回編曲し、何枚のパート譜を書いたこ

とか。今の部員諸君には実感として考えられないことであろうが、当時の私の役割はコンダクター、兼サブ・マネージャー兼セカンド・ヴァイオリン奏者、兼編曲者、兼写譜人、兼楽器運搬係、兼会計補佐であった。否、私に限らずマネージャーの石原君にしても、宇野、円満字君にしても皆同様であった。

部員の獲得のためには、学内だけでなしに学外の人たちにも手を伸ばした。幸い、新制大学の発足と共に多数の優秀な人たちが入部して来、ここに確固たる基礎を樹てることができた。特に高橋、中本君等を中心にした管楽器グループの入部は正に旱天に慈雨の感があった。また全く未経験者でありながら苦心惨憺短時日の間にオーボエ、ファゴット、ホルンを見事吹きこなせるようになった万代、藤田、吉田君等の努力も尊いものであった。

昭和26年　開学記念祭　指揮　千葉修二氏

またオーケストラの復活の一つの推進力として忘れられないのは、ピアニスト、田村宏氏の助力である。最初はリサイタルの主催を先方から依頼された形であったが、その後何かにつけて陰の協力者となり、発足期のわれわれには非常な財政的援助をもたらしていただいた。この故に、ホルンとヴィオラが買え、クラリネットが二管となり、また学校当局にも楽譜購入の端緒を作ったのである。

かくして、猛練習に次ぐ猛練習の末、感激的な第一回の発表会は昭和25年末、大学ＥＳＳ主催のクリスマス・パーティの席上に行なわれた。曲目はハイドン「玩具交響曲」「メヌエット」「聖衣」であった。今に到るまで、その時の演奏が上手くいったかどうか判然としない。とにかく、一緒に始まって、一緒に終り、ほっとしたことと、ストーブのむやみに熱かったことだけがこの晴れの日の印象として残っているに過ぎない。この後は頼まれるままに心臓強く、マンドリン・クラブの賛助出演や幼稚園巡回など行った。曲目は「軍隊行進曲」バッハ「ガボット」コッペリアから「ワルツ」「金婚式」等である。このころは本格的オーケストラと名のつくものが神戸になく、迷声をしたって来る者多く、部員数35名となりそろそろ曲目も重みのあるものをとりあげたいと考え、春の文化祭を目標に、まずピアノ協奏曲の計画をたて、田村宏氏の愛弟子の広岡洋子さんを独奏者に迎えた。そして、神戸雲中小学校の講堂を借りて、実に６ケ月有余の涙ぐましい練習に、ある日は悲観の極に達し、ある日は自信のほどを深めて、よくも全員飽くことなく頑張ったものだと思う。部員の内部では、いろいろ批判も苦情もあったに違いないが、これを抑えて部全体の意欲を盛り上げてくれたのは石原、宇野円満字三君の強力なバック・アップと部員諸君の熱意であった。昭和26年５月27日、山手女子学園講堂（当時六甲台講堂は進駐軍に接収されていた）での演奏は「音楽以前」とのいままでの悪評に止めを刺すには少し不出来であったが、とにかく相当良好の出来栄えであった。曲目はモーツアルト「ピアノ協奏曲23番」「ロザムンデ舞曲」「結婚行進曲」「ガボット」であった。その後同じ曲をもって兵庫高校に招かれ同校生徒のコーラスと「流浪の民」や「天地創造」演奏を行なったのも誠に愉しい思い出となった。

第一回の本格的な演奏会の成功に気をよくした一同は、次は大物を狙い、同年秋の第一回定期演奏会にはメンバー43名をそろえて「ジュピター」「ハイドン」「ピアノ協奏曲」（独奏者安見泰子氏）ヘンデル「水上の音楽」「ペールギュント」「アルルの女」より、等を演奏し、好評であった。聴衆は約400人、当時としては決して少ない人数ではなかった。

翌27年も６月１日の文化祭には関西初演のサンサーンス「二台のピアノのための組曲」「動物の謝肉祭」（ピアノ松井克之、阪口美和両氏）およびハイドン「時計」第二楽章、ベートーヴェン「トルコ行進曲」「軍隊行進曲」を演奏し、一年間の技術の進歩に対する賞賛の声が高かった。この時は極力学生中心のレギュラー・メンバーでやりたいとの方針もあって、出演者数は40人であった。（このころまでは演奏会の度毎にＢＫの放送管弦楽団からオーボエ、ファゴット、バス３、４人程度のトラを頼んでいた）

私もいよいよ大学３年となり、就職に、卒論にと、大分忙しくなって来たので、文化祭が終ってから、次期コンダクターとして新制一回の浅田君を立て、私はサブとなった。私の最後の演奏会は、同年11月30日の第二回定期演奏会で、「未完成交響曲」を浅田君が、ウエーバー「小協奏曲」（ピアノ吉岡秀女氏）とワルツ「朝刊」「南国のバラ」「アイーダ行進曲」等を私が指揮した。３年間にわたる私の在任中、この時のウェーバーが一番気持良くまとまって最後の最大の収獲であった。３年間の実績をようやく認識した学校当局も、われわれの念願のティムパニーを卒業の置土産として購入してくれた。

かくして神戸大学オーケストラは揺籃期を脱し、浅田コンダクターの下でいよいよ発展期へと向うのである。

10年前、無知と幼稚さの中に出発した神戸大学オーケストラも、いまでは一人前以上の存在となった。われわれの播いた種が、こんなに大きく実ろうとは夢想だにしなかった。われわれの後輩諸君のその後の努力が如何に大きなものであったか、いまさらながら敬意を表わさざるを得ない。それと共に部員諸君の熱意と努力の結集こそ、今後の神戸大学オーケストラを隆盛に導く唯一の道であると信じている。

（昭28・旧制卒）

昭和26年　広岡洋子さんを囲んで

回　　想

田中清三郎

卒業以来、あれほど夢中になって過したオケとも、また楽器そのものとも縁切れのようになっている現状です。昔の土地とも離れてしまい、まるで生活が一変した中にあって、とかく昔の事も忘れがちで、思い出す機会の少ないまま、三年と経たぬうちに、オケの思い出も遠のいているような気がしています。

回想といったものの何が書けるかわからぬままに承諾の返信をしてしまったのですが…。

卒業以前からまだ貼りつけずに、そのままになっている写真帳や、かつてのプログラムなどを、引出しの奥からとり出して眺めてみるとき、新らたな感慨にうたれます。オケの思い出は忘れているようであっても、やはり自分にとり生涯を通じる思い出以上の何ものかを含んだものであるからです。

思えば入部して半年あまり、何をやっても満足にできるものがないから「棒でも…」ということで持たされて以来、とうとう卒業まで「デクノボウ」の如くつっ立ったまま過してしまったのです。その四年間の生活経験というものは、自分にとってそれまでの生活、ものの考え方を、それ以後と二分し得る程の実に得がたいものでありました。生来引っ込み思案で、音楽に関しても一人あるいは小人数でのみ楽しむことの多かった自分に、団体生活の楽しさや、協調の喜びや苦労を知らしめてくれたものでした。オケの生活は確かに画期的なものであり、それまでの自分の生活が多少なりとも、何かある一つの転機を得たことは否定できません。そしてまた、さらに飛躍して指揮までもやらされたということで、所謂アマチュアオーケストラに固有な指揮者の立場について考えさせられました。自己の信ずる音楽の理想に基礎を置くところの「団体に対する自己主張」というものと逆に技術の限界からくる理想の制限によってやむなくされる「自己抑制」というものの二者が、音楽を通じて微妙にからみあっている立場というものを、曲りなりにも経験できたわけです。そしてそのことが音楽によらず何事においても、全体と個人、現実と理想といった矛盾するが如き要素を、妥協のうちに融和せしめていくという方法とその難しさを教えてくれる糸口を与えてくれるものでありました。不幸にして、音楽に関しては余りにも理想に走り過ぎたがために（これは永久的なのかも知れませんが）その立場にありながら、何ら態度が固まらぬまま、余分な苦労に終始してしまいました。現在、改めてその後を思い返してみる時に、それ等オケで得た「何ものか」が自分では気付かぬ内に、音楽を離れた現実においてはじめて行為し、無意識の内に心を支配することがあるのに時折気付くのです。現在の生活の方向の良悪は別として、漠然とした意識の内にも、オケ以前には存在し得なかったこの新しい生活指標の存在を感ずるのです。漫然としがちな学生生活を決して無駄にはしてくれなかったオケの意義を痛感せずにはおれません。そして現在、自分がその指標に従ってゆく限りにおいて、オケに対する回想も過去に対する単なる追憶ではなく、むしろ、いまなお自分のすぐ背後にあって、見えざるうちにも絶えず生活に活力と方向とを与えてくれている力の源泉たることを知るのです。

昭和31年　第6回定期演奏会　指揮　田中清三郎氏

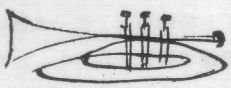
合宿旅行、演奏会、新年会等々の回想を辿っておれば、とても紙面が足りません。それ等は単なる思い出ではあってもオケで得た「何ものか」と同じく、決して自分の身から遠のいてしまうものではありません。たとえ日ごろは忘れていても、かっての曲を耳にすれば演奏会の興奮を昨日のように思い出すほどに、いつまでも身近な離れ難い存在であるのです。

結局のところ「回想」する程には心がまだオケから離れていないせいかも知れません。吉田さん、岡田さん等をはじめとする、いわゆる神大オケの名物先輩には伍せずとも、非力ながら絶えずオケの発展を祈り続けている一連のしんがりに、小生も加えて頂ければ幸です。（昭33・法学部卒）

我輩はラッパである

—ある trumper の物語—

横内　　昭



我輩はラッパである。名前は正式には trumpet であり日本語では「喇叭」と書くが、当用漢字とやらに入れてもらえなかったので、通称「ラッパ」と呼ばれ、我輩の御主人様は気安く「俺のラッパ」と呼んだ。

我輩の主人（以後、彼と呼ぶ）が神戸大学経営学部に入学した1953年のある日、彼は当時最新流行のビニール製のトランペット・ケースに入った我輩を片手にブラ下げ、由緒ある神戸大学オーケストラ部の扉の前に立った。そして空いている方の手で、その扉をかるくたたいた。すなわちドドドドーンと。この日から、我輩は彼と共に目出度く神大オーケストラ部員の末席を汚すことと相成った。今でもハッキリと覚えているが、秋風も吹きはじめようというころの六甲台の講堂ではじめて練習に参加したその日、彼は我輩を左手でしっかりと握りしめ、指揮者の振り上げるタクトをじっと見た。彼の手はやや汗ばみ、ピストンに当てた三本の指は、心なしか震えているようだった。我輩の体の中を彼の暖かい息が吹き抜けて、記念すべき第一音はともかくも発せられた。

この練習場で我輩はホルン、トロムボーンといった兄弟達とも一緒に遊べるようになったし、テイムパニー等というグロテスクだが気の好い野郎とも近づきになれ、幸せだった。女の子の首にカジリついているヴァイオリン達を横目でながめては、心ひそかにうらやましく思ったものだ。

そうこうする内に、彼はソロバンとかいう奇怪な音を出す奴とチョクチョク縁を持つ様になった。つまりマネージャーなどと柄にもない仕事を、誰のオダテに乗ったか知らないが

始めたのである。（これは内緒だが彼はソロバンにはいたっ弱い）それからと云うものは、悲しいことに、我輩は日一日と邪慳に扱われだしたのだ。一時は、思い出したように自宅の二階などで、無粋な音ながらＳＣＡＬＥ等吹いてくれたのが、パッタリ止り、我輩はケースの中で幾日も惰眠をムサボル日が続き、あげくの果てには、彼は我輩をいちいちブラ下げて歩くのさえ面倒臭くなったとみえ、元町の日本楽器にあった練習場に程近い、とある酒場のカウンターの隅っこに、練習日から練習日の間淋しく預けられっぱなしというひどい目にもあった。

楽しかったこともあった。それはオーケストラ部が夏休みなどに、方々へ演奏旅行に出かける時で、この時だけは晴れて彼の腕に抱かれて、北は信州、南は中国、四国と汽車の旅バスの旅のお伴をしたこと、また森之宮の日生球場へ、神大一京大の野球戦を大挙して応援に赴き、見事神大チームを勝利に導き、「商神」を高らかに吹きならしたこともあった。演奏会の前の晩になると、彼は必ずわが輩を真鋳磨きでピカピカに磨き上げ、油も充分に飲ましてくれて、存分にいたわってくれた。こういう時はわが輩も思わず全身がゾクゾクするほど力が漲ぎり、当日のステージでは思わず知らず興奮したものだ。

彼はマネージャーの仕事にますます熱中し、阪神間を忙しく走り廻る日が多くなった。しかもその合い間に、マージャン、パチンコ、アルサロ、デイトとも縁を切るまいとするのだ。このごろ、わが輩は一度彼につれられ、練習の後、喫茶店ウィルキンソンで待ち合わせた女の子とダンスホール「新世紀」へ出かけたことがあったが、何とわが輩だけは入口の「お持物預所」に一人置いてきぼり。小一時間の後、彼は御機嫌で姿をあらわし、わが輩を受け出すと宝塚歌劇団の生徒だというなかなかcharmingなその女の子と間もなく阪急電車に乗り込んだ。わが輩が網棚の上から、ソッと耳を傾けていると、どうやら次回の演奏会の切符を数枚彼女に引受けさせるのに成功した様子だったので、彼もなかなかヤリオルワイと思ったが、宝塚南口にある彼女の寄宿舎まで、とうとうおつきあいさせられたのには閉口した。

年月のたつのは早いもので、1957年春、彼も目出度く学窓を去ることに相成り、こんどはタイプライターとソロバン相手に貿易商社マンとして社会人の生活を踏み出したのだった。ここに到ってわが輩の人生にも一つの転機が訪れ、彼は社会人としての生活に全霊を打ち込むべく、泣く泣くわが輩との訣別を決意した。その時はわが輩も少々頭に来たが、冷静になると主人の気持を察することができたのだった。彼は真剣にわが輩の今後の身のふり方を考えてくれ、思案の末、わが輩だけこの際主人と別れ、大恩ある神大オーケスラに残ることにした。そしてわが輩の面倒は若き楽人達によって見ていただき、わが輩も一生懸命応分の働きをしようというわけだ。

そしてその後現在にいたるまで、連日若々しい学生諸君の熱い息を吹きこまれて全く幸せだし、神大オーケストラの心技共の目覚しい発展にひそかに快哉を叫んでいる。ただ願わくば昔の懐しい主人である彼が、忙しいだろうが暇をみつけて、わが輩の幸せな様子を時々ソッと見に来てくれたらなあ……。これが、今のわが輩の唯一つのささやかな希望なのだが。（昭33　経営学部卒）

新入生の頃

鈴木ミチ（旧姓田中）

ジャーン!?　シンバルの音でなければドラムの音でもありません。これが私の神大オケに入った最初の、つまり産声だったのです。数年前の日曜日の夕刻、神戸日本楽器の三階の練習室で、私はヴァイオリンを片手に、今わたされたばかりの楽譜とニラメッコをしていました。曲目はたしかグノーのファウストだったと思います。もちろんその頃は全然知らなかった曲です。ただｂや＃がいくつもついていたので、この音は上って、この音は下ってと夢中で頭の中で計算中？　だったのです。横で弾いている人も、後で吹いている人も皆とても上手そうに見えます。その内誰かが新入生の方もどうぞ弾いて下さい、とのこと。私は急いであたりを見ました。でもまだ自己紹介もしていないので、誰が先輩で誰が新入生なのか、サッパリ見当がつきません。皆、楽しそうに演奏中です。なんだか私だけが取り残されているような気持でした。私もこれはいけないと思い、ヴァイオリンを取り上げ楽譜にむかったのですが、どこを演奏中なのか全然わかりません。私は必死になって楽譜の上を追っかけはじめました。その内なんとか弾いている所がわかったので、弓をかまえて弾いたと思ったらジャーンで最後。「今日の練習はこれで終ります」だったのです。あっけないこと、はずかしいこと、ヴァイオリンをケースにしまいながら悲しかったです。行きはあんなに張り切って神戸の元町を先輩の石橋姉と歩いていたのに……。もちろん入学したばかりの私は、神大にオーケストラがあるなんて知らなかったし、またあったとしても私のヴァイオリンでは到底弾けないし、自分から入部する気持はありませんでした。でも石橋さんにいろいろオケという

昭和33年　オケのレディ達（中央ミッチャンこと鈴木さん）

団体生活の内容を聞かされているうちに、入って一度でいいからあんな舞台で弾きたいなあと思いはじめました。でも練習場が神戸、時間が夕刻という条件も関係して、私の決心は不安定なものでした。でも石橋さんのＰ・Ｒのおかげで、両親に許しを得て、神大オケに入部と決まった時、嬉しかったです。小、中、高校と、すべてテクシーで通学していた私にとって、神戸に出かけて行くということは、お上りさん以上に嬉しかったのです。生まれてはじめて持った定期券を手にしっかり持ち、一方にヴァイオリンのケースをかかえ、私の心はオケの上にとんでいました。ネオンにけむる三宮、元町を経て日本楽器の階段をのぼった時、私の耳にちょうど劇場の開幕前に、オーケストラボックスから流れてくるのと同じ調弦の音が聞えて来たのです。素適でした。思わずケースをにぎりしめました。練習場ではコンダクターを中心に

練習がはじまるところで、私のはじめて見るような楽器もあり、また男性の諸兄も背広姿の方が多かったので、なんだか高校時代とは全然別の世界に入ったような気持でした。オソルオソル皆の間を通りぬけ第二ヴァイオリンの後の方に小さくなって坐りました。胸がドキドキします。それからは先に述べたとおりジャーン、終りだったのです。情けなかったです。でも私の負けん気も手伝って、今になんとかやって見せるという心構えが、その時からめばえたのでした。それから私の苦心談ともいえる毎日がはじまりました。まさに無我無中でした。まずヴァイオリンの技術の向上のために暇さえあればキィーコ、キィーコやりはじめました。次に演奏する曲目は、片っぱしから楽譜を貸してもらって、私専用のを作り、赤鉛筆でbや#のつく音符にすべてしるしをしました。時にはしるしだらけで真赤な楽譜とニラメッコしていることもありました。一生懸命練習して、今日こそは思い切って弾こうとはりきって行ったら、別の楽譜がくばられて来て、今日はこれをやります。——こんな時は本当に悲しかったです。レコードもいろいろ聞いて勉強しました。曲目選定の時など、黒板にいろいろ書かれるのですが、何一つ知らない曲ばかりで、ベートヴェンの運命とかかれたりすると、ホッとしたものです。ヴァイオリンを弾いていてもコンダクターやコンサートマスターの耳がこっちをむいているようで、ミスをしまいと思い、本当にこわごわでした。ですからテンポの速いところなど、おはずかしいかぎりでヴァイオリンの弦の上一センチ位のところを弾きました。弦をやっている人だったらきっとうなづけるでしょう。つまり音の出ない演奏だったのです。でも、こんな苦しいことばかりでは決してありません。ガタンゴトンと鈍行の汽車にゆられての演奏旅行。あの感激と猛練習の定期演奏会の思い出。私の頭の中には数々の楽しかったこと苦しかったことが一杯つまっています。ヴァイオリンのおかげで、こんなに思い出がつくれるなんてとても素適に思います。学生オケの良さとも宿命ともいうべきでしょうか、絶えず新旧入れかわり立ちかわりして神大オケはますます歴史をつんで行くことでしょう。思い出も年を取ります。でもいつも新鮮です。ちょうど神大オケのそれと同じように。

思い出は　つきぬもの

なつかしいもの

新鮮なもの

（昭32・教育学部卒）

英雄は色を好む

小泉　良

この言葉はめったに正しく理解されていない。大学生活最後の定期に「エロイカ」の指揮をするという願ってもない機会に恵まれた私には、近頃やっとその本当の意味が分って来たような気がしている。

あの日以来、ベートヴェンは私の最良の友となってくれた。「……練習場に並んだ真剣な顔とともに、エロイカと取り組んだ若き日の喜びを決してわれわれは忘れないだろう」と、あの日のプログラムに書いた。そしてその通りになったのだ。社会人となり、横浜から日光へと故郷を離れたけれども、私の心には、もう消えることのない灯がともり続けている。その灯に導かれて、段々とこんなことを考えるようになった。

人間をモーツァルト的人間と、バッハ的人間と、ベートーヴェン的人間とに分けてみると、モーツァルト的人間は一生童心のままであり、バッハ的人間は温順、平静で、神を信ずるほど敬虔でさえある。この二つのタイプに生れついた人間は何と幸せなことだろう。そのこと自身、すでに幸福であり、世間もまた彼らを喜んで迎えるだろう。私も幼い日にはそのようであり得たのだ。

ところが、ベートーヴェン的人間にとっては、自分自身がすでに悩みの源なのである。まず彼らは自意識が強く、現世的欲望——色欲、物欲、権勢欲、そして名誉欲——をおさえかねており、そのくせ、人の気に入りたいという小心な所もある。その意味では何といっても俗物なのだ。そのままでは遂に俗物の中に埋没してしまう運命にあるのだ。

けれどもわれわれ（われわれといおう！）には他のもの、すなわち、真なるもの、善なるもの、美しいもの、そして最後に聖なるものへの強い強いあこがれがある。不思議な火が燃え始めることがある。確かにわれわれには、ファウストに見事に表わされたように、二つの異った魂が同居している。一つは地上の子であり、他は天上の子である。前者をA、後者をBと呼ぶことにしよう。Aの面だけ見れば絶望する他ないかも知れぬ。私も世間に出てから、日毎にこのことを痛感して救い難い自己嫌悪に陥ち入った事もたびたびだった。

そんなある日、神戸によく似た横浜の港を歩いて、何か楽しいことを考えようと努力していた私の心には、ふと、なつかしい神戸で皆とやったあのエロイカが響いてきた。あの肯定的なテーマ、一人一人の顔、あの花束。私はあこがれで一杯になり、元気づけられ、とうとう悟った——この気持は一体何か？　またしても聞えてくるあの音は何か？　地上の子に呼びかける天上の声は何か？　二つの魂の存在こそ人間実存の底辺なのだということを。

もう私は何も見ていなかった。自分の足元を見つめながら海岸沿いの山下公園を歩き始めた。「AとBが底辺、Cが頂点、人生のピラミッド。Cとは何？——Cこそは人間性の高み。登りつく方法は？——行為。限りなく高いCは？——無限に長い底辺ABと、不断の行為によって。そうだ、その行為こそ英雄を作るのだ！　ABが離れるほど悩みは深まる。しかしそれに打ち勝つ時、Cはどこまでも高い。偉大なる魂エロイカ。あの音楽から受ける感動は、この不断の行為にわれわれを狩り立てる力であったのだ。そうしてCとC、峯と峯とがある時呼び合い、触れ合って、遂に熱狂的に抱き合う。これこそベートーヴェンの歓喜（フロイデ）なのだ。あの日われわれを結びつけ、人々を結びつけたのはこれだったのだ」

「英雄は色を好む」という言葉は、人間的な偉大なる魂には地上の子としての悩みも人一倍深いことをもって、英雄の偉大さを逆説的に表現したものではないだろうか。われわれも小さいながらも人生のピラミッドを築きあげよう。われわれも不断の努力と、真の行為によって、人間性のままの救いを得ることができる。力強く生きよう！

一日が終ると思わず溜息をついて、「何かいいことないかね」と誰いうとなく口走るサラリーマン。少しも興味の持てない仕事に一日追い廻されて、やっと自分の時間になった途

昭和33年　富山での小泉氏

端にどうして良いか分らないサラリーマン。生きるとはこんなことだったのか。あの充実した気持にはもうなれないのか生活の輝やかしさはもう永久に私のものではないのか？　サラリーマンの生まぬるい日常と、見渡す限りの俗物主義に危うく呑まれようとしていた私は、その日以来変った。

私は最後の演奏会のテープを送って貰い、何度もエロイカを、あの拙いエロイカを聞いた。私は自らに尋ねた。「真の意味で生き度いのか？」「本当に何かなくてはいやか？」と。エロイカは「それならば自分で創り出してみよ、お前にはその力がある」といっているようだった。私はようやくにして、学生時代からぼんやりと考えていたことを、今や実行に移す勇気を得た。それは、生きるということの内容は、本来、働くことと、考えることと、夢見ることだといえる。現実と、哲学的世界と、芸術的世界に生存することだといっても良い。働く人（勤労者）と、考える人（学者）と、夢みる人（芸術家）の存在するゆえんである。私はとうとう働く人になった。しかし、働くのみでは真に生きているとはいえないのだ。あくまで中心はそこにあるとしても、私はさらに考え、夢見なければならない。大学で学問に接し、オーケストラで音楽に触れたことは、私に、世界というものは第一次的な現実世界のみではないことを教えてくれた。サラリーマンの日常の世界のみに目を奪われそうになっていた私は、遂に迷いから覚めた。自分の現世的な欲望の強さを、いやというほど思い知らされただけに、この立ち直りは奇蹟とも思えた。とうとう私には本当の意味であのエロイカの響きを理解することができたのだ。

今私は静かな日光市におり、工場と、近くの寮とを往復している。日々は単調だが、私は卒業以来始めての、内心からの充実を感じている。私は神戸からの一人の親友を東京に持っており、オーケストラの数々の思い出とエロイカの声に励まされている。全ては蘇えった。あの横浜の哀れなサラリーマンはどこへ行ってしまったのだろうか？私は自分の中の俗物性を見つめることから出発した。しかも今、それを否定しないままで乗り越えることができて幸せになった。

10月1日、夜更への日、日光はもう涼しかったが、私は古い蝶ネクタイを締めて出発した。作業服が普通のこの土地ではいろいろな人が目をとめて、「オヤ、お出掛けですか？」といった。私は笑って応えなかったが、もし尋ねる人があったらこう応えただろう。「これは松山へも行ったのです。そして神戸から来たのです。もし私にこれが似合ったとすればその歴史のせいでしょう。これは、俗物主義への抵抗の旗印なのです。そして、私はどんなことがあっても現実の世界のみには自分を売り渡さぬぞ、という象徴なのです」と。

（昭34・法学部卒）

行動派と理論派

寺　岡　秀　展

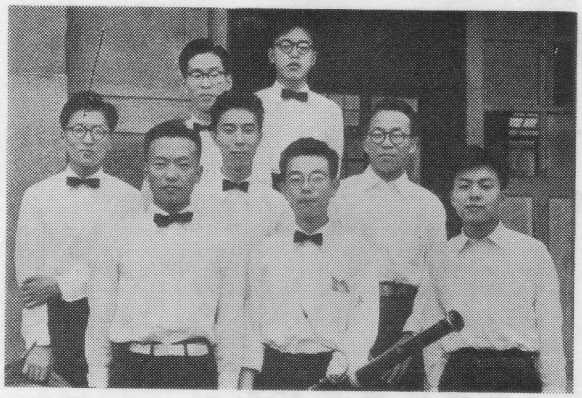
僕達の現役時代によく**行動派と理論派**という言葉を使ったものだ。当時の事情を少しでも知っているものは、あの頃のことか、と思い出すかも知れない。ちょうど、**32年第7回定期演奏会**の前後のことである。何かにつけて神大オーケストラは成長著しいころであった。現在のオーケストラの雄姿を見ると、そのころの担当マネージャーとして僕は感慨がせまってくるのである。マネージャーの僕は三年生であり、部長は何をさせても〝名〟をつけて称ばれた**横内氏**であり、コンダクターはこれもまた名コンダクターのほまれ高い**田中清三郎氏**であった。

その年の6月の**三商大交歓音楽会**は神大が担当校であり、演奏会は神戸国際会館で行なわれた。曲目はチャイコフスキーのスラヴ行進曲とラフマニノフの第二ピアノ協奏曲であった。いまでも思い出すと冷汗が出るのは、僕はクラリネットのファーストを吹いたのだが、このピアノ協奏曲は本来A管の曲であるので、B管♭で吹きかえていたところ、マネージャーとしての仕事が多すぎて、クラリネットの練習ができず、本番寸前まで二楽章のソロが満足に吹けなかったことである。しかし本番には何とかうまく吹けたし、オケのできも某氏曰くのN響なみ、とまで評されたほど良かった。

このためいささか調子にのったせいか、それからオーケストラのはな息は荒くなったようであった。

ちょうどこのころ、**行動派と理論派**という言葉が出だしたのである。もちろん必ずしも一方は理論を伴なわない行動のみであり、他方は行動を伴なわない理論のみであるということではないが、われわれの純然たる学生オーケストラを伸ばして行くためには、何を中心に考えるべきかによって、この2派ができたように思う。結果論であるが、この時に僕も含めて行動派が主導権を持っていたがためにこそ、神大オーケストラが今日の姿になったのではないかと思う。理論派の人々のバックアップがあったればこそは、いわずもがなであるが、もし、これが逆になっておれば、神大オーケストラはまた別の姿になっていたかも知れない。

年に1回の**定期演奏会が山を降りて海員会館**へ出たのが、



昭和30年　三次にて（後列向って左寺岡氏）

僕が1年の時、第5回であり、第6回もつづいて海員会館。ステージはせまく、暗く、会場は不便でおまけに係員のサービス悪く、お役所仕事丸出しであり、その上、山台などを六甲台のトラックで運ばねばならない始末。こんなことなら六甲台の講堂と少しも変らない。もう少し街中で、良いところはないか。ここで行動派と理論派の2派が出現するのである。

学生オーケストラの本分は果して何処にあるか。街中の演奏会場で派手な演奏活動をすることか、そうすれば、大会場で演奏会を開くということ自体に精力を取られてしまって、本来の音楽が十分できないのではないか。高い入場料をとって、その上、下手な演奏を聞かすことはできない。それくら

いなら、会場料の要らない六甲台の講堂へ再びもどって、無料で質の高い演奏をしようではないか。学生オーケストラもやはり音楽団体である以上、あくまでも芸術を追求し、芸術的な面からも、いくらかでも満足できる演奏をしたい。それがためには収益を上げることは問題外であり、じっくりと音楽に取り組むことの方が大切である。この際、メンバーも、少数精鋭主義とし、いくら練習の出席率が良くても、ただ単なる雑音メーカーにすぎないものは、本番にはステージへ出さない。どうしても必要なパートでありながら人を得られない場合には、他所から借りてきてでも、良い演奏をするべきである。このような考え方が、理論派の立場であった。

行動派の考え方は学生オーケストラの本分は純然たるアマチュア性にあり、そのメンバーの技術的な差をのり越えた学生らしい清純なチームワークにあり、常に真摯な研究態度を持つものではあるが、少なくとも、われわれのような楽器不足に悩むオーケストラには楽器ぐらい買い増せるだけの収益を上げることは一向に構わないとした。従って大会場で演奏会をやる方が望ましいのである。例えばフェスティバルホールで演奏会をするというと、かえってはり切ってファイトのある演奏ができるし、それにわれわれの一番ののぞみである広く一般からの批判というものが得られ易い。

このように第7回の定期演奏会の会場を決めるのに討論した結果、ちょうど前述の三商大交歓音楽会の好結果が影響して、会場は神戸新聞会館大劇場になった。曲目は「新世界」他であったが、幸にも演奏も上出来、入場者も満員の盛況で僕達幹部もムネをなで降したことであった。そして従来は収支とんとんで、演奏会とはただ単なる練習の結果を発表するにすぎなかったのが、これ以来、相当に大巾に純益が残せ、楽器も楽譜も相当に買い増せるようになってきた。

ちょうど演奏の腕前もこの頃からうんと上り出したし、前述の会計規模も桁ちがいに大きくなったし、メンバーも大巾に増加したし、当時の担当マネージャーとして、この変動期を無事のり切って、まずは大成功という線にまで持って行けたことを思い、いまでも誇らしげな気持がしてくるのである。

現在の神大オーケストラを見ていると、伝統の学生コンダクター、伝統の討論で決す風、伝統のチームワークの良さ、などわれわれの先輩が築き上げ、われわれが引きついで行ったことをどんどん育んで成長させ、まだまだ高い線にまで持って行こうという意欲的なところが多々見られて、頼もしい限りである。しかし、いささか淋しく思うのは、あの時代の乱暴なまでの行動派というものが姿を消して、次第にいやに理屈っぽくなって行くように思える点である。願わくばメンバーが非常に多くなったにも拘わらず、小さくかたまってしまいそうな風潮を蹴散らしてほしい。もっと大胆な、冒険主義的な色がまじっても良いのではなかろうか。今ほどに成長した団体となると、こういう危険なことは考えない方が良いかも知れないが。

強引に作った行動派・理論派という言葉から、僕の現役時代の一番印象の深かった時代のできごと、大演奏会場への進出ということを記してみたが、今でも、僕達のとった方法が積極的な大成功への道の一つであったことを信じて疑わない。

あるOBのたわごと

高　橋　一　三

秋も深まってきた今日この頃、阪急六甲の駅を降りて帰宅の道すがら、1日の仕事から、また大阪の雑踏から解放されて、ほっとした何かゆっくりした気分の中でいつも考えることは「この辺りにオーケストラの練習場があれば……」ということです。ちょうどその考えを助けるかのように、駅の北側に、大きさも恰好も頃合いの幼稚園があります。この位の練習場で、秋の日曜日の午後を、のんびりと心ゆくまで、オーケストラの練習に過すことができたらどんなに楽しいことだろう。オーケストラだけでなく、室内楽に、また音楽だけでなく、オーケストラ部員の憩の場所としての練習場が……、と空想は果てしなく発展してゆきます。

私が大学に入ったのは、昭和25年（1950年）で、1、2年上の先輩がオーケーストラ部を復活し、その母体ができた頃でした。

練習は、土曜日の午後、六甲学舎三階西端の教室でした。部員は全部で14、5人位だったように記憶しております。曲目は、ハイドンの「玩具交響曲」や、バッハの「ガボット」などをやっておりました。もちろん私は入学したばかり、部の内情は判りませんでしたが部員全部が発表会などということは考えずに、ただ音楽することの好きな者が、合奏を楽しんでいるといった練習風景でした。部員のほとんどが初心者で技術的には幼稚なものでした。私もフルートを始めたばかりでしたが、「盲、蛇に怖じず」で、ただ一生懸命に吹いておりました。簡単な三連音符が、どうしても合わないということもあったようです。

最近の高橋氏

それがある程度練習を重ねるにつれて、その成果を発表しようという欲が出てくるのは当然の成り行きです。その年の暮、ある学生のクリスマス・パーティーに出演致しました。それが私にとって初舞台です。何しろ人前で演奏するのは初めてで、しかも曲目の中のハイドンの「メヌエット」は、中間部にフルートのソロが出てくるのです。半ば緊張に震えながら夢中でやったことだけが記憶に残っております。

その翌年は、開学記念祭にモーツァルトの「ピアノ協奏曲第23番イ長調K488」をやることに決まりました。今でも新しい曲を練習する時は何となく嬉しいものですが、生れて初めて本格的な協奏曲をやるその時の私の喜びは、今のそれとは比較できぬ程大きなものでした。練習に先立って、六甲学舎の職員食堂でレコードを聴き、それからは来る練習も来る練習もその曲ばかり、実に根気よく練習したものです。自分のパートは殆んど暗譜した位でした。それでも本番では、あがって勘定を間違えて1フレーズ抜かしてしまいました。練習場は、ピアノのある雲中小学校に変りました。講堂が使えなくてピアノを廊下に持ち出して薄暗い所で練習したこともありました。今でも頭にありありと残っているのは、第二楽章の主題を、第二クラリネットの分散和音の伴奏にのって、第一クラリネットが奏でる所です。その哀調を帯びた旋律が小学校の薄暗い講堂で奏せられた時、私はモーツァルトの虜

になってしまいました。

その年の秋には、初めての単独の発表会である第一回定期演奏会を親和女学校を借りて開きました。

このようにして定期的に発表会を開くようになると、発表会の体裁を整えるために、部員以外の人に臨時に出演を頼まねばならなくなりました。その頃、アマチュア・オーケストラの発表会に行くと出演者の中にどこへいっても顔の見られる人がおりました。

単独の発表会を開くようになり、曲目も大曲をやるようになっても、部員の技術はそう急に上達するものでもなし、また部員の数もそう急に増える筈もありません。演奏会には臨時の出演者を頼むとしても、普段の練習にも、ある程度の人数を集めねばなりません。そこで練習に如何に多くの人を集めるかということが、その頃のマネージャーの大きな仕事でした。アマチュア・オーケストラにおいては、発表会のみがその目的ではなく、むしろ練習活動により多くその存在意義があると私は考えます。

このように発表会を開くということによって、練習は当初のものから次第に変化してきました。入部してからずっと、練習はいつも楽しいものでした。しかしその楽しさの中にも変化があります。入部当初の定まった発表会を持たない頃の練習には、春の野や夕日に映える秋の山村といったのどかさがありました。それが発表会までという時間的制約を受けるようになるにつれて、次第に失なわれ、それに代って目的に向かって進む張りが出てきました。思い出は常に懐しく美しいものかもしれませんが、私は最近の練習に何とかして「のどかさ」を加えたいものと念願しております。

以上のように昭和26年はオーケストラにとって質的に大きな変化のあった年でした。

さて翌27年は、六甲学舎の講堂も駐留軍の接収が解除され6月には開学記念祭、11月には第二回定期演奏会を共に講堂で開催致しました。

この年には現在の合宿の始まりといえる「家島キャンプ」を行ないました。しかし現在のような大掛りなものではもちろんありません。総参加部員僅かに8名、それでもわれわれは大真面目です。物見遊山とは違うぞとばかり、各自楽器を持って飾磨から船で小1時間程の家島へ乗り込みました。小学校の教室を借りて練習、といっても8名では何ともし難くハイドンの「玩具交響曲」か何かをやって合宿気分を満足させ、それから3日間バンガローを借りて自炊、終りには飯を炊くのが嫌になりました。それでも海水浴にボートにと愉快に過しました。その次の年には、家島の経験を生かして、早い目から準備にかかり、滋賀大学の寮を借りて、食事も寮で作ってもらって、1週間の合宿を行ないました。今の合宿のように、学校や工場での演奏会を持たなかったので、のんびりと1週間を過しました。寮の前にはプールがあり、運動場にはテニス・コート、5分程歩けば琵琶湖に出てボート、ヨット、水泳、釣等ができました。そして最後に滋賀大学の講堂で発表会を開きました。

以上朧げな記憶の中に、私の学生時代の出来事を辿ってきましたが、昭和29年4月からはOBとして学生諸君の仲間入りをさせていただきました。それからのオーケストラは今日まで、多数の有能な部員に恵まれ発展の一途を辿り、今日この10周年の記念誌を発行し、第十回定期演奏会には、チャイコフスキーの「交響曲第5番」、ベートーヴェンの「ピアノ協奏曲第5番（皇帝）」等の大曲を、そのプログラムに載せることができるまでになりました。神戸大学交響楽団をこれまでに育ててきた歴代部員の努力は高く評価さるべきですが、過去10年の歴史を振り返り、これからの神戸大学交響楽団のあり方を考える時、そこには多くの検討を要する問題が潜在していると思います。学生オーケストラのあり方、練習方法、指揮者、合宿と演奏旅行、部員間の技術水準の差異、演奏会の形式、演奏曲目と技術的限界等々。これらは事あるごとに学生諸君の間で真剣に討論されていると聞いておりますし、またこの記念誌にも、その成果が発表されるものと思います。

最後に最近私の特に強く感ずることを一言述べさせていただきます。

私が学生時代、そして神戸大学交響楽団が現在のように大規模な団体ではなかった時、ある学生オーケストラに手伝いを頼まれて、2、3回練習に行ったことがあります。その団体はわれわれのオーケストラより4、5年早く活動を始めていたので部員も多く、われわれに較べて大規模な活動をしておりました。練習も多人数で充実したものでしたが、同じ部員でありながら名前を知らない人がいる、帰路の電車に乗り合わしても話もしないし挨拶も交さない。その頃の私は随分奇異な冷い感じを受けたものです。構成人員が増えれば、運営も機械的になるのは仕方のないことです。しかしその非人間的な要素も、部員の心の持ち方一つである程度除くことができるものです。50人が100人の団体になっても血の通った人情味豊かな団体にすることは可能なことです。現在の神戸大学交響楽団は、いろいろのレクリエーション的な行事をしてこの点注意しているように見受けます。しかし上から与えられたものだけではなく、部員各自の日常の生活から自然に出てくるものが大切なのです。それには部員が、ただ練習時間ぎりぎりに集まって、時間いっぱいに練習をして、帰宅時間の遅くなるのを気にしながら帰っていくのではなく、練習日が音楽の練習日であると同時に、お互いが話し合う日でもあってほしいのです。

土曜または日曜の午後、六甲にある練習場には、部員、いやここではOBも含めて団員と呼ぼう、団員がある室では室内楽を、ある室ではブラス・バンドを、また庭の日溜りでは雑談を楽しんでいる。やがて練習開始時間が近づくと各自楽器と譜面を用意して練習場に入る。皆がそろうとオーボーがAの音を出す、調音が済むと指揮者が現われて練習が始まる。そして練習が終ると、楽譜は各自整理棚に収める。専用の練習場なので譜面台はそのままで良い。各自の席も定まっている、各自の行動は誰の音頭も必要なく自主的に整然と行なわれる。連絡事項はすべて掲示板に書かれるのでマネージャーが声をからして喋る必要はない。すべてが団員の規律ある行動によって無駄なエネルギーを消耗することなく行なわれる。しかも団員同志は充分に話し合う時間を持っている。そんな練習風景を空想しながら、私は家路を急ぐのです。20周年の、あるいは30周年の記念誌が出る時には、この空想が現実となることを念じながら。（昭29・経済学部卒）

学生オケとしての神大オケの諸問題について

わがオーケストラも戦前からの長い歴史に続いて、戦後これを復興してから十年の月日がたったが、これらの歴史を編集したわれわれ編集委員の目には、この歴史を通して、オーケストラの現況を見たとき、今まで通りの秩序ではすでに規制できないさまざまの事柄が、多くうつる。十年たった今、オーケストラがいかなる状態にあり、またあるべきかを考える時、これらについて種々の考察をし、この記念すべき小誌のまとめとすることは、われわれ編集委員の当然の使命と考え、以下順を追って種々の問題に言及したい。

神大オケの横顔

編成　二管編成である。交響楽団は左記の二管編成として最小50名の団員（部員）を必要とする。

昭和35年　現役部員の面々

団員　現役；53名、客員；7名計60名その内訳はヴァイオリン；26名、ヴィオラ；5名、セロ；5名、ベース；3名、フルート；4名、オーボエ；3名、クラリネット；3名、バスーン；2名、ホルン；4名、トランペット；2名、トロンボーン；2名、テンパニー；1名、低弦楽器の充実が望まれる。

指揮者　学生の中から部員総会で決定される。指揮者と部員との人間的なつながりという点に最大の理由があると思われる。彼はもっぱら指導者としてその任期を終るのが通例。アマチュア・オケの指揮者の宿命かもしれない。

演奏会　まず秋の定期演奏会、これはわれわれの活動の一つの目標でもある。ついで日は前後するが、6月中旬に行なわれる旧三商大交歓音楽会、旧三商大とは現在の一橋大学、大阪市立大学、神戸大学であるが、古くから学術、スポーツの各分野で交流をはかり相互の理解と親睦とをはかっている。この音楽会もこのような趣旨のもとに今年で第6回を迎えている。さらに3月下旬には教育学部音楽科の卒業演奏会、5月中旬には開学記念祭音楽会等四季を通じて活発に活動を続けている。

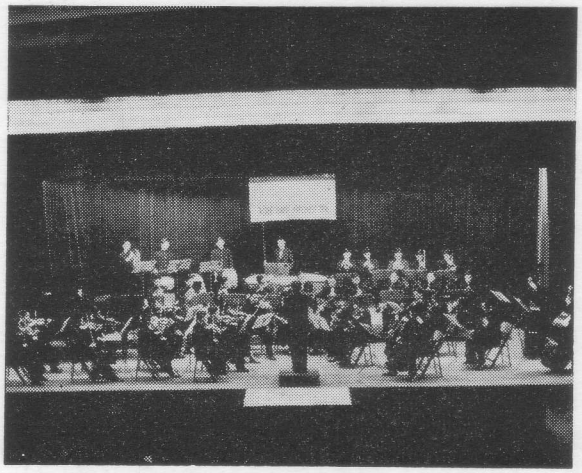
合宿・巡回演奏会その他　秋の定期演奏会とともに、年間の大きな行事として、夏季演奏旅行がある。部員の親睦、巡回演奏、秋の定期演奏会の練習と、実に充実、有意義なものと思っている。なお、在神中も不定期的に小中高等学校でオーケストラ教室を開催している。

楽器所属　学校；24.5%、部；28.3%、個人；47.2%、神大オケは幸にして人数は多くなってきたが、個人以外の楽器が、量質ともに少ない。優良楽器なくしてはオーケストラの進歩は望めない。先輩各位、学校当局の御援助をお願いするものである。

練習場所　35年の3月までは、日本楽器神戸支店3階をお借りしていたが、日本楽器の営業の拡大とともに、部員の増加により新たな練習場が必要となり、教育学部音楽科主任教授伊熊良穂氏ならびに事務長加藤正之氏の快諾を得て教育学部第二音楽室を拝借している。

練習時間　大体、午後5時半から8時半まで、途中15分ほど休憩。

練習回数　週2回が原則、演奏会前は、弦管のパート練習を含んで週5回に及ぶことがある。近年工学部の部員が多くみんな寸刻を惜しむ思いで練習に参加している。



昭和31年第6回定期演奏会
白鳥の湖

オケの組織化とマネージャー

オケへ入部した目的は、と聞かれれば、各人各様の答え方はするであろうが、つまるところ、古今の名作曲家の作品を自らの手で再現する喜びを求めて、とクラブ活動の楽しみを求めての2点に集約されるであろう。前者は、芸術論に関連したもので、楽器を手にしたときのオケマンは、自らの音楽観をそのテクニックに託すのであって、そこはエゴの発揮場と化すのである。しかし、ここではその後者を問題とするのであって、楽器を離れたときのオケマン意識である。そこではもうエゴは押えられ、クラブ活動に必要なる雑用に当る訳である。しかし、中学・高校でクラブ活動をやってきた者とそうでない者との間には、この点で大きな差異がある。すなわち自分の事情は押えつけても、広告取りに、切符売りに歩くのは、部員の義務と考え、新入部員に対して、特にそれまでクラブ経験のない者に対して、そういう部員意識を植えつけ、クラブ活動型の人間を作り上げることが必要となる。これがとりもなおさず、部員意識の向上をもたらし、部に対する愛着を生ぜしめる結果となるのである。

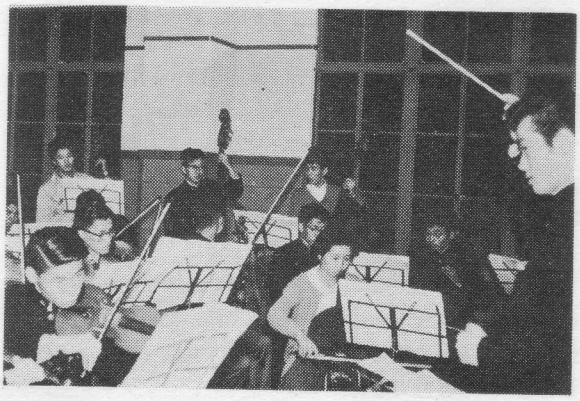
次に、そうするためには、部内組織の充実が必須条件となる。これまでのマネージャー一辺倒では、部の意義が失なわれるのであって、部員全体が部を動かす体制を整えなければならない。すなわち部長、マネージャー、コンダクター、コンサートマスターなどのいわゆる役員のほかに、部員より選

出された数人によって構成される、運営委員会、選曲委員会練習計画委員会、合宿委員会などの常設・非常設委員会が結成され、それらの委員会が、部員総会の決定にもとずいて企画し、オケを動かすのである。そこでは、必然的に仕事は分担され、順次権限が委譲され、各部員は、それぞれの任務を通じて、オケの一部員たることを自覚するのである。

このように、ある集団において分権組織が発展してくると各人はそのごく一部分を責任付けられることになる。が、ここで忘れてならないことは、そういう分権化が進めば進むほど、その全体を見通す人間が幾人か必要となる。いわゆるトップマネージメント層である。これには、当然部長、マネージャーが当るべきで、これらは、この組織内において、会計や楽器、楽譜等の係はもちろん、コンダクター、コンサートマスターより、一段上に、これらを包括したところに位置するものでなければならない。したがって、マネージャーの役割は、現在の渉外専門から、一歩進んで文字通り管理者（マネージャー）となるべきである。そして組織化されることにより、マネージャーの仕事が、これまでより楽になると考えることは、大きな誤りである。管理者は、その企業全体を知らねばならないと同様に、マネージャーは、ことオケに関する限り、何でも知っていなければならない。直接自らが計画して、自らが手を下すより、分業された組織を統一して、細部まで見通し、大局的見地から、それに対処する方法を示すことは、一層複雑をきわめ、統率力と頭脳の速やかなる回転を必要とするであろう。何故ならば、分権化されることにより各々の仕事が細部まで、より完璧に行なわれるからである。それを、あれはあの係だからと任せきることは、一見組織化されているようで決してそうではない。組織化の真の意味を取り違えることを恐れるのである。

練　習　方　法

時間的、技術的その他多くの面で制約をうける学生オーケストラにおいては、能率的な練習方法というものがたえず研究されなければならないが、この点を明らかにするためには、まずその中心者である指揮者の立場を明らかにしなければならない。近代のオーケストラにおいては、指揮者は演奏上においては絶対権力者であって、コンサートマスターといえども指揮者の指示にはさからえないという一種の規則のようなものが支配していることは周知の如くであるが、このことの是非は別として、戦後のわがオケもほとんど無条件にこれがみとめられ、実行されてきている。しかし一方では、わがオケを神大の文化総部に属する一つのクラブ活動として見た場合、必ずしも一般のオーケストラと同じ考えを必要としないという注目すべき見解がある。これは学生指揮による学生オケにおいては、指揮者と楽員の間に、指揮者に絶対の権限を与える程の実力の差が必ずしも存在しない、故に指揮者と楽員は互に批判し合い、研究し合うことはもちろんであるが、演奏上の問題において意見の一致をみない場合は、指揮者を含めた全楽員の決定に従うべきとするものであり、この点にいわゆる音楽における常識を無視した特異性がある。もちろんこのような考えを認めないという立場は強くあって、それによると、そもそも学生オケは、アマチュアとしての種々の制約を承知の上で、可能なかぎり音楽の芸術性の追求を試みることが第一目的であって、クラブとしての性格を持つ以上、いわゆるクラブ活動の要求する諸種の事情は認めてもこれを第一目的に優先させることは本末転倒であるというものである。この二つの立場の違いは、学生指揮による学生オケを音楽を媒介したクラブ活動とみるか、または音楽を通じての芸術活動と見るかによるのであり、もちろん同時に両方の性格を合わせ持っているには違いないが、いずれを重く見るかという点に最大の違いがある。



昭和35年　　さあ、いこう（凍習風景）

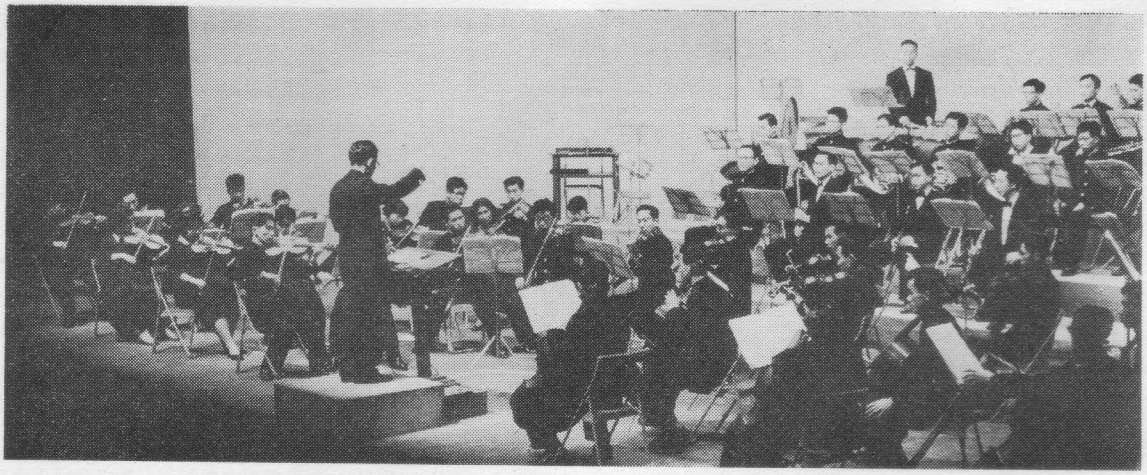
指揮者に対する考え方はともかくとして、オーケストラにはコンサートマスターという別の意味での支配者がいる。指揮者が充分にその演奏効果を上げるためには、それ以前の問題を解決するためにコンサートマスターが働かなければならないという意見があることに注意しなければならない。従来におけるコンサートマスターの仕事は音を合わしたり、弦のボーイングを付けたりする程度のことであったが、そのような事務的な仕事に留まることなく、さらに指導的な役割を果すべきであるというのである。これは指揮者の仕事を準備することを意味するのであるが、たとえ指揮者がトレーナーにしかすぎないと考える者にとっても、さらにその合奏のトレーニングの前の技術的問題があってそれを解決することが目的であると考えればなんら矛盾するところはない。

これもオケがだんだんと大きくなり練習の面でもさまざまな差がでてきたところから当然問題となってきたのであるがコンサート・マスターに限らず、誰かがこのような仕事を受け持たねばならないことに議論の余地はないであろう。

さらに練習にはこのような技術的な面だけで心理的な点が練習効果に大きく響いてくる。この点については先述のコンサートマスターに当るものにインスペクターがあるが、これは楽員の不満などを引き受け、オーケストラのメンタルハーモニーを保つ役目であり、ほとんどのオーケストラがこのインスペクターをおいている。しかし学生オケがクラブ活動として成り立っている以上、不満などの解決は部員総会その他適切な機会に合理的に処理され得るが、ここではもっと積極的に練習効果をより高めるために、部員の練習に対する情熱を湧きたたせるような方法を考え実行する役目のことを意味するのである。

これは個人の役目でなくクラブの主脳者全体の役目であって、今後オーケストラが組織的に管理されるような傾向にあるとき、充分に考えられなければならないであろう。いずれにしても十年という一つのピリオドを経過した神大オケには種々の点で客観情勢の変化が、いずれ部員の意識の面からも指揮者の立場一つとってみてもさまざまな議論があり、今後大いに研究され討議されるべきことには異論はあるまい。

学生指揮の伝統



昭和32年　第7回定期演奏会　　—新世界より—

われわれが神戸大学交響楽団の歴史をみた時、そこに一つの特色として、学生指揮の伝統をあげることができる。そしてこの伝統は、今回の記念誌発行に際して調査されたところによって、大正年間の神商オーケストラの創設期から現在に至る実に40余年の長きにわたる偉大なるものであることが明らかにされた。偉大というのは、戦争というエポックをはさみその前後において多少のニュアンスの違い、すなわち戦前と戦後の音楽水準と関連するが、その違いで全く同質のものとは思えないにも拘らず、なお当時稀な楽才の持主であったと思われる初代指揮者山中氏、さらにわれわれの知った上野氏他幾人かの学生指揮者の功績が、高く評価されるということである。戦前通史で記された如く、前記の諸先輩方は一般の音楽水準よりみてトップ・レベルに位するもので、神商オーケストラそのものが、関西とまでいわずとも神戸の音楽の先導的存在であったのであるが、戦後はたまたま神戸に他のオーケストラが育たないので、依然その中心的存在であるが学生指揮者の場合トップ・レベルとはいい難い。従って音楽の面で向上を考えた場合、専門指揮者を招いた方が有利とも考えられるのに、敢えてそれを行なわないのは、現在でもなお、学生指揮を続けるに充分な根拠が、従って40余年の伝統を再認識し、それを守り続けてくれた先輩方に感謝と敬意を表す理由がある。

神戸大学交響楽団は学生オーケストラなのであり、その良さは学生が、すなわちわれわれがすべてのことをわれわれの手で行なうところにある。従ってそのための制約は当然考えられるのであり、その長所を捨ててまで、音楽向上のため、制約除去のため、専門指揮者を迎える必要があるかどうかは疑問である。指揮者は管弦楽団の編成を手段として、音の洪水を、美しいハーモニーを創り上げる任務を担っているが、この洪水のエネルギーは指揮者の技巧も多少あるが、大部分は団員個々の力によるものであり、美しいハーモニーはいわゆるメンタルハーモニーをも含んでいるのであると考える。従って神大オケの雰囲気に馴染まぬ専門指揮者が真正に美しい、力のこもった音楽を創り出せるかどうか疑わしい。学生指揮者はわれわれの中の一人なのであり、音楽向上にあたって奉仕者であり、従って技術的に制約はあっても、エネルギッシュな音の洪水と美しいハーモニーを創るに有資格であると思う。

戦後のある時期に、異例として部外の指揮者を迎えたことがあったらしい。そしてその時のオーケストラの雰囲気は余り良いものでなく、すぐに学生指揮に戻ったということを聞いている。そしてこの例はわれわれが現在なお学生指揮の伝統を守り続けてゆこうとするにあたって、有力な根拠を示してくれていると思う。

多くの先輩の御努力に感謝し、この偉大なる伝統を今後もわれわれの神戸大学交響楽団の一つの長所として守り続けてゆこうと結語しておく。

初心者の悩み

楽器を演奏する部員によって構成されているオーケストラ部においてはやはりその楽器に関する技術の良し悪しが問題となりがちである。そしてこれはとりも直さず新入部員が過去において演奏の経験があるか否かといったことから端を発して、未経験者に一種の劣等感を与え、悩みを生むという結果になり、運営面にも大きな支障をきたすことになる。

昭和35年　新入生歓迎ピクニック

ここに他の学内サークルと大きく性質を異にする問題点が存在する。しかもこの悩みは、技術的な面のみではなく、精神的な面にも圧迫を加え、部員の間に溝を作ったり、部員総会その他における発言を遠慮するといった場合も生じさせる。民主化され、合理化されるべき現代のクラブにあって、一部のものが、こういった負担から自己の主張を正しく全員に告げることができなくなるのは全く遺憾であり、またうまく演奏できないがために、オーケストラ部に興味を失い、退部するといった例を目のあたりに見る時、初心者の悩みがいかに大きいかを痛感する。近年の如く、20名にも及ぶ新入部員を迎える事実を考慮するなら、この初心者の悩みを解決するために適切な手段を講ずる必要性がいかに大きいか認められよう。しかもこういった初心者こそが次のオーケストラを

背負う原動力であってみれば、何としても解決せねばならぬ重要な課題である。

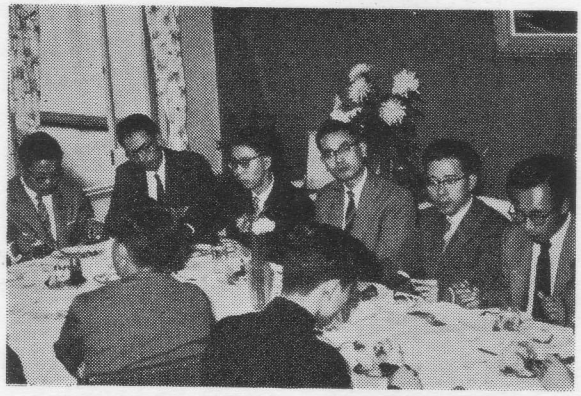
最近では中学、高校において、吹奏楽団がかなり普及し、管楽器の場合は大して問題にならないようであるが、オーケストラの主要な大半を占める弦楽器についてはやはり大問題である。35年度の場合は、個人的な力によって、ある程度初心者の悩みも解消されたように見えるが、これとても特殊な例であろうし、入部後、わずか数カ月という短期間を経ただけで、定期演奏会の如き大曲を手がけるとなると無茶な話でそこには、どうしても個人の力ではなく組織の力で解決せねばならぬ点が残される。

そこで、初心者の悩みを解決するべき手段を考えねばならぬのであるが、一つの楽器をある程度こなすためには少なくとも1年は必要であろう。そしてこの1年間、技術的な悩みを感じながらも、なおかつクラブ員として籍を置き、活動して行くためには何といっても、オーケストラのクラブ部生活自体に興味を持たせるように上級生が配慮せねばならない。

これまでもそういった観点から、1日も早くオーケストラの雰囲気になじむために、歓迎会、合宿、ソフトボール大会などといった数々の催しが挙行され、上級生とも親しみを増すよう計画実行されたが、要は、**上級生の心構え一つで大きく左右される**ことである。ここにその具体例として考えられるのは1.技術的な指導を組織的に行ない、2.選曲に当っては初心者にも可能か否かを考慮し、3.演奏以外のクラブの仕事を行なうことによって、オーケストラに面白味を増すようにし、4.各種の会合で初心者の意見を重視する。といったことがあげられる。そして初心者に自分だけが取り残されたような気持を抱かせないよう努力することが肝要であり、こうすることによって、初心者の悩みは少しでも軽減されるのではなかろうか。

先　輩　と　現　役

先輩と現役の関係およびその両者の立場といったものを考えてみるとき、両者にそれぞれいい分があり、われわれ現役部員のみがそれに考察を加えるのは身勝手なものとなり勝ちであるかも知れない。しかしわれわれ現役部員にしても数年の後には先輩の一人として行動するのであるから、ここで現役生の正しい在り方を考えつつ、先輩にとってほしい態度ならびにそのいろいろな在り方について論及してみたい。



昭和35年10月30日　先輩より記念誌資料取材

神大オケが神戸大学内の一サークルであってみれば、もちろん高校までのように先輩が後輩に盲従を要求するといったことは許されない。が同時に現役生は総験豊かな先輩の指導を積極的に仰ぐべきである。先輩については、4年間の学生生活を通して、一応そのクラブにおける活動に終止を告げたものと解する見方と、他方4年間の活動後も依然としてクラブの要求に応じて部員と同様に行動してもらう考え方とが存する。前者の見方からすれば、先輩は卒業後は静かに後輩達の活動を見守りつつ指導して行くといった態度が望ましく、後者の見方からすれば、積極的に後輩の指導に乗り出し、力強く現役を引っぱって行くというものであろう。しかしこのように先輩の立場を区分しても、両者にはっきりと大きな差異があるのではなく、その立場を具体化すれば、特に違いがあるのはクラブの運営面においてであり、前者では現役生の自主性を認めて、なんら干渉を加えないものであり、後者では経験を生かして、マネージメントにも教示を与えるものである。その他経済面では助力者、技術面ではアドバイザーというあり方にはなんら異議はあるまい。換言すれば、現役部員は先輩を大いに利用し、卒業後はまた大いに利用される。といえば言葉の使い方に語弊があるかも知れないが、とに角、先輩は受動的に指導を与え、現役は能動的に協力を求めるというのが両者の正常なあり方ではなかろうか。

しかしここで当クラブの、過去の歴史を顧みると、両者には個人的に密接な関係があり、先輩、現役共々一緒になって家族的な雰囲気を築きあげ、一つのムードを形成していたように思われるのであるが、現在の如く60余名の現役部員および55名余の戦後先輩、加えて80名にもおよぶ戦前の先輩を有する大世帯になれば、これまでのような家族的雰囲気の持続を求めることは不可能であろうしまたクラブの正常な発展を阻害するものであろう。そこには同好会的気分を一掃し、組織によって統合された一つの社会性をもつ団体としての空気が充満するのである。これは何も各個人が疎外化し個性化してしまうというのでもなく、このことによって演奏自体が事務的なものとなるというのでもない。このように考えてくるとき、現役部員によってクラブが統一、組織化されてくれば当然先輩のみによる組織も必要性を帯びてくる。かくの如くして先輩現役の両組織が一体となって、協調の精神を基礎としつつクラブの運営に当るとき、真の意味においてクラブは正道を歩みかつ発展するのである。

もちろん先輩と現役のこういった関係が実現されるためには、高い社会性と高度な組織、ならびに両者の確固たる自覚がなければ不可能であり、いかに一方がその気になっても他方に思索の甘さがあれば、とうてい達成しえないものである。しかし戦前の神大オーケストラについても数々の史実が発見整備され、現役部員にも大きな自覚と責任が与えられたこの戦後10周年記念誌の発刊を契機として、両組織の早期結成を計り、今後の神大オーケストラの発展を期したいものである。

合　宿　に　つ　い　て

この項は合宿史のところに紙面等の都合で書けなかったところを整理の意味で書くのである。

十年の歴史をみたとき交響楽団の一大行事としての合宿は当然主題の一つとして扱われるべきもので、その具体的なことは合宿史を繰っていただきたい。われわれがこの項で問題にするのは合宿の目的の再認識と現在問題となっていることをこの際一緒に考えてほしいと思うことにある。

昭和31年　明科合宿にて

われわれが合宿の歴史を編してみてその目的を考えるとき大体三つをあげることができる。すなわち1.技術の向上 2.演奏旅行、3.部員の親睦である。

技術の向上とは普通どのクラブでもやっている親睦を兼ねた合宿の目的ともいえるもので、一方演奏旅行は普通楽団が行なう地方の人々への生のオーケストラの演奏、巡回演奏に親睦を兼ねたもので、結局大きく二つの目的が考えられるのである、合宿兼演奏旅行と称されるゆえんである。

従って単なる演奏旅行ではないし単なる合宿でもない。そしてこの二目的の合宿の長所は富山等の場合最も良く発揮される。演奏旅行として当地で公開ステージを持ち彼地の人々に感銘を与え、そのステージのため必死の練習が続けられ合宿効果は大きく、また全員一丸になって切符売り等に努力する裡に親睦は自然に達成されたと思う。

ところが富山の場合は甚だ例外的なもので常にあのような合宿が可能ではなく、むしろ他の合宿では無理とさえ思われる。マネージングの点もあろうし、演奏面でのこともあり、富山の合宿はわれわれの現状の合宿では良い例として記しておくことにする。ところで現在問題となるのは平常の合宿で目的が多い故に起る反省をどうするかにある。この場に書くのはあくまで一つの考え方であり結論ではない。例えば演奏旅行の面にステージの回数が多いために偏った合宿では、練習できないし各ステージの比重が軽くなり皆の熱が入らず、親睦ももう一つうまくゆかぬということになる。また練習ばかりでは演奏旅行の目的が達せられない。そこで一つの解決策としてわれわれの合宿の目的を分離し合宿と演奏旅行を別々に行なうというものである。しかしこの場合は技術的な例えば行事の詰まっている現状やマネージングが大変になるなどがまず考えられるべきで、それが解決した時でもさらに観点を大きくわれわれの合宿の特徴を消して合宿と演奏旅行を分けた場合、単なる楽団の巡回演奏になってしまわぬか等が問題にされると思う。要は現状での長所を生かして短所を是正するのか、それとも全然別の形態にその長所を捨てても改めるかということで、非常に大問題であるので今後皆に考えていただき解決方向を定めるべきなので、この記念誌では単にこのような問題が意識されているということを提起するにとどめる。

部　室

われわれが、現在最もほしい物の一つに部室がある。これだけの多人数をもち、組織的活動を行ない、学内の文化サークルの代表的存在である神大オーケストラが、現在に至るまで部室を持っていなかったということは、奇妙な感じさえする。そればかりか、他の文化部と異り、高価な楽器、楽譜を保管せねばならないという特殊事情があるのにも拘らず、それらを安心して置いておける場所がないというのは、盗人が聞けば手をこまねくような話ではないか。

昭和35年　狭いながらも楽しい練習（住吉学舎）

もっとも部室がないということが、これまでオーケストラに悪影響ばかり及ぼしていたと考えられるわけではなく練習場が変るごとに、気分を一新したり、辛い楽器や楽譜運びをやることにアマチュアオーケストラの意義を感じた者もあったろうし、またこの仕事をやっているうちに部に親しみを感じ、部屋のまとまりが生れたということも、あながちうがった見方ではないと思う。

しかし、なんといっても、部室のあることは文句なく嬉しいことである。だがここで忘れてはならぬことは、楽器置場として安全であるとか、交通の便が良いということだけで、部室をもらっても意味はないのである。すなわち、われわれには最も大切な練習がある。従って、常に練習場と直結した部室というものがほしいのである。これは何も二部屋などと贅沢なことをいっているのではなく、せめて練習ができるだけの広さをもち、そこの管理が一応われわれの手にまかされている部屋でなければ意味がないというのである。

大分前に六甲台運動場の一隅の長屋の一部屋を貸してやろうといわれたことがあったが、そこは机や椅子を持ち込んでも良いが、ここでは音を出してくれるな、ということであった。これではこれがわが部室だと考えられるオケマンは一人もいないだろうどころか、思わず苦笑してしまうのである。

いままでこれと似たりよったりの部室の話はあったが、われわれはこのような部室だったら要らぬと断ってきたのである。というのは、部屋を一たびもらってしまうと、後で恰好のものが学校にできても、オーケストラには部室があるのだからという理由で、われわれにはそれを提供してはくれないだろうということが考えられるからである。われわれは目先のことだけで部屋は決められない理由ががここにあるのである。

しかしオーケストラで最も大切なことの一つは、神大オケのようにかなりの音楽水準に達した場合、他の学生オーケストラがやる以上の厳しい練習を続けていかなければ、この水準は保てなくなるのである。しかし、ここまで向上したレベルを下げて、学生のクラブ活動の面で発展しようとするのは間違いで、クラブ活動として発展すると同時に、何とかこの水準を保っていこうと努力しなければならないのではなかろうか、そのためには、初心者の養成、練習の能率化、小人数グループの室内合奏等をやることによるテクニックと合奏訓練をしなければならぬのである。また、真の合奏訓練を行なうには音響効果の良い練習場が必要になってくるのであり、日本楽器三階のような練習場は部屋としては良くとも練習場としては不適当であるといっても過言ではないと思う。

従って、ぜいたくかも知れぬが、良い練習場と直結した部室ということになってくるのである。

部室の意義はこればかりではない。部室で友人と語り合うことは何よりのH.R.問題解決となろうし、知らず知らずのうちにもクラブ活動を通してオーケストラを前進させていくという理想の形態が生れていくのではないだろうか。現在のように大世帯になったわが部に適する練習場としては、学内では教育学部住吉学舎の音楽室、または講堂、六甲台講堂がある。また伊勢湾大風で焼失した学生ホールの再建が3年後にはできるが、そこの中の一室および来年度から立ち始める工学部学舎が将来性のあるところである。そこでわれわれは現在、工学部の方ははっきりしたことが判らないので、まず新たにできる六甲台の学生ホールの方に望みをかけているのである。しかしここも狭いので、音がガンガン響いて練習場としてそのままつかえるかどうか疑問であるが、講堂も近いことだし、一応ここへ目標をもっていくことは間違いではないであろうと思われる。

神戸大学交響楽団の客員

われわれのオーケストラの一つの特徴として客員の性格があげられる。俗に客員と称されるが実質は部員とほとんど同程度の権利義務を有し、異るのは神戸大学に籍を置いていないのみという人達が他のオーケストラに比べて比較的多いのが特徴である。客員には、このような準部員といったものから、片や「トラ」と呼ばれる練習にはほとんど参加しない演奏会用の客員とがある。今度の記念誌編集にあたり、歴史的にこの実態を明らかにしようとした結果、次のような事実が判明した。ただその方法は現在までの名簿の整理ということによったものであり、現在まだ戦前の名簿は不完全であるので以下は戦後の客員についてのものである。例えば現在のメンバー構成は全体の5分の1程度は客員と呼ばれる人達であるが、純粋に「トラ」と呼ばれる場合、本番にのみ参加してもらえる人、例えば「新世界」の時のイングリッシュホルンの千葉氏のような人をさすが、先に述べたような性格の客員との中間的存在として、本番前数回の練習にのみ参加する人があり、これもまず「トラ」と称されよう。しかしこれらの人の大部分は他の楽団に属しているがために平常の練習に参加できないものであり、団員にすべて親しみのない人は極く少ない。

アマチュアオーケストラはある意味で練習にその真髄があるのであり、その意味で平常の練習に参加するかしないかで客員を分けることができると思う。かくする時、わがオーケストラには準部員の如き性格の客員が参いのである。そして理想は単に演奏会にのみ参加するが如き客員はない方が良いのである。この点は客員に限らず一般の部員すべてが銘記すべきことなので今更いうまでもないことである。

ところで一般的に現在のアマチュアオーケストラは部員不足である。ないしは部員の数のみは足りても、その技術的限界のために、実質的には人数不足が実状である。ここに客員の必要な一つの根拠がある。他方単に大学の一つのサークルとしてでなく、神戸に唯一の交響楽団というわれわれのオーケストラの特色に同志である客員を必要とし、また妥当であるとする根拠があるのである。従ってわれわれのオーケストラの客員に対する態度は、比較的粗雑なのかもしれないが、それはこの点すなわち単に「お願いします」というのではなく「一緒にオーケストラをやりましょう」という要素が入っているからであろう。単に集まって演奏するのみでは、音の洪水はできても、単に流れる方向が一緒だというだけのつまらぬものになってしまう。真の力の溢れるばかりの奔流は、団員すなわち客員をも含めて、演奏者すべての一致した協調と情熱が必要なのである。その意味でわれわれのオーケストラの客員は理想的なもので、今後ともこのような同志の援助を求め、次第にいわゆるトラをなくしていくべきである。

神大オーケストラの性格について

神大オケの特殊性、あるいはその意義といったものに注目するならば、そこに二つの流れがあることに気づく。オーケストラという一つの多様性を含んだ社会にあっては、むしろ当然といえるかもしれない。

二つの流れの一つは、アマチュア・オーケストラの本質を芸術の追求とみとめ、さらに神戸における文化中心説を背景とする流れである。巷間の「聞かせてやらんかな的」一部のプロ・オーケストラはさておいて、プロ・オーケストラとアマチュア・オーケストラの間には、若干の枝葉的な差異はあっても、その本質においてはなんらのちがいはないとする。すなわち、音楽に対して情熱を湧かし、ひたむきにそれを追求しようとする点や、暖かい人間的な団体の雰囲気という点においては、なんらかわりはないとするものである。そしてこれら二者の間の差異として、すなわちアマチュア・オーケストラの特殊性として二点をあげる。その一は一般民衆—ここでは学生—が集まって行なうという点、その二はその活動に附随するところのマネージングを構成員自らが行なうという点である。そしてこの第一点すなわちアマチュア・オー

昭和34年　第9回定期演奏会　　サンサーンス・ピアノ協奏曲第4番

ケストラの大衆性、いいかえるならば、素人が弾き、吹き、たたくということが、その芸術性の向上をめざすという本質としばしば相剋することがあり、第二点、すなわち楽譜書きから切符売りにはじまるマネージングを自らが行なうという点もその目的、本質をしばしば制約するとしている。またこの第一の流れの柱をなす他の一つの神戸における文化中心説は、神戸に唯一つしかない神大オーケストラが、単に学生の「オケゴッコ」に終らずに、神戸の文化に中心的、指導的役割を果すべきであるとする考えである。以上が第一の流れである。

これと対称的な流れがある。これが第二の流れである。これは根本的には、神大オーケストラのクラブ活動という点を重視する考え方であり、先の第一の流れでのべられたような自分達の活動は芸術の追求といいうるようなものではないと第一の流れで本質とされた芸術の追求が否定される。従って神戸にオーケストラが唯一つしかないというのも単なる偶然であって、なんら神戸の文化の中心たるべき必要をみとめていない。そして、第一の流れで、本来アマチュア・オーケストラの目的にとってしばしば制約を加えるとされたマネージングに対してもこれとは異った見方をしている。すなわちクラブ活動としてのオーケストラにあっては、マネージングを構成員自らが行なっていくということは、その本質ともいい得るような重要なポイントをしめてくる。ここでは第一の流れにあって往々にして起ったようなマネージングが少数構成員によって行なわれるといった傾向を排して、「みんなでマネージメントを」というのが大きなスローガンとなる。以上が第二の流である。

これから神大オケ史の第三期をむかえて、オーケストラがどういう方向をめざすかは、本質的に、第1の流れをとるかそれとも第二の流れを選ぶかによって決まるところであろう。さらにこれらのいずれをとるか構成員各自が真剣にとりくむことが現在の任務とされるところであろう。

芸　術　談　義

この項に芸術談義と名付けたのは、われわれは芸術に関して何か偉そうなことをいう程、従って芸術論と名付ける程大層なことを物する資格はないが、オーケストラにあって、その10年の歴史をみた時、やはり芸術という分野に入ると思われる問題について何か書いておき、この記念誌を読まれる人々にも一緒に考えていただきたいと思い、談義と名付けて一項設けてみたものである。

第一にとりあげるテーマは、歴史を眺めた場合に、神戸大学交響楽団の演奏スタイルに一つの特徴があると思われる点である。この点については、戦前、さらに戦後の再生期のことは音に関する記録が不備なので先輩の話などによるものであるが、少なくとも一つのスタイルを持っていることが感じられる。そのスタイルというのは柔かい音色と高度な合奏技術に支えられるもので、これを音楽上の意味で間違っているかもしれないが、話をわかり易くするために〝フィルハーモニック〟なスタイルと称したい。これに対比するものとして考えられるのはエネルギッシュな音量と個性的な独奏技術にその特徴を持つものとして〝シンフォニック〟なスタイルである。さらにそのスタイルの特徴を詳しくすると、フィルハーモニックスタイルにあっては、音色がこもった、全体としていわゆるムードがあり、その良いアンサンブルとともに調和のとれた演奏を行ない、この場合協奏曲とか合奏曲、作曲者ではメンデルスゾーン、サンサーンス等の場合、その長所は最高度に発揮されると思われる。そのかわり曲の気分に乗るワルツとか、唱うためにリズムを崩したりすることは下手なのである。一方シンフォニックスタイルにあっては、音色が明るく澄んでおり、そのため非常な響き、すなわち音量も大きく、個人的独奏技術と共に、エネルギッシュな、良く唱う演奏を行なう。このスタイルでは交響曲とか派手な管弦楽、作曲者ではドヴォルジャックやチャイコフスキー等の豪壮な曲、唱うべき曲に適しているといえよう。

この四～五年間の演奏曲目とその出来栄えを考えると、神大オケは明らかにフィルハーモニックスタイルをその特色とし、従って曲目もサンサーンス、メンデルスゾーン、シューベルト等が比較的多く、またそれぞれ好評だったようだ。

ここで一応結論めいたことを少し書いてみたい。もちろん結論とはいっても、あくまでこの場限りのもので、その当否は大方の裁を待つものである。

神大オケの特徴である演奏スタイルはオーケストラの一つのゆき方であると思う。すなわちどの作曲者のものを演奏し

昭和34年　第9回定期演奏会　　サンサーンス・ピアノ協奏曲第4番

ケストラの大衆性、いいかえるならば、素人が弾き、吹き、たたくということが、その芸術性の向上をめざすという本質としばしば相剋することがあり、第二点、すなわち楽譜書きから切符売りにはじまるマネージングを自らが行なうという点もその目的、本質をしばしば制約するとしている。またこの第一の流れの柱をなす他の一つの神戸における文化中心説は、神戸に唯一つしかない神大オーケストラが、単に学生の「オケゴッコ」に終らずに、神戸の文化に中心的、指導的役割を果すべきであるとする考えである。以上が第一の流れである。

これと対称的な流れがある。これが第二の流れである。これは根本的には、神大オーケストラのクラブ活動という点を重視する考え方であり、先の第一の流れでのべられたような自分達の活動は芸術の追求といいうるようなものではないと第一の流れで本質とされた芸術の追求が否定される。従って神戸にオーケストラが唯一つしかないというのも単なる偶然であって、なんら神戸の文化の中心たるべき必要をみとめていない。そして、第一の流れで、本来アマチュア・オーケストラの目的にとってしばしば制約を加えるとされたマネージングに対してもこれとは異った見方をしている。すなわちクラブ活動としてのオーケストラにあっては、マネージングを構成員自らが行なっていくということは、その本質ともいい得るような重要なポイントをしめてくる。ここでは第一の流れにあって往々にして起ったようなマネージングが少数構成員によって行なわれるといった傾向を排して、「みんなでマネージメントを」というのが大きなスローガンとなる。以上が第二の流である。

これから神大オケ史の第三期をむかえて、オーケストラがどういう方向をめざすかは、本質的に、第1の流れをとるかそれとも第二の流れを選ぶかによって決まるところであろう。さらにこれらのいずれをとるか構成員各自が真剣にとりくむことが現在の任務とされるところであろう。

芸　術　談　義

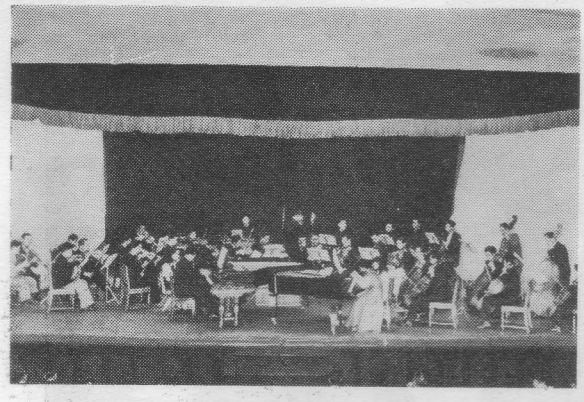
この項に芸術談義と名付けたのは、われわれは芸術に関して何か偉そうなことをいう程、従って芸術論と名付ける程大層なことを物する資格はないが、オーケストラにあって、その10年の歴史をみた時、やはり芸術という分野に入ると思われる問題について何か書いておき、この記念誌を読まれる人々にも一緒に考えていただきたいと思い、談義と名付けて一項設けてみたものである。

第一にとりあげるテーマは、歴史を眺めた場合に、神戸大学交響楽団の演奏スタイルに一つの特徴があると思われる点である。この点については、戦前、さらに戦後の再生期のことは音に関する記録が不備なので先輩の話などによるものであるが、少なくとも一つのスタイルを持っていることが感じられる。そのスタイルというのは柔かい音色と高度な合奏技術に支えられるもので、これを音楽上の意味で間違っているかもしれないが、話をわかり易くするために〝フィルハーモニック〟なスタイルと称したい。これに対比するものとして考えられるのはエネルギッシュな音量と個性的な独奏技術にその特徴を持つものとして〝シンフォニック〟なスタイルである。さらにそのスタイルの特徴を詳しくすると、フィルハーモニックスタイルにあっては、音色がこもった、全体としていわゆるムードがあり、その良いアンサンブルとともに調和のとれた演奏を行ない、この場合協奏曲とか合奏曲、作曲者ではメンデルスゾーン、サンサーンス等の場合、その長所は最高度に発揮されると思われる。そのかわり曲の気分に乗るワルツとか、唱うためにリズムを崩したりすることは下手なのである。一方シンフォニックスタイルにあっては、音色が明るく澄んでおり、そのため非常な響き、すなわち音量も大きく、個人的独奏技術と共に、エネルギッシュな、良く唱う演奏を行なう。このスタイルでは交響曲とか派手な管弦楽、作曲者ではドヴォルジャックやチャイコフスキー等の豪壮な曲、唱うべき曲に適しているといえよう。

この四～五年間の演奏曲目とその出来栄えを考えると、神大オケは明らかにフィルハーモニックスタイルをその特色とし、従って曲目もサンサーンス、メンデルスゾーン、シューベルト等が比較的多く、またそれぞれ好評だったようだ。

ここで一応結論めいたことを少し書いてみたい。もちろん結論とはいっても、あくまでこの場限りのもので、その当否は大方の裁を待つものである。

神大オケの特徴である演奏スタイルはオーケストラの一つのゆき方であると思う。すなわちどの作曲者のものを演奏し



昭和27年　第二回定期演奏会におけるピアノ協奏曲

ても同じように聞える。その演奏を聴けばこれは神大オケだなということが判るということは、ある意味で芸術団体のあり方として立派なものである。しかしオーケストラは単なる合奏団ではない。演奏が作曲者の意図したところを聴衆に伝える目的を持っている以上、オーケストラは当然合奏のみでなく、音の洪水に作曲者の意図をもり込まねばならない。多くの人間が集まってシューベルトなりベートーヴェンなりを神大オケ流に鳴らしているうちはまだ合奏団の域であり、シューベルトにも神大オケの良さが、またベートーヴェンにもその良さが異って表現されるべきであると考えるのである。もちろんこれが理想であることは承知の上であるが、現実にはその時の団員の風潮次第でオーケストラはフィルハーモニックスタイルにもシンフォニックスタイルにもなり得るもので、そのどちらが良いかは、多分誰にもいえないことであろう。そこでこの問題もこの場に記すことによって問題を提起するに止めることにしたい。

第二のテーマは学生オーケストラが芸術に対してどうあるべきかという問題である。

10年の歴史を観る時、われわれはこの問題が事あるごとに紛争の原因となっていることを知るのである。一部は個々の歴史の面に具体的に現われている。しかしここで項を改めて書いておくことは歴史の具体面に現われて来なかったその種のことを想像させ、また現在その点が如何に現われているかを知る一助になると思うのである。

歴史上ある時はいわゆるトラに関して、またある時は金をとって演奏をすることについて、また先輩達が山を降りて神戸市中で演奏会を開き始めた頃の理論派と行動派等種々の現われ方としたわれわれの〝交響楽団かクラブか〟という団体の根本矛盾が現在は芸術か組織かというところで現われているのである。

最近部員の急激な増加とそれに伴う技術的アンバランスで一方にかなり高度な熟練者が音楽面のみを良しとし、他方未熟練者はむずかしい曲をやっても弾けないので面白くない、しかもその数も従来よりずっと増えている点にオーケストラ全体としてこの問題を論じなくてはならぬ段階に至っているのである。この点を少し詳しく書くと一方われわれの団体の目的は音楽を演奏すること、それを向上させることにありとするもので、この立場からは組織とか人の和は手段であり、従ってある程度の注意を必要とするものの、そのために音楽面が制約されることがあってはならないとするものである。他方クラブ組織を重視する人はわれわれの団体は大学のクラブであり、従ってそのクラブ的性格を重視するものである。この立場にあっては音楽は手段とまでいわずとも少なくとも人の和等に優先されるべきものでなく、音楽に関しても芸術というよりもそのクラブ的性格を拡張して民主主義のルールに従ってその種々の問題も部員総会の決定に従うというのである。

もちろん、この場合もわれわれとしてどちらが良い悪いと議論することはできないし、その意志も持っていない。しかし何らかの見解を示すことは無意味ではないと思う。

字句より判断すると両者の立場は非常に異っているような感じを与える。が実際問題としては芸術を重視する場合でも人の和といったものが無視されることはできないし、クラブ組織を重視するといっても比較的の問題であり、音楽面を捨て去るわけにはゆくまい。

芸術を重視する立場の長所はその時のオーケストラの水準の向上が最高度に発揮されるところにあり、短所はその水準に遅れたものが置き去りにされる点である。一方クラブ組織に重点を置いた場合はその逆に人の和はうまくゆくかもしれないが、そのために芸術の水準といったものは下がることはなくても十分に発揮されるには短所となる恐れがある。

上は極端の場合で現実には他を制約する程の違いはないのであるが、最初の文章を読んで対立を感じる人はここで見解を改めてほしいと思う。われわれの理想はやはりその長所をとり入れ合った点にあり、見解の対立が些細な点でみられたとしても本質的にはオーケストラに対する情熱という点で氷解すべきものでその意味で深刻な対立を想像するのは間違っているのである。対立が激しくみえればみえる程その和解への道は近いことを記して、この芸術に対する二つの見解を並べ述べる意図を持っている項の結びとしよう。

世界に誇る描画材料

サクラクレパス
サクラマット水彩
サクラ油絵具

クレパス本舗　株式会社 桜商会

取締役社長　西村俊一

本　社　大阪市東成区中道元町一丁目一番地　電話大阪（98）1241（代表）—7番
東京支社　東京都千代田区神田三崎町二丁目一番地　電話東京（331）4221（代表）—5番

結　　び

このようにいろいろな角度から神大オーケストラというものを眺めてみると、今後神大オケの発展する方向は多少浮び上がってくると思われる。

しかし大切なことはわれわれ一人一人が神大オーケストラというものを歴史的に客観的にとらえ、フランクな態度でこれを真面目に批判し、オケの発展のため実際の行動に移して行くという態度であろう。

戦後十年という長いようで短い期間のうちで、すでに〝オケタイプ〟という人間像ができ上がっていると思われるのであるが、これらの人々のがそのまま今後神大オーケストラに通用するであろうと考えるのは甚だ疑問である。そればかりか部が質、量、両面で変貌して行くにも拘らず、オケマンに対する評価の規準は少しも変っていないことを示すもので、むしろ憂かれるべきことではなかろうか。

これからのオケには、過去のものとなりつつあるこのオケタイプといわれる人々の長所短所、特徴を純客観的に眺めフランクな態度で評価できる人間が望まれ、彼等によってこそ新しい発展が期待されるのである。そしてそのような人間が多く出てきたとなきの神大オケのことを夢みて、その痛快さに思わず微笑みたくなるのである。

本誌製作の主な経過

神大オーケストラが発足して数年後、すでにオケ文集、機関誌、日誌の製本化、アルバム等、発行しようとする動きがみられたが、本誌作製の案もこのような中から出てきたのである。それが十周年を迎えるという機運に乗じて、記念誌の如きものが具体案として出されたのは昨34年12月頃であった。それから、部員間でもいろいろな意見が出された結果、まず記念誌アルバムを作ろうということになり、その企画委員会が設けられ、各方面の調査を行なった。しかし資料が多いわりに費用が少ないため、アルバムすなわち写真帳とすることは不可能かつ不合理であるという意見が強く、6月19日アルバムはとりやめ、本誌製作が正式に決定したのである。

以下本誌製作の主な経過をたどってみる。

昭和35年

4月25日　アルバム発行の企画案が提出さる

4月28日　アルバム企画委員会結成

5月3日　アルバム企画委員会開催（戦後の先輩も数名出席された）

6月初旬　写真屋、印刷屋廻りをした結果、アルバムとすれば総額10万円程度の費用を要することが判った。

6月18日　アルバム企画委員会解散
アルバム編集委員会結成

6月19日　第1回アルバム編集委員会開催、本席上で単なる写真帳では意味がないので、この企画を一応とりやめ、本誌の如き記念誌を発刊することに変更し、同時にアルバム編集委員会を記念誌作成委員会と変名した。
記念誌作製委員会組織の決定。

6月21日　再度印刷所廻りを行ない予算を組む。
この際は、これ程まで戦前の先輩の方々の御活躍振りがわからなかったので、総額10万円でなんとか作りあげようということになった。

6月25日　この計画を部員総会に計り、全員の賛成を得、本誌発刊が決定される。

7月1日　取材部、外渉部活動開始。
（主に戦後の先輩について）

8月16日　取材活動から考えて、大体の編集方針をたてる
取材部は戦前の先輩関係の調査を始める。

8月29日　編集部活動開始。

9月15日～10月15日　試験のため中断。

10月16日　編集活動再開、これより週4回の編集会を開く本格的活動となる。それと同時に戦前の先輩の調査が、実に厖大な計画および活動をしなくては、しきれなくなることがわかり、編集取材両部の大半をこの調査にあてた。
また戦後の歴史の客観的事項の調査、編集に全力をあげた。

10月30日　戦後の先輩との座談会を催す。
戦後の取材活動終了。

11月7日　戦前の先輩についての取材終了。

11月21日　編集締切り

11月24日　印刷所へまわす。

12月6日　完成

編　集　後　記

意欲的なプログラムをもって臨む第10回定期演奏会の猛練習のさなかで、わがオーケストラの10周年を記念して、戦前戦後を通じてオーケストラに関係のある方々に呼びかけ、半年の活動の結果、ここに記念誌アルバムの編集を終えることができ、作製委員一同の感慨は真に深いものがある。

今から45年前の大正４年にワグナーソサエティから出発し、現在に至る間、ザ・オーケストラなる機関誌が出されていたこともあるが、このような企画がなされたことは初めてであり、評価はともかくとして、このような形で編集をやりおおせたことは、それだけでも大きな意義があると思う。

実際にこの仕事にとりかかった者は、委員長をはじめ全員が編集の仕事に未経験であり数々の無駄や失敗もあった。が、この誌発刊の意義と新しいものを生みださんとする自覚が全員の士気を促し、一同活動の甲斐を強く感じたことである。

また仕事をしているうちに歴史を知り、地についた知識と思考によって神大オケに対する議論百出、一時は本誌製作が遅れはせぬかと案じたことすらあったが、こうしてここに編集を終えてみると、今年入部したばかりの部員から、甲羅にオケゴケの生えた４年生に至るまで、オケに対する何か新鮮なしかも確固たる態度が心の一隅に生まれてきているのに気付くのである。

内容的には初めての試みであったため、また資金の関係から写真の少なくなったこと、戦前の先輩の活躍ぶりが充分記載できなかったこと、神大オケ部員、ＯＢの方々一人一人の生の声を入れられなかったこと等残念なことも多くある。しかし皆無の状態からこれだけ調べあげた戦前の通史ならびに名簿、戦後のマネージメント、会計、定期演奏会録、楽器、楽譜の在庫などオケを実際に動かしていく事柄について、また楽しい合宿、いろいろな角度からながめた神大オケのプロフィールなどの記事を作製するにあたってできるだけの努力は惜しまなかった心算である。

今後20年、30年といった時、またこのような企画が再びなされるであろうその時には、このような委員会をもっと組織的に動かすと同時に、今度はできなかったソノラマとか写真でつづる物語など楽しい企画も試みられることであろう。そして10年後には部員全員の声が盛り込まれるようなものを作る準備をせねばならぬと思う。

本誌製作に当り資料、資金、その他の面でいろいろお世話いただいた戦前戦後の先輩ならびに現役部員の皆様編集室にとわざわざ自宅の一室を貸して下さった鈴木さん御一家また大和出版印刷株式会社に心からなる感謝の意を表する次第である。

各員一層、奮励努力せよ、と書かれたユーモラスな壁書を眺めながら。(1960年11月21日)

本誌記載のカットについて

編　集　委　員

委員長　四本喬介（T・三年）

委　員

卒業生	吉田　昭（L・2回）		
	岡田和夫（T・4回）		
	笹井克巳（E・4回）		
	寺岡秀展（J・7回）		
四年	藤原　興（B）	長谷川昌治（E）	
	堀　俊男（E）	水垣　健（J）	
	鳥山　喬（B）		
三年	野村裕二（T）	的野浩子（P）	
二年	尾上正紀（J）	中島良能（B）	
	倉持建三（T）	宮出文子（P）	
	中村節子（P）	藤田智恵子（P）	
一年	曽野健三（T）	笹井邦彦（T）	
	石村　緑（L）	俵　美恵（P）	
	宗石美穂（S）		

この袋は戦前卒業生の寄稿用です。

本記念誌の発行の目的は、戦前の先輩諸氏に、神戸大学交響楽団の成り立ちを現況を知って頂き、又現役部員も、その前身の歴史の大略を理解して、戦前、戦後のつながりを復活する事に、その大きなものがあります。が、この度の記念誌発行を機会に是非戦前の方々にも、御寄稿頂きたいと望んでおります。

内容は、戦前御活躍当時の思い出に加えて、現在の神オーケストラに対する御感想、御批判なども併せて御書き頂ければ幸に存じます。

左記の要領で多数御応募下さるよう御願い致します。

尚印刷が出来上りましたら、直ちに御送り致しますので、この袋にお入れ下さい。

記

一、字数　原稿用紙(四百字詰)四～六枚。

一、締切　昭和三十六年二月二八日。

一、送り先　神戸市灘区六甲台町
神戸大学交響楽団記念誌作製委員会